

三幕目

午 九時 高館庭茶室の場

本舞臺一面の平舞臺、正面三間の間上の方四尺位に水屋綺麗に鋳り、是に水桶其外の茶道具好みの通りを柵に並べ、真中の所三尺塗下げ瓦燈口、太鼓張の襖明たて有り、是より下の方すつと塗壁にしていと風雅なる下地窓、此前に利休形の刀掛に刀かけてある事、此遊り能所に大花溜の花瓶に白玉椿大分入れてあり、何れも惣體茶壁にして自紙の腰張、上下折廻して二間の所、上手は障子下座の所杉戸、都て高野の屋敷圍ひ次の間の體、爰に佐五八袴なりにて料理人の拵へ、幸内、喜多蔵兩人同じく袴形下役人の拵へにて居並び、鼓のしらべかすめたる雪おろしをあしらひたる鳴物にて幕明く。

佐「折悪敷今日は雪故大分冷るではござらぬか 幸「左様でござる、雪は豊年の貢と申せど日動致す我々には、大の禁物でござるて 喜「イヤ貢かは知らぬが拙者杯は寒うて身動きもなりません 佐「しかし餘程小降りになつた様子ではござらぬか 幸「時々止んでは又降り出しますが、夜に入つたなら大降りになりませうて 喜「いや降るのふらぬと我々共が傾城買に參つたやうなものでござるて 佐「コレサ、其雜談は取置で、此度大殿様には御本家上杉様の御下屋敷へ、新に御座所の御普請出来にて、いよ、此十九日にはお引移り、夫故に日々御暇乞に大名衆がお入ある故、料理方はこつばいに成るが、しかし又鯉節から味淋醬油其外諸式の掌握ものが澤山あるゆゑ、ばアを言ふ所ではない 幸「左様、魚類はたつばい身所迄もならべ切込み、四斗樽の儘さつくとお流れになる故、お互ひに女房子供は仕合と申すもの 喜「又昨日近江から來た源五郎鮎のあらを貰つて往て、南蠻裏に致したら誠に結構な味でござりました 幸「今日は又

お内輪計りで御茶をば出しなさると言ふ事だが、何か御趣向でも有るのか知らん 佐「されば翌日は上杉様が御出で、當殿様が御亭主役でお茶が出る筈、御合役が皆お茶人故今日は其下稽古に大殿様が御上客で、お蘭の方様と竹齋どのがお誂役、今漸くお會席を濟せた所是からがお茶になるのでござる 幸「左様でござるか、しかし大きな聲では言はれぬが、大殿様は御茶が不得手と言ふ噂ではござりませぬか 喜「いかにもお茶の方は大不得手でござるが、其替り欲と意地のわるい方へかけては大の得手でござる、けふの茶の湯の御手前も首尾能いけばよいけれど、是はしたり左様の事は船中にては申さぬ事にて候 三人「ハア、ハア、ト此時はたくと音して勝手口を明け、茶道春齋茶道の拵へにて竹の花活を持ち出て來る、跡より高の師泰袴羽織若殿の拵へにて白玉椿の枝を持ち追かけて出來り 師泰「うぬ憎い奴めが 春齋「どうぞ御免遊ばして下さりませ 師泰「おのれ逃る連にござうや、夫へ出い手は見せぬぞ、ト有合ふ刀掛の刀を取て抜きかける故、佐五八始め三人是をとめながら 佐「先々わが君 三人「おしづまり遊されませう 師「ヤア不吉を仕出す不届やつめが 春「此春齋には何か兎相を致しましたか 師「オ、今床へ差す白玉の此椿を、此奴めが落せし故差當つて差支に相成るわへ 春「イヤ、私ではござりませぬ、御前がお落し成されたのでござります 師「まだ、申すか口ごたへ致すきつくわい千萬、トぎせいするを佐五八とめて 佐「其お怒りは御尤ではござりまするが、春齋が不調法平に御用捨の儀 三人「とも、願ひ上げまする、ト皆々よろしくわびる、師泰思入有つて 師「佐五八始め皆の者が詫る故ゆるしたけれど、今日の茶席に玉椿八千代を壽き父を祝せし此花を、此奴が兎忽で落せしは第一不吉、ア、何とやら心が、りナ 佐「何さまはお心懸りでもござりませうが、元よりもろき花なれば落ました迎あながちお心ざはりにも相成ますまいかと存じます、又是

なる花溜に澤山仕込置きましたれば、何れ成共思し召に叶ひましたるをお差かへ遊ばされませ、ト件の花溜を兩人顔にて差圖する、是にて兩人師泰の前へ持て出る事、師「オ、能心付た、トあちこち花を見る思入、佐五八こなし有つて、是なる枝が花と申し木振と申し、よろしいではござりませぬか、トとつて出す、トドレ見せやれ、ト師泰取て持かへ、いろく詠める内花仕懸てばつたり落るゆゑ、師「又もや花が、トホツト思入、春齋是を見て、師「夫又御前までござりませうネ、ト言ふをかむせかけて、是はしたり春齋殿だまり召れい、ト是にて春齋尻込をする事、師「返すくも心懸りナ、オ、此上は延喜直しに此奴が素首まつこの如くおとしてくれん、ト刀を引抜き春齋に切懸る故、春齋逃退くを追まはす、佐五八皆々入亂れになり、ト、真中にて緊り留る、師泰真中にて刀をふり上るを道具がはりのしらせ、春齋下手にふる、皆々引ばりよろしく此道具ぶん廻す。

本舞臺正面上手より九尺程、奥行四尺程にして四ツ谷丸太の柱、屋根葺おろし、赤松の縁竹打ませの木小舞切板、正面しやくりのぬぐひ板高サ常足位、下手の樓に下地窓下通りはき板、此上手跡へ下げてそげ板檜垣の家根付塗壁の塀、真中能所に角がらの庭口狐格子をたて、何れも惣體中ぬり土引すり壁、下手下座の所迄盡心に折廻して塗壁の塀、真中能所に織部形角形の石燈籠、此側につくばひの手水鉢柄杓添へて有る事、下草樹木共雪降り積り有る體にて、二重の上に好みの手爐炭盆、圓座を置き、能所に路次笠をかけなど都て高野家庭内の體、腰懸に師直被布着ながし好みの形、お蘭の方着ながし妾の形、何れも路次下駄にて圓座を敷かけて居る、下手に竹齋茶道の拵へにて控へ居る見得、雪おろしにて道具中端より九ツの時計にて道具納る、ト詠への相方にて師直思入有りて、

師「今打ちしは九ツなるか、竹「御意の通り丁度正午のお時計でござりまする、師「ハテ扱短日な事ぢやな、師「雪ぞら故猶更時刻も分り兼ねます、師「折悪敷今日は寒氣も殿しいやうぢやナ、師「御意の通り雪故別して冷えますやうでござりまする、竹「雪と申せば御前さま御覽遊ばしませ、此燈籠へ薄雪の積りました風情は何共たとへやうがござりませぬ、師「何さま雪と申すものは趣の有るもので、詩歌に心を寄せる者は譯て愛するものぢやナ、竹「左様さうにござりまする、しかし又此燈籠はいつみても始めて拜見致すやうに思はれます、師「予も左様に思ふて、兎角見さめのする品が多いものぢやが、是らは随分名物と申してもよいではないか、竹「號けましたら何とか申す節もござりませう、どうも寂のあちはひと申し、火ぶくろ棹の工合、何所からどこ迄申分はござりませぬ、一體は何れより御手に入りました、師「是は前かた相州が響應司を勤められた時、予が茶事を好むを知つて、かやうの品を穿懸いたして態々持せ越したのぢや、竹「何さま左様でござりませう、相州公にも格別お心に懸られ随分と凝つた御香物でござりまする、餘程の御散財と相見えまして、師「餘程時代も見えますがいつ頃のものでござりませう、師「さればさ鎌倉時代の物かと予は鑑定いたしました、竹「成程はお目利でござりまする、遠州公にござりました重忠所持と申す燈籠も、矢張此形でござりました、師「予も是を珍物と秘藏いたして居る、竹「御秘藏遊ばししても嘲りはござりませぬ、毎度お客來の折柄はどなた様も御賞美成されて、ござりまする、師「マア燈籠の御咄は兎も角も、最前より餘程の間、モウ御案内が有りさうなものでござりまするナ、師「されば何を致して居るやら、餘り延引いたすではないか、ト此時奥にて大聲の聲にて、大い、「まづく御しづまり下さりませ、ト是を聞付け、竹齋思入あつて、竹「何やら高聲に聞えまするが、誰やらが若殿の御前を損ねましたか知らん、師「又例の疝癖で有らう、竹齋

其方勝手を見てまわれ 竹「御意ではござりまするが夫は餘りの失敬故 師「イヤサ他人交すの内輪の茶會、苦しいない見て參れ 竹「ハッ畏まりました、ト此時かすめたる雪おろしになり、日覆より雪ちらちら降す事、竹齋見て 竹「是は又散ついてまわりました、ト路次笠を取てかざし、右の鳴物にてよろしく上手へは入る、跡兩人残り、師直空を見やり 師「イヤ又大分降つてまわつた 師「雨とは違ひよい景色でござりまするわいなア 師「まだくごんな事でない、今度予に引移らせんと申して本家上杉の下屋敷へしつらへた座所の普請、また庭内の手入も能く行届き、大好者に樹木の植込み、築山泉水の模様迄、感心致す程能く出来致した故、はやく其方に見せたいわへ 師「イエく私に御下屋敷に參る事はいやでござりまする、産れ付て淋しいのは大嫌でござりまする故、お出遊ばすなら御前お獨りお出遊ばしませ 師「又其様な愛想づかしを申すが、十三日の引移りと極りしも、其方がいやと申す計りに風邪と申して十九日迄延したのぢや 師「夫にいつぞや御前のお詞にも、其方がいやならいつ迄も爰に居やうとおつしやつたは、アリヤお偽りでござりまするか 師「偽りではなけれ共、是非とも今度引移らねばならぬと言ふ子細は、去年三月殿中にて予に手を負せし鹽治高貞、切腹仰付られ家断絶せしを、其家來共が無念に思ひ、徒黨を結び敵討をなさん 企有るとの時、夫故小林平八が片時も早く上杉の下屋敷へ引移れと、此程より數度の勸め、尤かしこの屋敷は構へ堅固に出来たれば、たとへ何様浪士共が徒黨なしても及ばぬ事、枕を高く安臥致し居らるゝは 師「サア夫ぢやによつて、イエモウ其様に御案じなさるゝも御無理ならねど、中々鹽治の浪人杯が敵を討たうと言ふやうな、賊の武士はござりませぬ、承れば國家老の由良之助とやら言ふ者も、遊里通ひの酒と色とにうつなき愚者との噂でござりまする、高取りさへも其通りゆる、跡は取るにも足らぬもの、要心過るもか

へつて人の物笑ひかと存じますわいなア 師「予も左様存するて、高の知れたる小藩の家來共、何程の事を仕出さん、平八めが臆病風に誘はれたやら、兎角怯氣付ての事ぢやわへ 師「大ぢやによつてお引移り遊ばさすと濟む事故、只此上は御前さまのお心お一ツでござりますわいなア 師「左程に其方がいやがるもの、何なりと申し延して置かうわへ 師「本にお嬉しう存じますわいなア、ト是より詠への獨吟になる、
 「散る花と見しや夫ともわかぬのも、ほんに思へば風寒く、身に染々とまた春ならぬ庭もせや、
 ト兩人是を聞く思入有つて 師「ア、唱歌は隣家の様子、ハテナア、オ、さうで有るはず、けふは隣に内客が有つて催しが有ると申す事有つたが、藝人も參つて居ると見えるテ 師「ほんに左様と見えませぬ
 師「あれは長唄とやら申すのぢやの 師「御意にござりまする 師「ハテ風情ある音色ぢやなア 師「マア何も御意遊ばされすと、お聞遊ばしませいなア、
 「千世とふる共變らぬ色の、松の梢にむつた花、咲ちらら〜白妙の、
 ト此文句の内兩人よろしくこなし有つて 師「ア、長唄はよけれど、餘り長く待せ居るので手先がひえこいて来た、ト手あふりにてあたゝめるこなし、日覆より雪ふるつきおろしのあしらへ 師「ほんに又降つて參ります故猶冷えませう、私がお手をあたゝめて差上げませう 師「ナニ其方が手をあたゝめてくりやるとか 師「サアこちらへ御出遊ばしませ、
 「肌にふれたる夜手の、香取もいつかたきしめて、はなれがたなきぬくめ鳥、
 師「少しはおあたゝまり遊ばしましたか 師「オ、若い者とは言ながら、そちの手のあたゝかさどうもいへぬわい 師「アレくすぐつたうござりますわいなア 師「マアじつとして居やいの 師「御前さまが悪い事なされま

す故、私も顔があつうなりましたわいなア 師「子も又きつうあつうなつたわへ、

「あた、められておとなしう、憎うないもの床しさ故に、うはめ立つさへあのやうに、豊の情の貢物、積り積りし戀の山、

ト此文句の内竹齋出て来り、此様子を見て氣のわるきこなしいろくをかしみ有る事、ト、兩人寄添ふ是を見て竹齋ウント言つて倒れる、是を獨吟の上げ、

「風に枯木の雪の下折れ、

ト兩人是に恟り驚きわかれる、竹齋おどろきおき上る事、ア、モびつくりしたわいなア 師「私も恟り致しました 師「不粹なやつぢやな 竹「ツイ此雪に二りまして、をしい幕をむちやに致しました 師「疎忽者め

竹「へい、恐入りましてござりまする、ト此時合圖のどら鳴ゆる 竹「アリヤお詣入でござりまする 師「オ、手水致さうか 竹「ハア、トつくばひの柄杓を取て水をかけるこなし、師直手を洗ふ事宜敷有り、竹齋

じつと見て 竹「御前さま 師「何ぢや 竹「よう御洗ひ遊ばしませ 師「こいつが何を申す、ト柄杓を取て竹齋に本水をかける 竹「オ、つめたい、トぶるくふるへ、くたくと成てんと下に居るを木の頭 師「たわけ

ものが、ト是をきさみ、雪おろしはげしく雪ふる、お蘭ははな紙を出す、師直手を拭ふ此仕組よろしく、ひやうし幕。

四幕目

未晝八ツ時 葉泉院第舎の場

本舞臺平舞臺向ふ白地中形の襖、上下杉戸、向ふ揚幕同じく杉戸の出遣入り、舞臺花道共一面に薄縁を

敷き、都て藝州侯下屋敷葉泉院御殿の體、爰に侍女おうめ、腰元おく霜、みゆき、夜雨腰元の形の上に白地の浴衣を上張になし、手拭をかむり煤拂の拵へ、流川白髪かつら袴壹本差奥侍の拵へ、是を腰元四人胴上にして居る、目出たくの唄にて幕あく。

四人「目出たくの若松さまよ、枝も榮えて葉も茂る、お目出たやサツサ御目出たや、トあちこち歩行、ト、突放しに流川を落す、腰をぶちし思入にて 流川「アイタ、ト、年寄を胴上にして突放しにするといふが有るものか、アイタ、ト、

「突放しにする氣はなけれど、ツイ寒いので手がこゝえ 夜雨「夫であなたを落しましたが、どこぞお怪我でも成されはせぬか 夜雨「しかしお煤拂ひの胴上は昔からお家の御家例、うめ「一ツ間違へば侍は痛い腹をばきらねばならぬ、胴上の突放しぐらゐは何でもないことござり

ます、痛い顔を成されませぬ 流川「イヤ痛い顔をせずには居られぬ、どうかして胴上の敵をとらねばならぬ 夜雨「オ、敵といへば御家老の大星さまを始として、御家中の其内で忠義なお方が寄あつまり 夜雨「亡き殿様の敵を討つと御噂がござりまするが 夜雨「其後なんの御沙汰もないが、どうなつたのでござりませう

「大星さまは大層な智慧の有るお方だとお咄に聞いて居りましたが、なせ殿さまの敵をばお討ちなさらぬのでござりませう 流川「未時節が来たらぬ故ぢや、本國赤穂を離散してより大星氏をはじめとして、一味

の諸士が世を忍び、千辛萬苦してござるも敵を討たうばつかりだ 流川「そんならいよ、噂の如く、トおうめ思入れ 流川「今に敵討がござるであらう、ト此時奥にて 戸田「ものいへば唇寒し秋の風 流川「ア、ア、

聲は 四人「アリヤ戸田のお局さま、ト誂への合方になり、奥より戸田の局欄襟局の拵へにて出で来る 流川「コレハ、戸田殿でござるの、今日はお家の御嘉例、おす、取の御祝儀 四人「お目出たう存じます

「澁川さまには御老體にて、此大雪に早朝より御煤取のお見廻り、さぞお寒うござりませう。」「寒いと申せば戸田殿には、何か寒いとおほせられたナ。」「御存の通り後室様は歌俳諧が御好故、お相手を致すので、當時名高い宗匠方の秀逸を覚えまして、今口ずさみしあの句は、物言へば唇寒し秋の風と、翁が吟にござりまする。」「シテ其翁と申すはいづれの仁でござりまするな。」「是は伊賀の出生にて芭蕉翁桃青と申す、當時名高い俳師にござりまする。」「ハ、左様でござるかな、身共は又四日市の稻荷の神主かと思つた。」「アア何をおつしやりまするぞいなア。」「シテ其發句の唇寒しとはどう言ふ意味でござるな。」「只秋の季に言なしたれど、由無事を申しますれば、跡の害になるもの故、口善悪なき戒めにはよい發句と存じられます。」「いかさま是はよいいませ。」「今換ごしに戸田さまが。」「此句を御吟じ。」「四人。」「成されましたは。」「亡君の敵討は他聞を憚る一大事、由無事をおつしやる故、おとどめ申せし翁が名吟。」「成程うかつに物言へば。」「唇寒し秋の風。」「以後はきつと慎しみ申す、ト澁川辭儀をなす、ばたくになり侍。」「袴壹本差、錠口番にて出で来り花道にて。」「ハッ申上げます。」「何事でござりまする。」「御家老大星由良之助殿只今御入來にござりますが、是へ御通し申しませうや如何はからひませう。」「其お出を此程より、後室様にはお待ち兼ね、直に是へお通し申しませう。」「ハッ畏つてござりまする、ト引かへして向ふへ這入る。」「スリヤ御家老の大星氏が只今是へ御入來とな。」「お出迎ひをいませうか。」「御嘉例とは申しながら、おす、取の其形で御出迎ひは見苦しい、しばらくお次へお出成され。」「左様なれば私共は、お三の間のお掃除がまだ残つて居ますれば。」「此間に參つていたしませう。」「私はまだ大星さまを見上げた事がござりませぬが、是に居て御家老さまのお顔が見たうござりまする。」「ほんに其方は新參故大星さまを知らぬ筈。」「お年は四十の上なれど、どこやら御若い御家老さま。」「しかもお顔はたくましい、よい御器量でござりまする。」「其お方が敵討を成されますのでござりまする。」「是はしたり又申すか、今戸田殿が言はれたる唇寒しを忘れしか。」「ヘイ、恐入りました。」「左様なれば。」「四人。」「私共は。」「お次へ御出成されたなら、置箱殿は後室さまへ大星殿がお出の趣、申上げて下さりませ。」「畏りました。」「オ、唇寒しは忘れ申さぬ。」「サア参りませうわいなア、ト唄になり、澁川先に置箱、みゆき、夜雨、おうめ思入れ有つて奥へはいる。」「後室様にはお待ち成されし大星殿、計らずお入に嘸御悦びでござりませう、最早御入に間も有るまい、是にてお出迎ひ致しませう、ト詠への合方になり、向ふより由良之助袴羽織大小にて、以前の侍付添ひ出來り、花道にて留る、戸田出向ひ。」「これは、大星殿には此雪中にようこそその御入來。」「さいふは局戸田殿か、御出迎ひ御苦勞千萬、ト侍を見かへり、最早是にてよろしうござる。」「ハッ、ト引返して這入る。」「今日は御煤取にて取ちらしござりまするが、先々是へ。」「然らば御免、ト由良之助舞臺へ來り、戸田下手へ下り、由良之助會釋して上手へ住ひよろしく思入、やはり右の合方にて。」「扱其後は意外の御無音、葉泉院様の御機嫌をも不伺失敬の至りにござるが、御健勝にていらせられまするか。」「秋の末より兎角おしつらい勝にござりましたが、此程は御持病御平癒遊ばして、御機嫌宜しういらせられます。」「夫は重疊な儀でござる、戸田殿にも相かはらず御無事にて悦ばしうござる。」「又あなたにも御壯健にてお目出たう存じます。」「此程は健かなるが、京地より下りし折は、かの水替りのゆるなるか三度の食も進みかね、心わるうござつたも、樂川の印見え當今全快に及びしが、今

「澁川さまには御老體にて、此大雪に早朝より御煤取のお見廻り、さぞお寒うござりませう。」「寒いと申せば戸田殿には、何か寒いとおほせられたナ。」「御存の通り後室様は歌俳諧が御好故、お相手を致すので、當時名高い宗匠方の秀逸を覚えまして、今口ずさみしあの句は、物言へば唇寒し秋の風と、翁が吟にござりまする。」「シテ其翁と申すはいづれの仁でござりまするな。」「是は伊賀の出生にて芭蕉翁桃青と申す、當時名高い俳師にござりまする。」「ハ、左様でござるかな、身共は又四日市の稻荷の神主かと思つた。」「アア何をおつしやりまするぞいなア。」「シテ其發句の唇寒しとはどう言ふ意味でござるな。」「只秋の季に言なしたれど、由無事を申しますれば、跡の害になるもの故、口善悪なき戒めにはよい發句と存じられます。」「いかさま是はよいいませ。」「今換ごしに戸田さまが。」「此句を御吟じ。」「四人。」「成されましたは。」「亡君の敵討は他聞を憚る一大事、由無事をおつしやる故、おとどめ申せし翁が名吟。」「成程うかつに物言へば。」「唇寒し秋の風。」「以後はきつと慎しみ申す、ト澁川辭儀をなす、ばたくになり侍。」「袴壹本差、錠口番にて出で来り花道にて。」「ハッ申上げます。」「何事でござりまする。」「御家老大星由良之助殿只今御入來にござりますが、是へ御通し申しませうや如何はからひませう。」「其お出を此程より、後室様にはお待ち兼ね、直に是へお通し申しませう。」「ハッ畏つてござりまする、ト引かへして向ふへ這入る。」「スリヤ御家老の大星氏が只今是へ御入來とな。」「お出迎ひをいませうか。」「御嘉例とは申しながら、おす、取の其形で御出迎ひは見苦しい、しばらくお次へお出成され。」「左様なれば私共は、お三の間のお掃除がまだ残つて居ますれば。」「此間に參つていたしませう。」「私はまだ大星さまを見上げた事がござりませぬが、是に居て御家老さまのお顔が見たうござりまする。」「ほんに其方は新參故大星さまを知らぬ筈。」「お年は四十の上なれど、どこやら御若い御家老さま。」「しかもお顔はたくましい、よい御器量でござりまする。」「其お方が敵討を成されますのでござりまする。」「是はしたり又申すか、今戸田殿が言はれたる唇寒しを忘れしか。」「ヘイ、恐入りました。」「左様なれば。」「四人。」「私共は。」「お次へ御出成されたなら、置箱殿は後室さまへ大星殿がお出の趣、申上げて下さりませ。」「畏りました。」「オ、唇寒しは忘れ申さぬ。」「サア参りませうわいなア、ト唄になり、澁川先に置箱、みゆき、夜雨、おうめ思入れ有つて奥へはいる。」「後室様にはお待ち成されし大星殿、計らずお入に嘸御悦びでござりませう、最早御入に間も有るまい、是にてお出迎ひ致しませう、ト詠への合方になり、向ふより由良之助袴羽織大小にて、以前の侍付添ひ出來り、花道にて留る、戸田出向ひ。」「これは、大星殿には此雪中にようこそその御入來。」「さいふは局戸田殿か、御出迎ひ御苦勞千萬、ト侍を見かへり、最早是にてよろしうござる。」「ハッ、ト引返して這入る。」「今日は御煤取にて取ちらしござりまするが、先々是へ。」「然らば御免、ト由良之助舞臺へ來り、戸田下手へ下り、由良之助會釋して上手へ住ひよろしく思入、やはり右の合方にて。」「扱其後は意外の御無音、葉泉院様の御機嫌をも不伺失敬の至りにござるが、御健勝にていらせられまするか。」「秋の末より兎角おしつらい勝にござりましたが、此程は御持病御平癒遊ばして、御機嫌宜しういらせられます。」「夫は重疊な儀でござる、戸田殿にも相かはらず御無事にて悦ばしうござる。」「又あなたにも御壯健にてお目出たう存じます。」「此程は健かなるが、京地より下りし折は、かの水替りのゆるなるか三度の食も進みかね、心わるうござつたも、樂川の印見え當今全快に及びしが、今

日の様な雪中には、持病の疝氣にて足痛なす、是等は年のせいのごさう
 戸「まだマアお年のせい杯と其様な事おつしやりますと、とんとお似合成されませぬ
 由「イヤ似合ぬ事もござらぬて、最早四十の坂も越し、人命五十の時に進み
 戸「イエー古稀は愚かな事、七十七の御祝ひもツイ今の間のごさります
 由「十七か八十八、頓て此身も百ケ日
 戸「エ、ト兩人宜敷思入
 由「イヤ百歳迄も生きられる、長生したいものでござる
 戸「御長壽に違ひござりませぬ
 由「益無餘談は期しての事、今日某推参せしは、御不音なせしお詫かたぐ、御暇乞に参つてござる、ト是を聞き戸田扱はといふ思入有つて
 戸「スリヤ貴方には後室様へ御暇乞にお出成されしとか
 由「疾より参上なす可きを、彼是繁多に思はぬ延引、最早今日に迫りし故、御目通りを願はんと推参致してござる、ト戸田殿討のいとま乞と言ふ思入にて
 戸「夫はお目出たい事ござりまする、此程より後室様にも、貴方の御沙汰をお待兼故、只今御出の趣きを直に申上げ置きました
 由「夫は御配慮 忝 うござる、ト此時下手杉戸を開け、以前の置箱出で
 戸「ハッ戸田様に申上げます、大星さまを御佛間へ御通し申しまするやう仰付けられましたござります
 戸「承知しました、ト由良之助へ向ひ
 戸「只今お聞成された通り、後室様より御沙汰なれば御奥へお通り成されませ
 由「御意とあらば是より直に
 戸「後室さまの御佛間へ
 由「イヤ御案内下されい、ト唄になり、由良之助先に戸田、置箱附て奥へ這入る、下座の杉戸よりおうめ何ひ出で来りあたりを見て
 戸「そんなら今のが國家老の大星由良之助と言ふ人か、見るから知慧の有りさうで、ト際勝れし人品骨柄、あの大星が隊長で忠義の者が集つたら、敵を討れぬ事はない、今日後室様へ御暇乞に來たと言のは、何でもくせ事、お次へ忍んで様子を伺ひ、大學様へ知らさうと書懸置た此密書、ト此時後へ澁川出で
 澁「おうめ其文はなんだ
 戸「エ、ト恠りして懐

へ入る
 澁「此文でござりまするか
 戸「不義はお家の堅い御法度、附文などは相成らぬぞ
 戸「イエー是は母の所へおさつをねだつてやります文
 澁「イヤー夫は慥に色文、詮議致さにや相成らぬ、ト澁川取にかか
 戸「イエーさうではござりませぬ、ト懐を押へる、澁川うしろより抱付く
 澁「見せずは身共が言事聞か
 戸「ナニ言事を聞けといふのは
 澁「しはを延して貰ひたいのだ
 戸「エ、モすかない梅干親爺め、ト突倒す、此時文を落す澁川拾つて
 澁「コリヤ是さつさの
 戸「どつこい夫を、ト目出度くの唄、文をばい合ひ立廻りよろしく、此道具ふん廻す。
 本舞臺三間の間平舞臺、向ふ真中登間の床の間、好みの掛物置き花活へ椿を生け、上手登間袋戸棚下手登間、違ひ棚茶道具好みの品を並べ、上方登間附家體佛間正面四枚開きの扉、經机立派な三ツ具足、正面立像のあみだ其外佛器宜しく飾り、正面に眺への位牌、此佛壇の下銀地に蓮の畫の袂、此家體前側兩つま共塗骨障子、下の方銀張りの襖、都て葉泉院居間の體、上手に葉泉院切髪眺への被布衣装、好みの通り後室の拵へ、襦の上に住ひ、傍に鼻紙臺文臺に祝箱のせてあり、前に蒲團附の手爐、銀金物の眞盆など小道具宜敷飾り、真中に以前の由良之助、下手に戸田住ひよろしく床の三重にて道具納る。
 「時めきし春は昔に冬枯れて、今は花なきそぎ尼の、葉泉院の奥御殿、思ひかけ無き大星の入來に、御機嫌麗はしく、
 跡相方に成り、葉泉院思入あつて、
 葉「先頃其方が尋ねし折は、大師河原の邊りなる平岡村とか申す所に假住居の由承はりしが、當時は何れの住居なるぞ
 由「ハッ京より當地へ参りし折は、只今仰せの平岡村

に寓居致し居りましたが、萬事邊土の不都合に、當節石町三丁目の貸座敷を借受けまして、拙者は垣見五郎兵衛、又恩息力彌は同苗左内と變名致し、公用有つて旅宿なす體にもてなし、此程より暫らく寓居仕りまする。「石町邊にお住ひある事、仄に承はりしが、人目を忍ぶ御身故、此方より存じながら御疎遠に致しました。」拙者迎も矢張同様、包む事こそめれ易く、赤穂の藩と知れざるやう言語に迄心を、京地の武士と今日迄計り負せてござりまする。

「言ふ顔つくく、後室は打ながめて、泪を拭ひ、」

ト葉泉院由良之助を見て思入有つて。「其苦心故か三年跡、國の用事にて出府せし其折柄と數ふれば、月日はわづか二年に足らねど、面舞れたる由良之助、日夜心勞察し入るぞよ。」由「ハツ有難き其仰申上げるも仰りあれど、後室様にも以前と違ひ、お髪のお飾り無き故に、三年跡にお目見得申せし其時に替りしお姿、仰無く共御心痛は、お面を拜しまして拙者も御推量申上げます。」後室様をはじめとして數なりませぬ私共迄、二重の帯も三重廻り、身體の瘦を覺えしも、亡き殿様の仇敵、かの方故でござりまする、ト悔しき思入。葉「御思慮深き我君が、殿中において刀傷に及び給ふは能く忍び難き事にこそ、夫も御本意遂げ給はず、其各にて御切腹、遂にお家も改易に、あまたの家中も扶持に放れ、路頭に迷ふを冥途にて、御覽遊ばす我君は、嗚御無念でござりませう、是皆高野師直故、憎しと思ふ一心は寝ても忘れはせぬわいのう、」返らぬ事を繰返し、數珠の玉なす御泪、御傷はしやと落涙なす、折柄うしろに伺ふお梅、襖の音に義金が、見かへる途端に立さる襖、戸田は様子を見てとりて、ト葉泉院口惜しき思入にて泣伏す、由良之助、戸田も是を見て俱に涙にくれる思入、此時下手襖を明け、

以前のお梅そつと伺ふ、由良之助早くも悟りふりかへる、お梅悔りなしてばつたりと襖を、戸田も是へ思入有つて。「折角雪のおいとひなく御入來有りし大星殿へ、後室様は兎も角も私迄が同じ様に、由無き事を申出し、お恥かしう存じまする、ト是にて葉泉院も氣を取直し。」葉「ム、これ迄長途の所、雪風に膚を通し寒かりし事ならん、良金も深く好めばさ、の仕度を申し付けや。」戸「其儀は只今柏木どのへ申付けましてござりまする。」由「好物の御酒下さるは有難うはござりまするが、前申す不快勝に、暫くつゝしみ居りますれば、御無用になし下さりませ。」戸「左様でもござりませうが、今日はお家の御嘉例にて、御す、取の御祝ひ日、肴の仕立もあれば常はつゝしみ有るにもせよ、折角の思し召、一ト口あがつて下さりませ。」葉「春を迎へる煤取も今の此身に、樂なけれど、嘉例の事故良金も、目出度一獻すとしてくやれ。」由「御煤取の御祝儀に参り合せし身の果報、目出度頂戴致すでござりまする。」葉「夫は何より嬉しいわいの。」

ト誂への合方になり、由良之助思入有つて。「其御煤取に付まして、申上げたい義がござりまする。」葉「ナニ煤取に付てとは、そりや如何なる事なるぞ。」由「後室さまへも俳諧の御相手に出でましたる大翁文吾にござりまする。」葉「オ、子葉が如何致せしぞ。」由「本國離散致せしより當地へ参り住居なせしが、浮浪の身の活計にせまり、煤取に用ゆる竹をひさぎ其日の活計を立てしが、昨日兩國橋の邊を竹や〜と呼びながら過りましたを、呼留めましたはかの俳師寶井其角、一別以來の挨拶了つて、大小たばさむ身の上にて、身にはつゞれの衣を纏ひ、見る影もなき有様を、其角も歎息いたせしか、「年の瀬や水の流れも人の身も」と言ひかけましたれば、取あへず、「あした待るゝその寶船」と子葉が付しと申す事、竹を賣る身に成ましても風韻を

捨ざるは、俳諧者流の英勇でござりまする、ト葉泉院思入有つて 葉「テモ面白い其附合、筆記して置きたい故、今一度吟じてたも 由「再吟致すでござりまする 葉「戸田其方は書留めてくりや 戸「ハッ畏りました、

「あり合ふ文臺とり出し、墨すり流せば由良之助、

ト戸田有合ふ文臺を出し、墨を摺り筆を取上る、由良之助見て 由「年の瀬や水の流れも人の身も、あしたまたる、其寶船、ト戸田さらりと書く 戸「年の瀬や水の流れも人の身も 葉「あした待たる、その寶船、ト葉泉院戸田よろしく思入有つて 葉「あした待たる、その子葉が附句は 戸「正しく深き、

「主従心うなづき合ひ、

ト葉泉院戸田顔見合せ、敵討と言ふ思入有つて 葉「ハテ天晴な附句ぢやナア、

「扱こそ今宵本望と、さかしき戸田は推量なし、

ト戸田敵討の暇と言ふ思入有つて 戸「スリヤ夫故に貴方にも 由「お暇乞に参つてござる 戸「扱こそ日頃の一儀調ひ、今宵御本望でござりまするか 由「如何にも兼ての望叶ひ、

「聞くに後室座をすゝみ、

ト葉泉院嬉しき思入にて 葉「オ、本望の時來りしとか 由「ハッ名におふ東都の名所古跡、残るくまなく見物致し、最早日頃の望も叶ひ、明朝都へ立歸る所存故に、後室様に御暇乞に出ましてござります 葉「東都の名所見物なし、日頃の望叶ひし故、暇乞に参りしとは、合點の行かぬ其詞 戸「赤穂離散の其砌、企有りしかの一儀は 由「敵討の儀でござるか 戸「いかにも 由「それは思ひ止りました 兩人「なんと、

「あんに相違の良金が、詞に興も覺果てれば、此方は楚爾と打笑みて、

ト葉泉院戸田呆れし思入、眺への合方になり、由良之助思入有つて 由「今改めて申さすとも御存じの事ながら、本國開城の其砌、御寶藏に貯へ置きし御用金を配分なし、赤穂を立退き思ひく、知邊を便り寓居致し、既に拙者も山科の片邊りへ住むを構へ、勤無き身の心安く、祇園清水知恩院又は愛宕南禪寺、見るもの毎に珍らしく、日毎遊覽なす折柄、若侍にそゝのかされ遊里の酒を呑み習ひ、浮にうかれて浮と言ふ、名を取る程に遊び盡し、原吉田小寺など老臣共が意見なす、その事件には肩をひそめ、敵へ油断す爲と、まことしやかに偽りしも、跡よりはげる後家鞘の言譯さへも差詰り、我身のさびを隠しかね、敵地の様子さぐらんと、東へ下向なしたるも、名所古跡を詠めん爲、上野飛鳥の花は知らねど、三ツ股の月隅田の雪、けふは日黒明日は王子と三月以來見物なし、日頃の望み叶ひし故、遣ひ残りの五百金失敬ながら後室様の御納戸金に献上なし、明朝都へ出立致せば、何日また東都へ参る事やら計り知られぬ由良之助、夫故今日雪中ながら、御暇乞に推参なしたり、今献上なす五百金も、元は御家の御用金故御受納なし下さらば、大慶至極に存じまする、

「明けていはざる良金が、服紗包の金取出し、御前へ出せと見もし給はず、

ト由良之助懐中よりふくさ包の五百兩を出し、葉泉院の前へさしだす、葉泉院思入あつて 葉「赤穂離散の其砌、斧九太夫を始として臆病未練の者を省き、義を鐵石にかためたる、誠心無二の者を撰み、其方親子をはじめとして、徒黨を結びし仇討を、思ひとどまり其儘に、再度都へ歸るとは心得がたき其詞 由「定めて是には深き御所存、有つての事でござりませう、包み隠さず御心底、後室様へおあかし下され 由「別に深き所存ござらぬ、是より都へ立歸り、大小捨て、身は町人となり下るも、今の時勢は侍より

遙に増る商家の生計、されば拙者も商法立て十露盤はかりの目をせ、り、生涯樂に暮す所存、我心底はかくの通り、

「日頃に似合はぬ良金が、詞は誠か偽か、流石は女儀に後室も、附添ふ戸田もはかりかね、ト葉泉院戸田よろしく思入、葉「スリヤ其方は亡君の多年の御恩うち忘れ、企なせし仇討を今此儘にと、まゝる所存か、戸「シテ、徒黨の人数もみな、御身同様變心なし、亡き我君の御無念を晴らす者はござりませぬか、由「まづ、壹人もござるまい、戸「何とおつしやる、由「是を思へば芥九太夫、奥野宗玄森五平太、かれ等は未然を察せしもの、殿御切腹の其礎は、足利殿さへお恨み申し、血氣に早る者共が、只復讐の志のみ、されば拙者親子を始め、二百餘人の徒黨なりしが、月日の立つに随つて、去る物日々に疎しの變へ、一月毎に列をもれ、變心なす者數知れず、當今跡に残りしものは、人数もわづか四拾餘人、頼み少き世の中に、敵討を思ひとまり、習ひに立てし神文を徒黨の者へ返せしが、誰壹人何故と、拒む者も有らざるは、何れも當時の形勢に、浮浪人では活計立たず、大小捨て、拙者同様、町人となる所存と見ゆる、さすればこれが今の人情、御断念下さるべし、葉「スリヤ良金は本心にて、由「いかにも變心仕る、葉「エ、見さげ果たる心よナア、

「頼みに思ふ良金が、心替りに葉泉院、御無念おもてに見えければ、戸田の局は詰よりて、ト葉泉院じつとなり無念の思入、戸田是を見てこなし有りて、由良之助に詰寄り、戸「執事を權に師直殿、悪口雜言なせし故、萬人の爲天下のため、御家を捨て、殿さまが御刃傷に及びしも、桃の井殿の家來たる加古川本蔵に抱留められ、御本望を遂げ給はず、御切腹遊ばせし其御無念はいか計り、君辱かしめを受る時は

臣死すとやら申す事、臣下の者が雪がすば、誰が御恥辱をす、ごませうぞ、赤穂離散の其折は御遺言を御守り成され、さすがは御家老大星殿と後室様と明暮に、お褒め申さぬ日とても無く、先頃東へお下りは、最近々々御本望の時至りし事と思ひ、今日か明日かと御沙汰をば、待ちにまつたる其先に、打つて替りし御變心、あなた計は臆病な、よもお心は有るまいと、思ひの外なる御了簡、女でござるあれ、私は、去年三月殿様が果敢なき御最期遊ばしてより、悔しうて、只の一日此胸に忘る、事はござりませぬ、御家老職の御身にて、あなたは悔しうはござりませぬか、

「女ながらも鐵石にこりかたまりし忠義の一心、適れ健氣と良金が、心にほめてそしらぬふり、ト此内戸田段々由良之助へ詰寄り、煙をたいて悔しき思入、葉泉院も是をじつと見てこなし、由良之助せつなき思入よろしく有つて、由「其砌は我人共無念に思ひしが、今はとんと無念にござらぬ、戸「何御無念にござらぬとは、由「篤と退き考へれば、亡君が御短慮故、戸「なんと、ト合方きつぱりとなり、由「そも、嬰應使の御役を命せらるゝ其時は、殿に限らず何れの諸侯も勝手知れざる事故に、萬端高野師直どのが傳習受けねば勤りがたし、さすれば執事は教師同前、賄賂致すは是禮物、殊には欲心深きと聞けば、他家にまさりて普物なさは、かゝる變にも及ぶまじ、コリヤ亡君の惡きにあらねど、家來共が容赦より、お家を失ふ期に至りしは、下賤の者の譬へに言ふ、一文をしみの百損とやら、既に御相役たる桃の井殿は能き家來が有つたる故、賄賂をもつて事故無く、嬰應使を勤められたり、されどかたくな成る了簡には、本意ならざる事杯と申すやからもござらうが、元より執事は小身故、賄賂を取るは是役徳、其手違ひより殿中にて、御役の差圖も齟齬せしならんが、何やう雜言申さう共、御先祖代々連綿たる臨治のお家を思召さば、御堪忍有る可

さを、御短慮故に殿中にて刃傷におよび、つひにお家は御改易、拙者を始めあまたの家臣、扶持に放れ活計にせまり、今日路頭に迷ふのも、殿御壹人の御了簡、御痴癖をお忍び有らば、今にお家は榮えんもの、申さば御思慮淺き故、さすれば執事師直どのを、さのみ恨む摩もござらぬ、夫故報讐一條は拙者は思ひ止つてござる。

「恐れげもなく良金が、主君をさみなす一言に、戸田の局はこらへかね、

ト此内山良之助よろしく思入にて言ふ、戸田こらへかねし思入にて 「良金殿には名を捨て命をしさに血迷ふたか、利を非にまけて亡君を、さみなすからは聞捨ならぬ、

「用意の懐劔くつろげれば、

ト戸田後に有る短刀を取つて抜きかける、葉泉院是を見て 「コリヤ、局控へぬか」 「テモあまりなる一言ゆゑ、」ハテはしたない控へいと申すに 「其お詞がござりませすば、

「無念をこらへ控へれば、葉泉院は佛間より君の位牌を取出したまひ、

ト此内葉泉院戸田を留る、戸田せひ無く控へる、葉泉院こなし有つて立上り、佛間より詔への位牌を取出し、鼻紙塞へのせ思入あつて 「コレ良金 由」ハツ 「ア、其方は見損せしぞよ、ト詔へ笛の入りたる合

方になり 「わらはは女子の事なれど、是なる亡君尊嚴の御目違ひとなつたるか、女でさへ此戸田は只一日も亡君の、御無念をば忘れぬとは男子も及ばぬ武士の魂、夫に引かへ大小捨て、町入になるとは何事なるぞ、尤も其方は他家に生れ、當家へ養子に参りし故、其身に恩義は薄くとも、家督なしたる大星の家は、代家老を勤め當家においては「無き家柄、養父頼母が目かねにて貰ひ受けたる其砌、子細有つて隣國の松

山殿の御家斷絶、城受取のお役目を亡君蒙り給ひしに、御不快によつて其方が御名代に参りし所、家老二人が棟梁にて、一家中籠城なし城を枕に討死なさんと、

「六具をもつて身をかため、既に戦争にも及ぶ可きを、

ト葉泉院こなし有つて 「其方上下の禮服にて、開門させて禮儀を陳べ、家老二人を説得なし、安々開城致させしは、天下無双の大器量、鹽治どのは通れな能き家來を持たれしと、殿中にても諸侯方が、御賞美有りしと亡君が、常々手柄の御物語、夫より以來政事向も、仁義をもつて人を懐け、慈愛厚きに民百姓、親のごとくに思ふ故、

「赤穂離散の其折も、袖に縫り袂にとり付き、泣き悲みしとはなしにきく、

「其大器量の其方が、企有りとの風聞に、高野家にも用心なすよし、譬へ何程用心なす共、良金歴をとるならば、本意を達せぬ事あらじと、待ちにまつたる大望も、今日のいまとなり、大小捨て、町人になり下るとは何事ぞ、昔の忠義に思ひかへし、本意を遂ぐる所存はないか、

「言へど良金さし俯き、とかういらへも有らざれば、

ト此内葉泉院よろしく思入にていふ、山良之助うつむき居る 「か程に言ふに返答無は、扱はいよく、其方は名義を捨る心よナア 由」いかにも捨る所存となりしは、敵は名におふ大家の縁家に、壹流極めし武夫を數拾人付置かれ、日夜懲固致すよし、味方は高が浮浪人わづかな人数を頼みになし、高野殿の邸宅へ亂入なすとも、所詮本望は思ひも寄らぬ、さすれば恥辱に恥辱を重ね、命を捨て、亡君の御名を穢すは益なき事故、身は町人になる所存、畢竟帶劔致せばこそ、俱不戴天の主君の仇、討ねば武士の名義が立ぬが、帶

劔拾れば平民故、名義の立ぬ事もござらぬ、かやうに申すも全くは命がをしようござります。

「一命をしまし良金が、臆病未練に後室も、爪繰る念珠を捨て給ひ、

ト床の相方になり、葉泉院口惜しき思入にて、手に持ちし珠数を投げ捨て喰となつて

をしまし名義を捨て、變心なすとは斧九太夫に優りし臆病、かゝる不忠の者とも知らず、千五百石與へ給

ひし亡君が嘸御無念にござりませう

「オ、御尤にござりまする、いはうやうない良金殿、亡君御在世に

ましませば、此儘には遊ばすまいに

「せめて不忠の折檻は君に替つて自らが、

「袷がみ引附け後室が、位牌を取てちやうくく

ト葉泉院山良之助の袷がみを引附け、位牌にて打つ、山良之助じつと思入

分に遊ばしませ

「オ、存分にせいでなんとせう、

「又もちやうく打ち給ふ御手を良金おしといめ、

ト葉泉院又打ちする、山良之助思入有つてふり拂ひ、葉泉院の手をとぐめ

は命のかはり故じつと辛抱仕るが、あなたの御手が痛みませう

「替へ此手が折るゝとも、思ふ存分う

たいでおかうか、

「けしきを替て打ち給ふを、跡のさはりとは局はさへ、

ト葉泉院又打たうとするを、月田思入有つて葉泉院をとぐめ

ばす其命をしまし良金どの、差て恥共思し召すまい、又御持病のおさはりゆる

アお待遊ばしませ、

「押留むれば後室も、位牌を頂きかたへに置き、打しをれたる良金が、姿を見れば何故に、かゝる心に

なりしぞと、主従泪にくれ給ひ、

ト月田、葉泉院を留める、山良之助はじつとうつむきある、

「かへすぐも残念なのは、あまたの家來も有りしかど、斧九太夫、奥野宗玄かれらにひとしき者のみに

て、今良金が變心なせば、最早外に徒黨を結び、君の御無念晴す程の器量有る者豈人もなし、此儘むなし

く過行かば、鹽治家に人らしき家來は無かと諸家方の、笑ひものになるのが悔しい、御縁家ながら御當家の

御家來衆へも面ぶせ、嘸我君も冥途にて御殘念にござりませう、月は替れど御速夜故佛間へ參つて御回向

なし、君をおなぐさめ申しませう

「最早是より亡君の、御跡訪ふより外はなし、申出して詮なけれど、

妻子眷族養ひし、其君恩を忘るゝとは、民百姓におとりし事、鋤鋤とれど義によれば、命をしまぬ百姓氣

質

「田の面にうつる月ならで、人の鏡の武士が

「弓矢は取れど案山子同然

「引板の鴨子の音におち

つと言ふ、山良之助思入有つて

「ア御勘當を蒙れば、これ今生の御暇乞、

「見かはす顔も憎しと、思へど主従三世の別れ、

ト山良之助、是が別れと言ふ思入にて、葉泉院の顔をじつと見る、葉泉院も山良之助を見て、ホロリと思入

有つて顔をそむけ

「ふたゝびおもては

「合さぬぞよ、

「位牌を守護なししづくと、佛間へおもむく葉泉院、手は合さねど後影、心で拜む暇乞、

ト此内葉泉院位牌を持ち上手家體へはいる、是にて前側へ障子を建切る、山良之助跡を見送り、落涙の思

入戸「ドレ私も御佛間へ、

「續いて席をたつ戸田の、袖をひかへて良金が、

ト戸田思入有つて上手へ行懸るを、由良之助袖をひかへる 由「アイヤ戸田どのお待下され 戸「何御用かは存
じませぬが、後室様の御用もあれば 由「イヤ決して御手間は取らさぬ程に、暫くお下にお出下され、

「いふに是非無く座について、

ト戸田せひなく下に居て 戸「シテお止めなされしは 由「別儀でもござらぬ、そこ元に頼み置きたき此一封、

ト懐より状程の封じ物を出し 由「葉泉院様御立腹ゆる、申出す折なくて差控へ居つたるが、是は拙者が

此程より東都の名所古跡を尋ね、其時々つたなき發句をしるし、首尾と、のひし東日記、御風流はお好き

の道、雨の夜雪のつれづれに、御一覽下さらば御感みにもならんと存じ、持参なしたる此一封、先刻呈

上 仕りし、此金子諸共に御預り置下されて、程を見合せ、御機嫌の遊はしき折、二品共葉泉院様へおあ

げ下され、ト戸田思入有つて 戸「夫はお易き事ながら、再び詞は交さぬと仰有りし上からは、大星どの

のお頼みでは、お取次は致されませぬ 由「其お断りはさる事ながら、包の内は某が、書つたりたる日記

の外に、勿體無くも亡君の御書物も封じ有れば、明ていはざる包もの、金子諸共戸田どには、お預り置

下されい 戸「お心有りげな封じ物、日記の外に亡君の御書物が有る事なら、お取次いたしませう 由「夫は

千萬忝ないが、日記は身共が隨筆にて、他聞を憚る事をも認めあれば、御直覽下さるやう 戸「申上げ

るでござりませう、

「かたへの手箱へ二品を、仕舞ふ折しも打出す、時計の数も未の刻、

ト戸田有合ふ手箱へ二品を入れる、此時八ツの時計なる 由「アノ時計は未の中刻、最早おいとま 仕ら

戸「シテ又是より東都へは、いつ頃御出府成されませるな 由「されば都へ立返れば、町人となる此良金、

手なれぬ事の商法に、いつ又東都へ参られやうか、老少不定の世の中に、今日別れては戸田殿に、手前は

再び逢はぬ心、さすれば是が、ト愛ひの思入有つて 由「イヤサ此後お身を大切に、葉泉院様の御介抱、

くれぐれお身にお頼み申す 由「其儀はたとへお頼み無くとも、後室様の御身の上は、一命かけて私が、生

涯御守護致しまする 由「夫にて手前安堵致す 戸「左様ござれば大星どの 由「時節ござらば 戸「エ 由「再會

いたさん、

「互ひに包む心とこゝろ、をしむ名残ぞ、

ト由良之助は此世の暇乞の心、戸田は深い様子と疑ふこゝろ、兩人よろしく三重中の舞にて此道具ぶん
廻す。

本舞臺すつと前へ寄せて一間の冠木門、此左右ねり塀、此後雪の積りし家根を見せ、下手樹木の張物、

後へ日窓の屋敷長家、柳矢來の竹達見、日影より雪の積りし松の釣枝、舞臺花道共雪布を敷き、都て

葉泉院屋敷外構へ、雪ふりの道具よろしく、三重雪おろしにて道具納る。

「降りける雪に街も埋れて、往來まねな屋敷町、大道せましとあゆみ來る、高野の家來清水大學、さす

傘の溢流、自慢の鼻の高足駄、雪踏分けて立留り、

ト向ふより清水大學、袴 大小爪皮の付きし足駄、遊蛇の目の傘をさし、いうくと出來り花道にて 大「ア

ア降るはく近年にない今年の雪、此間から降つゞくが、今日はみツしり積りさうだ、歸りはかごとと思つ

て来たが、是ではかこも六つかしい、すこし道は廻りだが木挽町から一ツ目迄、船で返るが上分別だ、

「吹雪をよけて来かゝる途中、計らず出逢ふ腰元おうめ、

ト大學吹雪をよける思入にて舞臺へ来る、此時上手より以前のお梅白張の傘を差し出たり、兩人行あひ彼方此方とよける思入有つて顔見合せ 梅「ヤそこへお出成されましたは清水さまではござりませぬか 大「オオ其方は足輕半右衛門が娘お梅なるか 梅「よい所でお目に懸りました、只今前町のかごやを頼んでお使

を上げます處 大「何ぞ怪しい事でも有つたか 梅「ハイ今日大星由良之助が、葉泉院へ暇乞に参りましたは、敵討の暇乞と存じまして、身を忍び委敷様子を聞きましたら、是から元の都へかへり、大小捨て町

人になるに付ての暇乞、思ひの外のうちつけ故、モウ御案じには及びませぬ、子細は委しくみつゝに書取りました此書状、とつくり讀んで御覽じませ、

「隠しもつたる密書を取出し、渡せば大學打うなづき、

トお梅懐から密書を出し、大學に渡す 大「オ、夫は能ぞ知らせしぞ、兼て心利きたる其方故、葉泉院へ忍びに入れしが、密書の知らせ出来したく、

「言ひつゝ、密書押ひらき、くりかへして打みやり、

ト大學密書をひらき見て 大「扱は敵討の企も、敵と狙ふ高野家に、腕前勝れし附人が多人數有るに恐れをなし、すこゝ是から都へ歸り、大小捨て、町人に、なるとは能々意氣地のない奴、ト巻仕まひ 大「そちが知らせの此密書、旦那を始め家中の者に、見せて安堵をいたさせん 梅「始めの内は私も拵へ事と思ひましたが、葉泉院に打れても、命が惜しいと申しますのは、心底臆病未練もの 大「身共は初手から左のみ

とも、由良之助を思はぬが、同役小林平八郎は、天下無双の大器量、彼が徒黨の隊長では、油断ならぬと怖恐れ、夜も碌々枕に付かぬは、生中其身が兵學を、心得をる故力まけ、是で惑を晴させくれん 梅「アノ由良之助が隊長なら、其組下は知れたもの、モウお案じには及びませぬ 大「しかし焼鳥に經緒なれば、猶も怪しき事あらば 梅「直におしらせ申します、トお梅上手を見て 梅「アレ噂をすれば影とやらで、今向ふから参りますは其由良之助でござりまする 大「オ、見覺えの有る由良之助 梅「見覺められぬ其内に

大「道を遶へて片時もはやく 梅「心得ました、

「しめし合してとつかわと、道を遶へて急ぎ行く、

トお梅上手へ行かうとして思入有つて、下手へツイとはいはる、大學は密書を懐中して上手へ思入、

「折から爰へ歸る来る、道も一筋大星が、弓手へよければ弓手へつき、馬手へ除ければ馬手へ付く、はたと行合ひ大學が、喧嘩仕かけに突當り、

ト此内雪おろし、雪ちらちら降り、上手より以前の由良之助長合羽、大小爪草付の足駄、白張の傘をさし出で来り、大學傘をさし上手へ行かうとして行合ひ、右へ除け、左へよけ合ひ、ト、由良之助下手へ行かうとするを、突あたりきつとなつて 大「コレお侍待ッせへ 山「手前が事でござるかな、ト跳への合方になり

大「オ、何れの藩か存せぬが、降り積む雪に狭き往來、互ひに道を除あふべきぞ、我物顔に往來なし、なん

で身共に突當つた 山「イヤ突當りしは其はづみ、何方が兎相と申されぬが、手前とあらばお詫致す、御覽の如く狭き道、除るはづみの兎相故、平に御用捨てされい 大「イヤ町人ならば用捨しやうが、大小差でござるからは、此儘用捨は致されぬ 山「シテ御用捨てされずば、いかゞ召る、御所存よナ 大「ハテ言はず共知れ

たる事、腰に差したる大小は犬脊しでもござるまい、此場で身共と勝負さつせへ 由「其儀は猶更御用捨を
 大「イ、ヤならぬ、用捨はならぬへ、此儘濟さは後日に至り、此方の腕に恐れしなどと、世の人口もはかり
 難ない、身共が恥辱に相成れば、是非共勝負いたさにや置かぬ 由「イヤ御尤の儀にござるが、貴殿と違
 ひ拙者めは、浮浪人にござりますれば、中々もつて腕杯と申す手練はござりませぬ、幸ひ雪に往來も杜絶
 え、あたりに知る者ござらねば、御見のがし下されい 大「ム、左程身共が腕に恐れ、尻尾を巻いて恐れるな
 ら、犬つくばひにつくばつて、三聲ほえて詫さつせへ 由「仰せの通り犬つくばひに兩手をついて御詫申す、
 「兩手を突て詫びければ、猶も弱身に付込んで、
 ト由良之助手を突き詫る、大學思入有つて 大「ハテ扱意氣地のない奴だ、こなたは何所で見受けたる、儲遊里で浮といふ、浮名を呼ばれし鹽
 思入有つて 大「オ、いつぞや京の祇園町、一力かたで見受けたる、儲遊里で浮といふ、浮名を呼ばれし鹽
 治浪人、こなたは大星由良之助だナ 山「かく御存じの上からは、包み隠すも詮なき事、如何にも手前は鹽治
 浪人、大星由良之助でござる 大「オ、天下無双の大器量と、噂の有るは此方の事か、聞けば義黨の有志を
 語ひ、亡君の仇を討つとやら、武士はかくこそ有り度事、いつ頃討入召さる、な 山「夫は全く浮世の雜説、
 手前に於ては左様の企、毛頭致せし覺えござらぬ、既に今日亡君の後室葉泉院殿へ暇乞、大小捨て、明
 日より、町人になる由良之助、是と申すも命の惜しさ、手前に 企無き事は、是にておさつ下されい
 大「スリヤいよく報讐の心差はござらぬか 由「いかにもござらぬ 大「其心差がないとあれば、尻尾を
 巻て詫たはず、犬に劣つた由良之助、相手に致すも刀のけがれ、かやうな家老へ高祿をあたへし鹽治も
 つけもの、當時出頭第一の師直公へ及向つて、しかも五萬三千石、知行を捨てたも尤だ、こんな家來が差

配なすゆゑ、破れ扇に破れ笠、つづれに残る鷹の羽の、紋もあはれな鹽治浪人、一錢二錢の合力受け、路
 頭に迷ふをしらねへか、遊里で遣ふ金が有らば、なせ賈いではやらねへのだ、人は死なうとのめらうと、其
 身を樂になさうなぞと、あまりと言へば恩知らず、獅子身中の虫と言ふのは、命ををしむ己が事だは、ト
 由良之助を足駄で蹴かへし 大「武士の風上にも置けぬやつ、面を見るのもカアツ、ト由良之助へ啖を吐かけ
 大「穢らしい、トきつと思入、
 「身の大望にたへしのお、弱身へ付込む傍若無人、命は頓て雪諸共、今宵消ゆると白妙の、道ふみ分けて
 歸り行く、
 ト由良之助じつと思入有つて、鼻紙を出したんを拭ふ、大學は意氣地のない奴だといふ思入有つて傘をさし、
 いうくくと向ふへ遁入る、
 「跡見送りて良金が、落散る手札取りあげて、
 ト由良之助大學が落せし手札を取りあげ、向ふを見送り、床の合方よろしく思入有つて 由「我を悪口難言せ
 し、彼は正しく高野の家來と推量なせしに、案に違はず此場に落散る手札の姓名、清水大學と印し有るは、
 噂に聞きし本家の附人、反問苦肉の計策に、此良金が臆病を、彼が誠と思ひし上は、高野の家中へ流布
 なして、敵地の油斷疑ひなし、今宵討入るさい先に、爰で彼奴に出逢ひしは、弓矢神の守護ならん、味方
 の本望うたがひなし、

「アラ有難や 忝なや、と天地を拜す良金が、忠臣義士の英名は、降積む雪にかゝりやきけり、
 ト由良之助よろしく思入有つて、上るりの切かすめしたくにて、上手の門より以前の戸田、ツカツカ



と出て舞臺へ手をつき 戸「由良之助殿、段々誤入りました
 由「何に、某にあやまるとは、ト此時門の内より以前の葉泉院
 蛇の目の傘をさし、黒塗結構なる下駄にて出て来り、琴唄詠
 への相方になり、思入有つて前へ出て、神ならぬ身の露知ら
 ず、折檻なせしのみならず、勘當なせし妾が誤り、良金ゆる
 してくりやいなう 由「スリヤ東日記を 戸「御開封遊ばしまし
 て、ト書物を懐より出す 由「御覽の上は他聞の恐れ、只何事
 も是ぎりに 葉「いはす語らず 戸「目出度吉左右 由「噴天迄にお
 知らせ申さん、ト此時お梅伺ひ出て 梅「其書物を、ト取にか
 るを、戸田引付 戸「此書物を目がけるは 梅「いかに私は高
 野の間者 戸「扱こそ曲者、ト立まはつて、戸田短刀をぬかうと
 するを 由「アイヤ木望遠ぐる 夫迄は 葉「事穩便に 戸「心得ま
 した、ト戸田の局、お梅を當る是にてどうとなる、向ふばた
 ばたにて向ふより平右衛門菫蒲草の袴股立、大小わらち赤合
 羽、饅頭笠を持ち、ツカ〜と出て花道にてつくばひ 平「ハッ
 お迎ひ、ト由良之助見かへり 由「平右衛門か 平「ハッ、ト手を
 つく、葉泉院見て 葉「スリヤあの者も 由「徒黨の壹人 葉「ム、

ム「御機嫌よろしう、ト辭儀をなし花道へツカ〜と行く、お梅起上り夫をとか、るを、戸田傘にておさへ
 付る、葉泉院由良之助名残ををしむ、思入よろしく有つて 葉「良金さらば 由「ハッ、ト辭儀をする、戸田傘
 にてお梅を見事にかへす、雪の花ばつと散るを木の頭、此時雪おろし雪しきりに降る、葉泉院名残ををし
 む、戸田うしろから傘をさしかけよろしく、右の合方雪おろしにて、拍子幕。
 ト幕外由良之助、平右衛門入替り、由良之助傘をひらきしやんとかまへる、是をきつかけに詠への鳴物
 になり、平右衛門附添ひ、向ふへ這入る、雲おろしにてつなぎ直に引かへす。

五幕目

申登七ツ時
 麴町御溝頭の場
 飯田街裏屋の場

本舞臺三間後淺黄幕、一面の練塀、真中に九尺の辻番、下手三尺小庇付無窓の板羽目、窓の内より正
 札附の草鞋を下げ、上手へ折廻しの黒板塀、三尺戸を建て雪隠の出這入口、此道具にて舞臺花道共雪の
 布を敷き、日覆より雪のつもりし松の釣枝、二重の上権平木綿のどんざ布子、破れた袴、辻番人の拵
 へ、つぶ六紺看板の中間にて、今戸焼の火鉢に五合徳利を入れ、ひくき衝立の陰にて兩人酒盛して居る、
 都て麴町透寄合辻番の模様よろしく、合方雪おろしにて幕あく。

「ア、甘露〜、ちつとまだぬるいかもしれねへ、ト茶碗をつぶ六にさし酌をする づぶ「なんの冷でも
 かまはねへ、こんな寒い時は焚火をするか酒でなくツちやア凌げねへ、何にしても野暮に降るちやアねへか
 櫃「ナニ野暮な事が有る者か、今夜しんみり降つて歩かれねへ程積れば、夜廻りに出る世話はなし、明日は

緩くりと内職が出来て、こんな有難い事はねへ、おれが爲には雪は恩人だ。つぶ「おめへの伯母さまちやアねへか。權「べら坊め犬ちやア有るめへし。つぶ「ハ、ア然しお前の言ふ通り、天氣がよければおれ杯も、ヤレお供だの使ひに行けとこき遣はれるのを、かうやつて馬鹿口でも聞きながら酒を呑んでゐられるも給金の内、夫を思ふと雪は有難てへ。權「夫見ろ、悪く言はれた義理ちやア有るめへ。つぶ「あやまるからモウ一盃呑ませねへ。權「エ、出しこで呑む酒だ、こめられてたまるものか、トつぶ六の茶碗をひつたくる。つぶ「夫だつて先刻ツから三盃餘けいに呑れて居るものを。權「そんなしみつたれた事を言ふなら拳を打て勝呑としやう。つぶ「面白へく拳ちやア手めへに負やアしねへ。權「その替り壹本勝負だぞ、ト始終合方書おろしにて、兩人拳を打ち、酒盛をして居る、此内向ふより朝暮の小山田庄左衛門大小赤合羽まんちう笠を冠り、草鞋がけにて腕組を仕ながら出来り花道にて。小「ア、寒い、斯言ふ時には酒でなければ凌がれぬ、一盃呑ば此雪に少しも恐れはせぬけれど、酒興に前後忘却するゆる順酒と言ではなけれ共、身の慎みに呑ずに居れど、今も矢間十太郎殿が、今宵限り木望を遂げても死ねば、とげいでもどうで死なねばならぬ。骸、寒さ凌ぎに一盃と盃をさ、れた時は、餘程呑まうと思つたが、イヤイヤ愛が辛抱と、大星殿の御一言を守つて呑すに出て来たが、此寒風は身中へこたへ足の踏どもおぼえぬやうだ、ト言ながら、一足三足行き石に躓きしこなしにて、草鞋の紐されるこなし。小「南無三草鞋の紐が切れた、どこぞ爰らに草鞋を賣る、ト本舞臺を見て。小「オ、幸ひ向ふの辻番に番人の内職の草鞋が有る、調度よい、トそろそろ本舞臺へ來り。小「モシ草鞋を壹足下さい。權「正札附廿四文だれでもよいのを持って行つしやい。小「成程札が附て居つた、ト草鞋を一足取り、懷より錢をいだし。小「代料は爰へ置きますぞ。權「アイ、そこへ置いて下せへ。小「しばらく式

葉を借用いたす。權「遠慮無く仕度をしてござるがい、ト錢を取に出來り庄左衛門が草鞋を拵へるをみて。權「手がこゝえるなら出しなせへ片し拵へて進ませう。小「夫は何より忝うござる、ト權平式臺へ下り、庄左衛門會釋して草鞋の片しを出しながら兩人顔見合せ。小「ヤそちは御足輕の權平ではないか。權「オオさう仰やるは小山田様でござりましたか。小「ハテ思ひがけない所で遇ふものだ。權「とんとお身形の違ひましたので、薩張と心付ませぬゆる失禮を申上げましたが、どうぞ御免なされて下さりませ。小「イヤモウ其筈ちや、以前に替る今の身の上、權平推量致してくりやれ。權「誠に早やお氣の毒さまな譯でござりまする、先其お咄しはむさく共、此方へお上り成されまして承りませう。小「イヤ、今日は差か、つた用事も有れば、左様致しては居られぬ、必らずモウかまやるな。權「なんのお構ひ申したうても御覽の通り故、せめて寒さ凌ぎに火鉢へ火でもおこしませう、といひながら二重へ上り火鉢へ炭をつく。つぶ「オイ權平アリアア知つたお方か。權「ム、おれが以前勤めて居た鹽治さまの御家來だ。つぶ「夫ちやアまだ御浪人で入らッしやるのか、ヤレ御氣の毒な、ト庄左衛門に向ひ。つぶ「あなた此方へお上りなされませ、決して御遠慮な者ちやアござりませぬ。權「是は私の朋輩でござります。小「さやうであつたか、挨拶も致さずゆるしてくりやれ。つぶ「どう仕りました。小「シテ權平此辻番へはいつ頃から參つたのちや。權「お屋敷があ、言ふ譯に成ましてから、三河町の元々の世話になりました。此辻番が明て居ますから、先月中こちらへ參りました。小「夫はよかつた、以前屋敷の勤と違ひ何よりか氣さんじで有らう。つぶ「そりやア旦那のおつしやる通り乞食ちやアござりませぬが、三日すると忘れられませぬ、番をするのはほんの附たり、兩人何ぞと見るとよわい物いちめで酒にしたがる、又こはい者がくれれば戸を叩て本の田甫の案山子同前、實の事辻番は生た親父の捨所と、

川柳に有る通りでござります。是さあなたなぞは苦勞人でいらつしやるから、武家奉公の事なぞは何から何迄御存じだ餘計な口はきかねへがい、ト草鞋の片しを拵へ。一時に旦那お草鞋の紐は通しましたが、兎も角もこちらへ御上ん成されて御休息なされませ、其内にはちつと小降になりませう。小「イヤ中々小降になりさうもなし、夫に又宿元にて待合す約束の仁もあれば、一ト思ひに歸宅致さう。只今ではどの邊にお住ひでござります。」

小「當時は下谷邊に寓居致して居る。下谷も所によりまするとよつ程の道程でござりまするが、さうして今日はどちらへ入つたお歸りでござりました。今日は、オ、夫堀の内へ參詣致してまゐつた。夫はマア御信心な、能御參詣成されました。嘸御寒うござりましたらう、コウ火鉢の火が起つたら爰へあげてくれ。火鉢をとられると烟がさめるせ。オ、本に烟といへば貴方は召あがるお口であつたが、さつぱり忘れて仕まつた、ト立て行き、徳利と茶碗を持來り。旦那失禮ながらお寒さ凌ぎに一杯いかゞでござります、ト庄左衛門へ茶碗をいだす。小「イヤ心差は忝いが、酒はさつぱりやめて仕舞つた、ホンニ手前もとんと忘れて居つたが、其方も酒は好で有つたな。好の段ではござりませぬ、酒故一生こんな奉公致して居ります。夫に私共は此寒の内でも綿のは入つた物は着る事はなし、酒でも呑なぐつちやア寒さが凌がれませぬから、嫌なもので自然と呑むやうに成ます。小「ソリヤ實に呑めば寒さを忘れるから、さう有さうなものだ。サア其寒さを忘れる酒でござりますから、あなたも一ト口召上つて其勢ひで歩いて御覽じろ、些つとも寒くはござりませぬから、お猪口ちやアないお茶碗をお取成されませ、トむしやうに勤める茶碗を、庄左衛門の鼻の先へいだす、庄左衛門酒の匂ひをかきたまらぬこなしにて、思はず知らず手をいだし。小「しからは一ツ、ト茶碗で呑まうとして心付き。小「ア、イヤ、只今も申す通り、

酒はやめて仕舞つたからモウ、どうか勸めてくれるな。あれ程お好きなお酒をなせ上らぬのでござります。小「オ、心願有て禁酒いたした、オ、さうだ今日堀の内へ夫に付て參詣致した、心差は忝いが酒といつたら一杯も飲めぬ。何の御願がけか存じませぬが外のものに成さればよいに、酒を斷つとは餘り野暮ぢやアござりませぬか。モシド、一の文句にも有る通り、お祖師様さへ御造酒をあげると言ひますから、堀の内ならかまふ事はござりませぬ。夫に神佛は見通しと言ふちやアござりませぬか。一罰のあたる氣遣はござりませぬ。兩人「一ト口お上り成されませ、ト權平は茶碗、ぶぶ六は徳利を持ちしきりに勸める、庄左衛門苦敷思入、いろ／＼有てト、氣をかへ。小「ハテ扱しつこい身共は禁酒致せしと申すに、トきつと言ふ、兩人少ししよげたるこなしにて。夫ちやアどうしても上らぬと仰しやるから、御免を蒙つて二人で遣うか。ぶぶ「やらうとも、おらア先刻ツから咽がぐび／＼いつて居るのだ。夫では旦那。つ「まづ平御免成されませ。サア、遠慮無くどうかそつちの方へいつて呑でくりやれ。兩人「さやうなればおゆるし成されませ、ト兩人徳利と茶碗を持ち、二重へ上り宜敷住ひ。折角酒であつたまつたが、醒たせへか寒くなつた、マアおれに先へ一杯呑してくれ。何のかのと理窟を付け、能先へ呑たがりやアがるせ、ト言ながら權平茶碗を持ち、ぶぶ六酌をして權平一口呑みて舌打なし。權「ア、イヤ、爛だ、五臟六腑へしみ渡るやうだ。コウ酒も二三ばい呑むうちが命だせ。べら坊めたとへ命でもおらア酒故ならをしくねへ、どうか願ひにやア酒でよい／＼に成てのたれ死を仕てへのだ。違へねへ／＼おらアまた死ぬ時は末期の水はいらねへから、その所を酒として又早桶替りに四斗樽で、成らう事なら湯灌も酒でして貰ひてへものだ。御念佛は生醉だ／＼か。わ／＼く酒落やアがらア。ハ、ハ、ハ、ハ、ト此内兩人酒盛をする

間 庄左衛門草鞋を穿きかけ、是に見とれて茫然としていろ／＼呑度思入有つて心づき 小「ア、眼前見るは目の毒だ 兩人」小「イヤナニ雪は目の毒ぢやといふが、其せいか大分眼がかすんで参つた 權「モシいら毒でも百薬の長、酒さへ上れば大丈夫 づぶ「コウ／＼其御薬のお代りだ、ト言ながら、徳利をふつて見る庄左衛門こなし有つて 小「オ、つぎめと有らばいろ／＼世話に成た其禮に、ト懐の胸巻より金を壹分出し紙につゝみ 小「是で登升買がよい、ト投てやる、權平とつて 權「是はお氣毒さまな大きに有難うござります づぶ「又ぐつすり呑るせオイ旦那は御如才がねへな 小「辻駕籠のやうちやな、ト笑ひながら立ちあがる 權「モウあなたお歸りでござりまするか 小「少し小降になつたから此内に急がうと存する、ト此内づぶ六生酔のこなしにて、よろ／＼しながら二重より下り づぶ「もしエ此雪ぢやア歸らんせんよ、けふは流して居なましと言ふにサア、トいやらしき見振をして庄左衛門の袂をとらへる 權「コレ笑談も相手による失禮千萬ナどうしたものだ 小「イヤ是も全く酒興の上、憎むべき事でない づぶ「憎くなけりやア袖引酒で有りますよ、一ツおあがなんし、ト持たる茶碗を出す庄左衛門呑度思入にて 小「ア、遊里でさやうにいはいれたら、どんな禁酒も 權「其氣でお一ツ召上りませ、ト徳利を持立かゝる 小「イ、ヤ夫は笑談、エ、放さねへか、トづぶ六がとらへた袖を手荒くはなす、づぶ六どつさり尻餅をつく 小「世話で有た、トやはり雪おろしにて庄左衛門思ひ切て足早に上手へは入る、づぶ六起上り腰の痛む思入にて、兩人よろ／＼しながら二重へ上り づぶ「ア、痛へいやと言程腰の骨を打つた 權「手めへが悪巫山戯をするからだ づぶ「夫でもあの侍は大層金を持て居るから、モウ壹分もとつて晩に明でも追ひに行うと思つた所から、女郎の身ぶりでおやまたうけにやりかけたら、飛んだめに逢た 權「アノ人がさう金を持てる譯はねへが、そいつアよつ程不思議だ、

其様に持て居ると知つたら、昔の好誼に二三兩ふつかけてやりやアよかつた づぶ「ふつかけるといやア腰の骨がめつばふ痛むから、焼酎替りに酒でもふつかけてくんねへ、ト徳利を取て茶碗へついで見て づぶ「なんだひとつたらしもねへ、オイ今ので一升買ひねへな、ト此内權平じつと考へ居て 權「金が大層有ると聞いちやア、トあたりの脇差を取てさし 權「跡追かけて づぶ「どうしたと 權「イヤサもう一升跡を引かうか、ト徳利を提げ立上り、よろ／＼と式臺へ下りどつさり下に居るを道具替りのしらせ 權「こいつアもうあるけねへ、トづぶ六權平を介抱する、此模様よろしく雪おろし、をかしみの合方にて此道具ぶんとはす。 本舞臺三間中足の二重、前側石垣の蹴込、花道の附際へ同じく足掛、正面上の方腰通り海風壁、日窓の有る屋敷長家のつまを見せ、下手へ寄せはすに正面へおなじく屋敷長家の遠見の書割、都て此道具雪持日覆よりも同じく松の釣枝、舞臺前へ壹面の波板を出しやはり麴町邊堀ばたのもやうよろしく、雪おろし早い合方にて道具留る、ト直に薄きばた／＼に成り、向ふよりお雪島田かつら留袖の娘形にて、あたまへ手拭を吹ながしに冠り、其はしを口にくはへ小襟を高くとり、跡先を見廻しながら早足に出で來り花道に留り、 權「モウ爰はお堀端また日暮には間も有れど、此大雪に往來のなは死るに丁度幸、あの世で早く父さんにお目にかゝるが樂なれど、跡に残つてアノ母さん、私が身を投げ死んだと聞たら、嗚やお歎き成さるで有らう、是もみんな約束で悪い主人に仕はるゝ、私の因果おまへの業と、どうぞ断念で下さんせ、其替には草葉の蔭から、お前のお身を守つて居れば、親に先立つ私の不孝は、どうぞ堪忍して下さんせヘナア、ト向ふへ向つて手を合せ、よろしく愛の思入有つて 權「ア、いつ迄言うても返らぬ縁言、人の目つまにか、

らぬ内少も早くさうぢや、ト本舞臺へ來り邊を伺ひながら、死なうと言ふ思入、此内上手より以前の庄左衛門出來り、お雪の體を見て合點の行ぬ思入にてそつと身をひそめ伺ひ居る、お雪是をしらす涙を拭ひ、「母さんどうぞ恨んで下さんすな、トツカ〜と舞臺前へ行き、南無阿彌陀佛、ト飛込うとするを、庄左衛門駆けよつて抱留め、小「ア、是待つた女中早まつしやるな、」イェ〜どうぞ放して殺して下さりませ、小「イヤおれが目に懸つては助けにや置ぬ、ハテ待と言たらマア〜待つしやい、トお雪を抱留め、無利に下に置く、お雪其儘ワアツと泣伏す庄左衛門思入あつて、小「コレ女中どう言ふ譯か存せぬが、夜でも有か白日中に、身を捨てやうと致すには、定めて餘儀無い事有らうが、若い身そらで身を投るは、十が九ツ色戀か、但しは又縁付た其先の姑女が邪見故家出なし、内へ歸れば親達に叱られるのが切なき故、いつその事死なうと言ふ、無分別はまゝ有る事、左様な事なら死ぬには及ばぬ、そちにも身より有らうからそこ迄手前が同道して、此場の様子を咄しなば、どうでも方法がつかう程に、死ぬのは思ひ留るがよい、袖ふりあふも他生の縁、思はず爰へ來合した某が意見に付、知べの方へ案内して、同道致す道すがら、委敷子細を聞くで有らう、トお雪又行くとするを、小「せく所でないコレ女中、こなたはなんで死ぬるのだ、ト急度言ふ是にてお雪顔を上げ、袖にて涙をぬぐひながら、小「何くのお方さまは存ませぬが、御親切なる其お詞、有難うはござりまするが中々左様な譯では御座りませぬ、申上るに上られませぬお耻かしい事ゆゑに、どうか御慈悲と思し召し、此儘に私をいつそ死なして下さりませ、ト又立かゝるを庄左衛門留る小「又しても聞譯のない、左様で無ばないやうにどうでも咄の分る事、氣を落付てコレ女中、とつくり手前に其子細を、トよろしく留ながらお雪と顔見合せ、互に伺ひなし、小「ヤそなたは御料理方の兵右衛門が娘

ではないか、小「ほんにあなたは小山田さま、お耻かしう存じまする、トじつとなる、庄左衛門不審の思入にて、小「思ひがけない其方と知らずに、丁度留たは盡せぬ縁か、但し又殿の御名も出る事故、はからず此方が死ぬ所へ、参り合て助けたは、やつぱり亡君の御道引かも知れぬ程に、何事も隠さずに、死なうとした其譯を逐一はなして聞すがよい、ト少し愛ひの思入にて言さすと、お雪實にもと言ふ思入有つて涙をぬぐひ顔をあげ、小「おつしやる通り殿さまの、實は御名のお出ます事故済まぬ事とは存じながら、死なうとせしも身貧から起りましたる一分始終、お聞き成されて下さりませ、ト詭へかはつた相方になり、鹽治の御家没落後、親子三人浪々なし、町家の住ひに父さんは、あすこや爰の料理茶屋へ雇はれても些かな取まへ、其手だすけに母さんと二人は内で賃仕事、すゝぎ洗濯致したとて、高が女子の持故、煙の代のたしにもならず、貧しく暮す其内に、かて、くはへて父さんは御大病、醫者の平常も内證の、廻らぬ故にかひ薬、利目も見えずツヒニ御病死、跡に残りし親子二人、其日〜を送るのも女手業の届き兼ねしを、見かねて以前父さんが、雇れて往た縁により、此麴町貝坂の小料理屋の御亭主が、一年五兩の給金でおれが内で奉公せいと、度々迎ひのお人故、壹人の口の減る事なり、其上お金の通入る事、母さんのお爲ちやと、参りまして二ヶ月程、つとめて居ります其内に、風呂や女子同様に客をとれとおつしやる故、断りいへば責さいなみ、暇をとれば手金つけと、お金の出來ぬを付込んで、身うごきさせぬ板しぱり、私さへ死だなら給金も夫なりに、母さんの難儀にならず濟うと存じた心から、主人先を懸出して、死ぬる所をはからずも、あなたさまに止められ、跡も先へも参られぬ、身の苦みを小山田さま、御推量なされて下さりませ、ト涙ながらに言ふ、庄左衛門も不便だと言思入有つて、小「ア、聞は聞く程氣の毒な、お父親の病死跡々の難儀、見ず

知らずの者にもせよ、捨置ぬ此場のしぎ、殊更元は御家の御家來、か、りやアつながる其娘が、些か五兩の金故に、命を捨るを餘所に見ては、武士の本意であるまい、ト懷中より一寸胸巻を出し、お雪に見えぬやうに思入ありて、
 小「大星殿の言付で、同志の者が借財の拂方にと御渡し有りし、貳百兩の此内で、命を助けてやつた連、なせ助けし共おつしやるまい、トうなづき、お雪に向ひ、
 小「夫では五兩金さへ有らば死なすと濟うがの、
 雪「ハイ其金さへ戻しますれば、
 小「濟むと有らば其金は手前があなたに進せやう、
 雪「エ、そんなら貴方が、
 小「オ、其給金さへ戻したら、其方の體は身儘になれば、母へ孝行忘れず、是からも有る事だが、今のやうに突つめた無分別はせぬがよいぞや、
 雪「有難い其御意見、決して忘れは致しませぬ、しかし貴方に其お金をお貰ひ申すと譯には、
 小「ナゼ行ぬのちや、
 雪「サアあなた連も只今では御浪人の御身なれば、失禮ながら御不自由勝ち、夫をみすく存じながらお貰ひ申すは何とやら、餘り心がないやうで、御氣毒さまに存じまするゆゑ、
 小「成程其身に引きべつして浪々の身を思ひやり、左様言はるゝは尤だが、何を隠さう此金は、
 雪「エ、
 小「イヤサ此金のない時は、死なねば成らぬ時宜ではないか、金で買はれぬ人の命、夫にとやかう言ふ時は片意地と申すものちや、又左程氣の毒に思ふなら、必らず其身を全うして義士の亡跡、イヤサ義理を思はば其金も、亡殿さまより頂戴した、御高祿の餘計をば、其方へ手前がやるのだから、亡君へ御回向を申して上るが何より御禮、爰の道理を聞譯けて、心得違ひをせぬがよいぞよ、ト思入にていふ、お雪氣の毒だと言ふこなしにて、
 雪「返すくも夫程迄、御深切におつしやつて下さるもの、御辭退申すも失禮故、お詞に甘へまして頂戴致す下さりませう、
 小「オ、悪い事は言ぬからさう致すがよい、然し此方に金を渡し、宅へ持て歸つても、主人先を出た事故、母の前が悪からうから、内迄送つて遣はさうが、シ

テ其方の宅は何處だ、
 雪「飯田町でござりまするが、夫では餘り恐れ入りまする、
 小「イヤ、飯田町とあらば丁度歸り道ちや、
 雪「道の御都合さへ宜敷はお供を致して母さんにも、ようお禮を言うて貰ひませう、
 小「然し此始末を委しう申すと、驚いて氣うちでも致すと悪いから、そこは體よく申して置くがよい、ト此以前より上手よりお雪の母おむつごま鹽かつら婆アの拵へにて出で、此様子を見て傘にて顔を隠し伺ひ居て、此時少しまへへ出て、
 小「イエモウ最前からは、承り居りました、トお雪見て、
 雪「思ひがけないお前は母さん、
 小「そんなら其方は、
 雪「ハイ母でござりまする、
 小「小山田様お久々のお目も先は貴方さまにも御機嫌よろしうお目出たう存じまする、
 小「其方にも替る事無く重疊でござる、然しながらわづか逢すに居つたのちやが、とんと見わすれ申した、
 雪「御尤さまでござりまする、昔に替る此姿食故一人の娘を、とんだ事に成ります所、貴方さまがお止下さりましたので無事な顔が見られました、此やうなお嬉しい事はござりませぬ、
 小「存じたと有らば隠さぬが、よい所へ某が参り合て娘の命助かりしも、そなた衆が信心なす、神佛の利益で有らうが、實にあふない所で有つた、
 雪「イエモウ神佛より貴方をば、あそこで拜んで最前から、有難涙をこぼして居りました、ト落涙のこなし、お雪こなし有りて、
 雪「夫はさうと母さん、お前どうして爰へお出なさんした、
 雪「サア麴町の主人からそなたが家出したによつて、たつた今給金返せ、夫が出来ずは娘を出せと、家さがし迄仕た上で、なんでも今日中に埒をあけると言うて歸つた故、今言譯に行く所ちやわいの、
 小「夫は丁度よい所であふた、
 雪「左様なれば兎も角も、私の宅迄お出成されて下さりませ、
 小「イヤ母御に逢ふたこそ幸ひ、爰で金子を遣したら、もう参らすともよいではないか、
 雪「お歸りのお道筋とござりますれば、むさく共一寸お立寄下されませ、
 小「然らば兎も角も同道致さう、
 雪「左様

成されて下さりませ。雪「ドレお供いたしましたせう、ト合方雪おろしに成り、庄左衛門先にお雪おむつ、相傘にて東のあゆみへかゝる、能程にしらせなしに此道具ふんまはす。

本舞臺三間平舞臺、向ふ真中納戸口上方佛壇、此下戸棚、下手破れたる鼠壁、上手一間反古張障子、家體いつもの所門口、下座の前へ一間隣家の門口、腰障子におでんかん酒と筆太に印し、爰にかん酒や勘助布子の上甚兵衛を引懸け雑股引をまくりあげ、草鞋がけにておでんやの荷を拵へ居る、同じく女房お市手傳つて居る、都て飯田町裏借家の體、ヤハリ合方雪おろしにて道具留る、ト兩人荷を拵へながら、

お市「野暮に降るぢやアねへか 勘助「此又雪にとりのおつかアは何所へ行つたのだ 市「何だかもう些と先

刻、娘子の行つて居る主人先から逆たとか言つて、人が来たものだから、慌て眼をして出懸ていつたが、どうしたかしらん 勘「そりやア嘸心配だらう、然し男を拵へて逃るやうなうはついた娘ぢやアねへが、是を思ふと色は思案の外だナア 市「夫だからお前が案じられてならないのだ 勘「株であいつの事をいやアがる

市「又かぶでお堀端へ出る引ばりのお惚氣か、久しいもんだ、あんなじやんこツ面がそんなにいゝかなう

勘「ハツクシヨ、畜生め喉をしやアがる 市「イケすかねへかばちや野郎だヨ、ト此内始終合方雪おろしにて庄左衛門、お雪おむつ本花道へかゝり 小「シテ此方衆の内は何れだ 勘「ア、向ふ長屋の三軒目でござりまするが、モシそこはどぶ板がござりませぬから、お氣をお付成されませ 小「承知致した 雪「誠にむさい所へ御連申しまして、御氣の毒さまに存じます 小「イヤ、裏長家で此くらゐなのは結構だ、ト言ひながら、三人舞臺へ来る内、おむつ入替りて先に立ち 勘「お隣のお女房さん大きに有難うござりました

市「おやおつかさんお歸り成されたか、オ、お雪さんも御一所かへ 雪「おばさん暫らくお目に懸りませぬ

勘「少し見ない内に大層い、姉さんになつた、ト此内おむつ、門口を明け内へ這入りあたりを片付けながら

むつ「サアあなた甚だむさい所でござりまするが、先此方へおは入成されて下さりませ 小「しからばゆるしやれ、ト庄左衛門先にお雪も内へはいる 雪「ドレおみ足をすまませう、トお雪盥へ水を汲み、庄左衛門草鞋をぬぐ、お雪庄左衛門の世話をしながら 雪「母さんお茶を入るやうにして下さんせ 勘「夫はよいわいなう、先こつちらへ入らつしやいませ 小「御免下さい、トよろしく住ひ 小「おかげで少し寒さを忘れたやうだ、ト此内お雪茶菓盆を出し大和風呂の火鉢へ炭をつぎ居る、おむつ門口へ來り 勘「モシお隣のおかみさん一寸アノ一番よいお酒を、ト指を五本いだし 勘「是だけお願ひ申します 市「ハイ、夫はよいがおつかさんどうだつたへ、ト小聲で言ふ、おむつお市に囁く 市「夫ではアノお方が夫はよかつたね

へ 勘「商ひの出がけによかつたとはい、辻占だ 勘「此マア雪に御商賣にお出成されるのでござりまするか 勘「かう言ふ日が私共のつけめだ 勘「御商賣とは申しながら嘸お寒うござりませう 市「早くいつてお出よ 勘「牛込あたり迄いつたら賣切で歸るだらう、ト言ひながら荷をかつぎ花道迄行き 勘「おでんかん酒トよぶ 市「エ、なんだな長屋内で呼なくつてもい、はな 勘「ツイ口癖になつてならぬ、ト笑ひながら荷をかつぎ向ふへは入る 市「夫ぢやア今直に持て行きますよ 勘「どうぞ大の御酒家に入らつしやるから、極よいのを頼みます 市「ハイ、ハイ、畏りました、ト下手門口へは入る、おむつこつちらへ來り 勘「是はマアろくろ

くにお構ひも申しあげず、御免成されて下さりませ、扱マア今日は娘をいろく御厄介に成まして、先程は途中故しみる御禮も申上ず、コレ娘不調法なものぢやないか、ナゼ爰へ來てともく御禮を申さぬの

ちや 雪「アイ〜」小「イヤ其様に言はれては却つて手前迷惑を致せば、有て済だ事ゆゑ最早禮には及び申さぬ」
 雪「どう致しまして是がお禮申さずに居られませうか、貴方がおいで下さらずば今頃は此母が泣のなみだで狂ひ死 雪「私の不孝になります所、有がたい御意見で」
 雪「娘についた死神の」
 雪「放れましたも皆御恩」
 雪「夫を思へば親と子の」
 雪「二人の爲に命のおや」
 雪「何とお禮を申さうやら」
 雪「有難う存じまする、ト兩人手を突き涙ながら禮を言ふ、庄左衛門じつと思入有つて」
 小「是と申すも最前も申した通り、亡君の御道引でがな有らう程に、手前に禮を言ふより朝晩共におこたらず、佛間へ向つて殿さまへよう御回向を申すがよい」
 市「畏りましてござります、ト此時お市隣より兩手に五合徳利と井を持ち出來り」
 市「一寸あけておくんない」
 市「ハイ〜、ト門口をあけ」
 市「是は大きに御苦勞さまでござりました」
 市「一番上物を持つて來たぞへ、夫から此大根は惣菜に煮たのだが枯木も山の賑かした、色敷にも成らうと思つてちつと計り持てきました」
 市「夫はマア有難う存じまする、丁度お肴がない所早速是で一口あげませう、夫はさうと知つての通り私もあれも御酒は一向不調法ぢやによつて、どうぞお相手をして上げて下さるせいナア」
 市「どうしてマア私のやうに不調法なものが」
 市「マア兎も角もこつちらへはいつて下さんせ、ト無理にお市を内へ入るこなし思入有つて」
 市「ホ、あなた御免成されませ」
 小「何も遠慮なものでござらぬ程に、サアすつとこちらへお出成され」
 市「有難う存じます、ト此内おむつ膳立をして畑徳利へ酒をうつし畑をして居る、庄左衛門思入有つて」
 小「見受た所が何か手前へ心配のやうすぢやが、酒なら一すゐも呑ぬから、必らず共に無用にしやれ」
 雪「夫でもあなたお好で入らつしやりますれば、決してお構ひ申しは致ませぬ」
 市「どうぞお茶の替りに」
 市「ト口召上つて下さりませ」
 小「心差は忝いが、何をかくさう

未だ家敷にをつた時分、初午の夜の事で有つた、少々計呑過て朋友共と口論なし、すでに命にもかゝはる所、亡君の御慈悲にて同家中に居るこなた衆へもしれぬやうに、内分の御計らひにて事済し、其折以來禁酒致せと有る御主人のいましめなれば、好きな酒ぢやがどうも呑ぬ」
 市「夫はマアおあいにくでござりました」
 小「決して手前に構はずに、今御主人で思ひ出したが又捨置たら主人先からとやかう申して參らう、早く參つて五兩の金を返して來やれ、ト手早く懐の胴巻より金を出し紙にのせ」
 小「然らば金子を受取たがよい」
 市「ハイ〜有難う存じまする左様なればお詞にあまへまして、御辭退申さず頂戴致しまする、ト金子を受取り」
 市「コレ娘よう御禮申したがい」
 雪「先程からいろ〜とお世話に成のみならず、お金迄お貰ひ申し御氣の毒さまに存じまする」
 小「さう重ね〜禮をいはれては、こなた衆より手前の方で氣の毒なれば、モウ何も申さずと餘り遅くならぬ内、早う夫を返して參るがよい」
 市「本に左様致しませう」
 市「おつかさんいつたら思ふさまいつておやんなさいよ、邊りに家のない所ぢやアなし、先刻の様に大きな聲をされるど世間へ對して外聞がわるいわね、よつ程私やア出懸て來て、野中の一軒家ぢやアねへヤイ、靜にしやアがれと打きおろして遣うと思つたのさ、なんぼ主人だつてあんまりだわねへ、おまへさん言事にも程が有りませアね」
 市「夫もこちらに金が出来ぬと見くびつてする事なれば、是さへ有ればやかましく言ひ居つた、顔をはつてやりませる、ト身づくろひをなし立上り」
 市「左様ならあなた一寸行てさんじまするから、御緩と成されまし」
 市「雪で足場が悪いから、氣を付けて行かつしやれ」
 市「モシ内の人の息杖が有るから、あれを突てお出ならい」
 市「ナアニ夫には及びませぬ」
 市「かゝさん早う戻つて下さるせ」
 市「直行てくるわいなう、ト門口へ出て」
 市「夫ではお隣のおかみさん跡をお頼み申しまする」
 市「ようござんすわいなア

むつ「あなた往てさんじまする、ト始終合方雪おろしにて、おむつ向ふへは入る、お市跡見送りこなし有つて、市「ホンニお雪さんの前ちやア一寸言惜いが、子ちやア泣をするやらで可愛さうに嘸寒からう、ト言ながらこちらへ来る、小「夫はこなたの言はる、通り、子を持ってしる親の恩、とかく親程有難いものはない、取分主人は猶大切、ト一寸思入有つて、小「是は思はず知らず長座いたした、最早お暇仕らう、市「まだよろしうござりまする、どうを母の歸ります迄お出成されて下さりませ、市「あいに降がつよくなつて來ましたから、ちつと小降に成ます迄お待ちなさい、其内にはおつかさんも歸りませうから、モウ一ぶく召上つて入つしやい、小「イヤ今日は差懸つた用事が有れば、左様致しては居られぬ、又此頃ゆつくりと咄しに參る、ト兩人留るをふりもぎつて立掛り、腹痛の思入にて、小「アイタ、、、、、ト下に居る、お雪あわて、介抱なし、市「ア、モシどう成されましたぞいなア、小「サア雪中を歩いたので持病の癪がさし込んで、アイタ、、、、市「夫はお悪うござりまするナア、モシ伯母さんお前さんの所になんぞお薬はござりませぬか、市「私共ちやア二人ながら達者だから、薬といつたらなんにもないが、雜作もない一寸往て買て來て上げやう、小「イヤ夫には及ばぬにがい薬を吞うより、びんとした上酒を一ぱいあつがんでぐつと吞ばたらちまち癪は治まれど、酒をつゝしみ居る故に、吞たい薬も吞事ならぬ、市「夫では一盃召あがつてはいかゞでござりまする、市「今あなた初午のお稻荷様へお立成されましたとおつしやりましたから、夫では初午の日だけでよろしうござりませうわね、ト言ひながら、火鉢の土瓶から徳利を出し畑を見て、市「お眺へのあつ畑でござります、サア一盃召上りませ、小「いくら薬に成らう共酒ばかりは吞れぬ、アイタ、、、、市「アレマア貴方もお義理のかたい、お薬にも酒で吞むお薬が幾何も有ちやアござりませぬか、中には焼て粉にして酒

で吞むのが有ります、オヤ御免なされまし、ありやアド、一の文句だつて、市「おどけはおどけホンニお酒で吞ねばならぬ御薬もござりますれば、其お薬を召上ると思召たら、何もお心悪い事もござりますまい、たんと上らすお薬にお登ッお上り成されませいなア、ト庄左衛門じつと思入有つて、小「いか様か、る苦みでは、是迄艱難辛苦した、日頃の願ひも水の泡、誓ひし酒も御免を蒙り、薬と思つて一ツ吞うか、市「やつと御相談がおつした、ト膳を庄左衛門の前へ持てくる、市「ア、是何にもいらぬ本の薬にたつた一盃吞のちや、市「兎も角もお薬の事でござりますから、お猪口はよしてお茶碗に致しませう、ト茶碗を取て庄左衛門の前へ出す、市「サア是でお一ッお上り成されませ、市「是は餘り大盃ぢや、市「マアよろしうござりますわいなア、ト言ながらぐつと吞んで、市「ア、イ、心持だ、市「さう直にはき、ますまいが、少しはよろしうござりまするか、市「人には相薬の有るもので、少しは落付た、市「たんと落付やうに最一ッおあがり成されませ、市「然らばモウ半さん、ト又お市酌をする、市「オット、こぼれる、市「お薬だからこぼれるは延喜がよろしござりますはね、ト庄左衛門またぐつと吞んで、市「ア、咽を通る内のうまさ、市「二ッではお献が悪うござりますから、かけ付三盃と成されませ、市「夫ではモウ是で納盃に致さう、ト又お市酌をして庄左衛門のみ、市「せめて旦那有とこになさい、トお雪に目くばせする、お雪うなづいて酒の畑をする、市「イヤモウ行ぬ、市「オヤマア是はばかり残して未練らしい、私がお合をするからお上んなさいよ、ト是よりお市自身も吞ながら捨せりふにて酒をすゝめる、庄左衛門うかゝと段々吞酔し思入にて、市「此内儀の口まへのせられて、コリヤ大分酩酊致した、市「何でござりますねへ、酩酊だの大橋だのと、腔を「佃田の色の海、ト一寸淨るりを語る、市「ハ、イヤ面白、ト庄左衛門たわいなを體、此時七ツの鐘なる庄左衛

門開耳立て 小「ヤ今打のは何時だ 市「アリヤア七ツの鐘でござりますから、日暮迄お遊びなさいよ 小「イヤイヤ七ツで有らば参らねばならぬ、ト言さま立上り、よろしくとしてどうとなる、お雪驚きかけよつて介抱なし 雪「ア、もしおあぶなうござりまする、どうぞ成されましたかいな 小「久しぶりで空腹へ吞だせへか大層に酔た、此分では中々あるかれぬ、とろく致せば直に酔がさめるから迷惑ながら少しの内、爰へ寐かして置てくりぬれ 雪「何迷惑な事がござりませう、サア御ゆつくりお休み成されませ、ト戸棚へ夜具を出しに行く 市「モシ旦那段々雪が大降になつて来ましたから、今夜はこちらへお泊りと成されてはいかゞでござりまする 小「どう致して左様な事は出来ぬ、是非五ツ迄に参らねば成らぬ所が有れば、暮合迄兼かしてくりやれ、ト此内お雪蒲團を敷き 雪「マア何はともあれお蒲團の上へお出成されませいなア、ト庄左衛門の手をとる 小「是はとんだ厄介になるな 雪「どう致しまして 小「ア、何だか目がくらくと致していつにない酔ひやうだ、ト言ながら蒲團の上へ寐る、お雪捨せりふにて枕をさせ掻巻をかける 市「あなたお酔さましにお茶を一ばい濃く入れませうか、モシ旦那、オヤモウおよつてお仕舞成すつたよ 雪「そつとしてお置申す方がようござんしようわいなア、夫はさうとして御用の多いのいろくお遣ひ立て申しまして、お氣の毒さまな大きに有難うござりました 市「オヤくいろくと言ふのは嬉しいねへ、私やア色と言字は大好サ 雪「イヤナ伯母さんでござんすナア、ト恥かしきこなし、なまめいた合方になり 市「アレマアお酒も呑まないのに顔を眞ッ赤にしてサ、野暮なお子だねへ、今時の娘は其様事をいつて居ると人が馬鹿だと言ふよ、私が又親ならばお前位な器量の娘を持つて居ると、直に旦那でもとらして左團扇で暮すけれ共、此方のおつかさんなんぞはかた過て、些とも其様咄しにはおのりでないけれ共、お前私の言事を聞て、ト

庄左衛門の方へ一寸こなし有つて 市「それ此旦那などは先刻一寸見た所が、レコもよツ程有る様子、い、お客らしいから水を向けて御覽よ 雪「水とはお酔さましにお冷を上るのかへ 市「ホンニうぶも程が有るはね、水をお向けと言のは足でもさすつてあげながら、するくべつたり 雪「どうしてマア其やうな事が、トじつとうつむく 市「是は恥かしい事もこはい事も、むづかしい事も何にも有りは仕ないわね小ぢれつたい、トお雪をつきやるやうにして隣へは入る、跡にお雪思入有つて 雪「アノマアお隣の伯母さんとした事が、私をとらへてあのやうな仇口をいはしやんすれど、あなたの思惑どうして其様、ト庄左衛門の寝顔を見て、うつとりと思入、合方きつぱりとなり、そつといつて門口のかきがねをかけ、戸棚の中より鏡を出し一寸髪の縫れを直し、こはく庄左衛門の傍へゆく 雪「チト御み足でも摩りませうか、ト恥かしき思入にて、小聲で言ふ、庄左衛門他愛なく寐入居る故、あたりを見廻しもぢくしながらそつとかいまきの中へ手を入れさする思入有つて 雪「よくマアおよつて、ト庄左衛門の顔をじつと見て色合の思入、此時隣より市出で戸の透間より内を見て 市「エ、畜生め、ト大きく言ふ、此聲にお雪悔りして起直るを木の頭、此模様よろしく合方寺の鐘にて、ひやうし暮。

六幕目

酉暮六ツ時
番場巷浪居の場
蛇山無縁寺の場

本舞臺三間の間常足の二重、上手一間障子家體、正面暖簾口、上手一間の押入戸棚張交の襖、下の方鼠壁いつもの所門口、此外雪のふりし板塀都て本所番場町小汐田浪宅の體、爰に長家のか、アおくらや

つし形り、前垂禱かけにて七輪へ薬土瓶をかけ薬を煎じてゐる、下手に三立目の判人勘六立懸り居る、此見得さんげくの唄にて暮あく、トおくら七輪をあふぎながら、

「モシ、何の用かは知らないが、病人の有るこちらの内、マア静にしてお、んなさいナ 勘六「イヤ、静にやア成りにくい、こつちの内之又之丞どんに聞かにはやアならねへ事が有つて態々出懸けて来たのだ、些とも早く逢せて下せへ 勘六「早く」と言つたとて、今言ふ通りこちらは病人、今すや」と寐てござ

るから、起してあげる迄待つておくれ 勘六「薬を煎じて居るからは、こなたは雇ひのおばさんだナ 勘六「イヤ、エ私やア隣に居る者だが、一人者のこちらの内、病人で不自由勝隣りづからでお世話をするが、さうしてお前はどこからお出だへ 勘六「私やア品川の湊やから、子供の事につき出懸けて来た、判人の勘六と言ふものサ 勘六「ハ、アそんならこちらの内のおかみさんが、勤奉公に行つて居なさる湊やの内からおいで

のかへ 勘六「サア其女の事について、急に逢はにはやア成らねへのだ、些とも早く逢せて下せへ 勘六「今取次いで上げるから、些との間待つて居なさい、トおくら立上がる、此時上手障子家體にて 勘六「其取次には及びませぬ、只今それへ參るでござらう、ト合方になり、上手障子家體より小汐田又之丞着流し、五十日かづら病後目やみの體にて出る 勘六「起きて居るなら居るやうに早く爰へ出ればい、に、ト双方よろしく住ひ

小「是は、勘六殿ようこそお出下された、病後の勞れにとろくとまどろみ居つたる故、失敬は御免下され、只今あれにて承れば、なにか過急の御用とやら、シテ其御用事は如何やうの儀でござるナ 勘六「サア用と言ふのは外でもない、こなたの判で勤めに来た湊やのお浪さんが、今朝明方に脱落した故、湊やの内は亂さわぎ、夫でわざと出懸けて来たのだ 小「何といはれる、スリヤアおなみが脱落せしとか、ト

勘六「思入合方きつぱりとなる 勘六「是は其様にとばけちやアいかねへ、兄のつもりで賣なすつたが聞けばこなたの女房で、浪人の身のたつきに逼り、咄し合で賣つたとやら、外の子供と譯が違つて、浮氣をした噂も聞かず、い、人の有る様子もなければ、足と言ふのはこつちの内だ、大方こつそり逃げて来て、何所ぞに隠れて居る事は、年中家業にしてゐる丈蛇の道はへび、毒虫の穴をさがして突當つたのだ、かう言ふ世界の事だから、年季をますの仕置をするのと、やかましい事は言はねへから、あの子を器用に爰へ出して、私に渡してくんせへ、トおくら是を聞いて居て 小「そんなら今朝の明方に品川を脱落して、ト又之丞も思入有つて 小「扱は昨日縁切の離別の狀がと、きし故 勘六「エ、ト問答める又之丞氣をかへて 小「ハテ不届

なるかれが行、勤の身にて有りながら御主人の目をかすめ、脱落を致せしとは以ての外にござる故、疾にも是へ參りなばお人を請ける迄も無し、此方より送り届けてお詫を致すでござらうが、彼が脱落せしと承るは今が始めて、夢にもしらぬ儀でござれば、何卒外を御詮議下され、又そこ許がお歸り有りし跡へ彼めが来りなば意見を加へ、早速に御主人方へお返し申さん、扱々夫は御苦勞千萬、お氣の毒にと、ト言ふを冠せて 勘六「だまれ、エ、黙りやアがれ、其氣体はよして貰はう、お爲ごかしで言抜けても其手はくはねへ

勘六「勘六さんだ、今此方が口はしつたをちらりと聞いた地獄耳、心を鬼に悪法を書いて居ながらしらばつくれ、佛造つた挨拶も魂がぞでねへからうかくしやべつた口うらに、昨日何かあの子の所へとつけたと言ふぢやアねへか 小「サア夫は 勘六「夫見た事か夫婦なれ合大膽にも、玉を釣出ししらばつくれ、この黒つばい判人の眼をぬきにかゝるとは、見懸によらねへ太へやつだ、サア玉をすなほに渡せばよし、四の五のとぬかしやアがれば出る所へ出てしらちを付る、おれと一所にうしやアがれ、ト立懸るゆる 小「サ、其お疑ひ

四十七石忠筋計

八一八

八一八

八一八

八一八

八一八

は御尤なれど、是には様子有つての事、先々お下にお出下され、ト勘六を直敷なため、小「何を隠さう我方より、昨日一封認めて彼が方へ送りしは、夫婦の縁を切らうが爲遣しましたる離別の状、子細と申すは拙者事も、かく浪々にて長の疾病、薬用手當に差支へ、妻を苦界へ沈める程、時運拙なき身の上故、よしなき我に義理立なし、御主人へ不奉公せば却つて其身の爲ならず、長の病氣に貧苦を見兼ね、苦界へしづみくれたれば、我への操は夫にて立つ、只此上は其身の爲、末頼母敷客あらば、夫にしたがひ身を任せ、すこしも早く苦界をのがれ、行末樂に致せよと、去状そへし一封をかれが方へ遣はせしが、もしや夫をば恨みに思ひ、今朝缺落致せしかと、口外せしもこちらの當推、古人の句にも有る如く、けふは向ふの岸に咲く、浮草の身のうき勤め、夜毎にかはる枕故、其去り状を幸ひと、己が心に好きあふた、間夫とやらを拵へおき夫と一所に逃げたる者か、拙者に於ては夢にも存せぬ、子細と申すは右の譯、また此上にも疑はしくば、見らるゝ通りの此あばら家、別に隠るゝ所もござらぬ、家捜しを召されてなりと、その疑念をお晴し下され、小「ほんに夫が何よりめんばれ、わづかにせまい裏家住居天井とても張てはなし、縁の下から戸棚のすみぐゝ、家捜しを成されたら居るか居ないかわからうわいなア、ト勘六思入有つて、勘「イヤ、ヤヤさうよ、家捜しをして見ると言ふわなにか、つて、居ねへ内を精出して捜すやうなそんな安い俺でもねへ、たとへ内に居やうが居めへが、いはば此方が判方なり、親元代りの賣主なれば、何處が何處迄懸り合、いよいよ玉が見えねへ日にやア、身の代金をついた上、お定りの法が有るは、ソリヤアこんなも承知で有らうの、小「ソリヤア早や手前より賣主故、償ひ方をせねばならぬが、見らるゝ通りの長の忠ひ、微な煙も立兼ねて、妻を勤にやる程なれば、どうも當時の所では、勘「出来ねへと言ひなさるのか、そりやア其方の

得手勝手だ、たとへ知つても知らなくつても、賣つた女が缺落すりやア、始末を付けるはこんたの役だ、夫をとやかう言ふ日にやア、いやでも出る所へ持出して、白黒いを分けにやアならねへ、オイ隣のおばさんとやら、爰の内の家主は何處だ、勘「大屋さんは知つて居るが夫を聞いてどうおしだ、勘「どうで地道の掛合ちやア急に咄しは分らねへ、届ける所へとどけて置て、てきはきと懸合にやアならねへ、勘「大屋さんなら隣裏、番附長屋の井戸端をぐるりと廻つて三軒目、との六番を左に見て、横に曲つて突當りの、腰障子からさされてすつと奥の格子作り、そこへ行つて聞きなさんせ、勘「イヤ大層こみ入つた長家だが、い、鹽梅に知れ、ばい、が、と門口へ出る、小「然らば判人勘六殿、勘「又之丞さん、勘「をと、ひお出、ト門口をしめる、勘「人をびちぐのやうにしやアがる、ト花道へゆき、勘「お浪の逃げたを種にして、又之丞めを相手取り、元金をつかせて置き、又源四郎からたんまりと纏めた金をふんだくり、い、春を仕てへものだが、何にしても隣裏の家主が知れ、ばい、が、トさんげ、になり向ふへは入る、又之丞思入有つて、小「お隣のおかみさんいろゝお世話様になります、勘「イエどう致しましてほんに、ぎす、とすごみな事計り言まして、餘り面が憎いから、隣裏の家主をわざとをへて遣りましたから、大方方々歩いてまごつくでござりませうわいなア、小「申さば先は兩賣づく、どのやうに申さう共、勤に遣りし女房が、缺落せしが此方の落度、ア、困つた事が出来致した、勘「夫はさうと私は油を買つて参りますが、何も買物はござりませぬか、小「ム、油を買ひにござるなら、其序に身共が宅のも一合買つて来て下され、勘「ハイ、小「畏まりました、勘「油さしを出す、又之丞は眞盆の引出より壹朱出し、小「是で代をお拂ひ下されい、勘「畏まりました、

ドレ行つて参りませう、ト油さしを持ち門口へ出で、「ツイ忘れて居ましたがお薬が煎じ上つて居ります、お跡でお上り成されませ。」
 小「イヤ何から何迄御厄介。」
 「ドレ内へ寄つて行きませうか、トおくら下手へは入る、跡合方になり又之丞薬を呑む事有つて。」
 小「隣家の誰とおくら殿、一ト方ならぬ厚い世話忘れは置かぬ、忝い、夫に付けても我眼病、薬は吞共効験無く、兼て企つ大望も、いよ／＼今宵と定まる故、跡の難儀を懸けまいと、きのふ便りを幸に、女房方へ離別の状、差遣はしたが害となり、かれが主人を缺落せしとは、深き子細をしらぬ故、我に恨を言ふ心か、但し勤の其内に、言交したる者有つて、夫と二人で逃げたるか、ア、何に付けても彼が身に、かゝりやア繋がる此身の難儀、ハテ扱困つたものぢやナア、ト思案の思入、竹になりたやの唄になり、向ふより大鶯文吾やつし形着流し半天難股引尻端折り、草鞋がけにて煤掃竹をかつぎ出で来り、花道にて思入有りて。」
 文「鶴裳を着て徘徊すと、詩につらねたる雪中を、身には襦袢のそぼろをまとひ、竹や／＼と呼びあるくも、最早今日限りと思へば、暮合早き冬の日も、ハテ待わびしきものぢやナア、ト舞臺へ来り。」
 文「又之丞さまお宅でございまするかな、ト門口を叩ける、是にて又之丞、文吾を見て。」
 小「オ、竹賣の文六殿か、マア／＼此方へは入らつしやれ。」
 文「左様なればお詞に任せ、一服やつて参りませう、ト竹を門口へ立懸け、草鞋を脱ぎ内へは入る、又之丞有あふ手桶を持行き。」
 小「是にて足を洗はつしやれ。」
 文「イエ／＼雪中なれば此通り、足は少しも汚れませぬゆゑ、ト是にて又之丞門口の外へ思入有つて、びつしやり締め。」
 小「大鶯氏まづ／＼あれへ。」
 文「然らば御免下されい、ト是より合方きつぱりとなり、双方よろしく住ひ。」
 小「計略とは言ひながら、かく雪中をお厭ひなく、下賤に交り竹賣商人、嗚かしてお寒い事でござらうまづ／＼お手をおかざし成されい、ト有合ふ火鉢を出す。」
 文「お心遣ひ、忝うござ

る、イヤモウ是も主君の御爲と思へば、さのみに存じませぬテ。」
 小「シテそこ許の御入來は、定めて今宵會合のお談じでござらうな。」
 文「されば其儀も御談じ申すが、又其外にそこ許の、お耳に入れ度儀がござつて。」
 小「シテ仰せらるゝ其子細は。」
 文「又之丞殿御聞き下されい、ト合方かはつて。」
 文「只今當所を通行なす故、御近邊に住ひ致す八百や元助の方へ立寄りしに、かの方に同居なす高田郡三郎が儀に付て、一ツの珍事出来せし故。」
 小「シテ又夫は如何なる譯。」
 文「其子細と申すは貴殿も御存知らるゝ如く、郡三郎が兄たる元助が借宅なす地主と言ふは、足利の昵近内山官左衛門といへる者、かれに一人の娘有つて、夫と高田と嫁合さんと、出入の醫者たる雲齋を仲立て、數度の言入れ、此儀に付て兄元助當惑致せし子細と申すは、兼てより郡三郎を養子に欲しき存念より、内山官左衛門といへる者、日頃よりして元助へ種々の恩義をさせ置て、のつ引させぬ無理所望、なれ共高田は我々と、一味同志の列なれば、此儀をいつかな承引せず、深き心願有る故にと、兄に断り申せしを、弟が心底知らざる故、以ての外に立腹なし、いか成る心願有る故と、問詰られて是非無くも、肉身分けし兄弟故、よもやと思ひ郡三郎、兄に大事を明せしを、流石下賤の口さが無く、内山方へまつかくと、我々共が企を、口外せし故官左衛門、猶々高田を懇望なし、萬一婚儀をいなむ時は、足利家へ申達なし、義黨の本意を空しくなさんと、理を非にまげし無理難題、かゝる事に及びしも、大事を兄に口外せし、郡三郎が不覺故、自殺致して義黨の者へ、言譯なさんと致せしを、某切りに押しめ、一味の者へ言譯に切腹なしして相果なば、其身の言譯立つにもせよ、義黨の本意を空敷なさは、冥途へ趣き亡君へ申譯有るまじきと説得致し参りしが、かゝる仕儀ゆゑ高田には今日の際に相成り、是非無く義黨の列を洩れ、不義士の中へは入つてござる、珍事と申すは恁の次第、替り易きは世の中の、習ひと世俗

に中せ共、わづか流浪の内だにも、種々の事共出来なすは、うつれば替るものでござる。小「スリヤ夫故に高田には、徒黨の列を餘儀無く洩れ、不義士の列に替りしとな、ハテ扱如何にも氣の毒千萬、それに付けても其許が、能ぞ自殺をお止め下され、かく御説得あればこそ、故無く事は納まれど、郡三郎が一存にて切腹なさは、先方にては婚儀破談を憤り、義黨の大事を申達なし、我々共が是迄に盡せし事も水の泡、ハテ扱ひあいな事でござる。文「小沙田氏の仰の通り、大事の前の小事故、かくは計らひ申せしかど、忠臣無二の郡三郎、嘸残念で有りつらん。小「其心中を思ふに付け、又残念なは拙者が身の上、長らく瘡の病にて、浪浪中のかんなんも、妻の節義に良薬調ひ、やうく全快致すと間も無く、又もや眼病。文「ヤ、小「イヤサ難病の揚句にて、殆んど當惑致し居まするて。文「イヤナニ小沙田氏お包み有れど其許には、鳥目でお惱み成さうがな。小「エどうして夫を、ト恟り思入。文「されば只今郡三郎より承りし貴殿の御病氣、鳥目でお惱みお惱み成さるゝと存せし子細は内山方より縁邊の儀に付、元助方へ参りし者は矢張貴殿が配劑受けし、御案内なる隣家の醫者にて、雲齋とやら申す者、彼が高田に語りしには、鳥目の病平愈なす、其良薬は有りながら、世にも得難き年度の生れ、酉の年月日時揃ひし七歳未滿の女子の生血を服する時は、忽ちに全快なす事疑ひなし、され共得難き品といひ、人命にかゝはる儀故中々以て調ひ難しと、先刻醫者の物語、ト是を聞きて又之丞思入有つて。小「スリヤあの酉の年月揃ひ、七歳未滿の女子の生血を服する時は全快なすとな。文「いかにも醫者の雲齋より郡三郎が聞きしとやら。小「夫ぞ幸ひ我實子。文「エ、小「イヤサ我一心にて良薬調へ、今宵の本望達する迄には全快致すでござらう程に、鳥目の事は此座ぎり、同志の者へ御他言は何卒御用捨下されい。文「其儀は委細承知致すが、たとへ百金二百金、高金の品なり共金子に替る藥ならば、手に入

る事もござらうが、世にも稀なる年度の生れ、得難き血汐を過急の事には。小「そこを拙者が一心で、日頃信する神佛へ、祈願なしても良薬調へ、本望迄には急度全快。文「ア思へば昨日兩國橋の上において、俳友たる管子が吟も身に當る、水の流れと人の身は。小「老少不定の習ひ逆、病の器にいつ何時、花に嵐の愁が有るか。文「知れぬ浮世も煉竹の、ちりを拂つてあすからは。小「汚名をきよむる年の尾に、めぐみの雪も降り積り。文「またれし翌も今日となり。小「寶の山へ入りながら。文「貴殿はむなしき御病氣とは。小「是も定まる宿業か。文「何に付けても世の中は。小「まゝにならざる。兩人「事どもちやナア、ト宜敷有つて文吾氣をかへ。文「思はぬ事にて長座致し、お邪魔のみ致してござるが、然らば成る丈其許にも、良薬調達致されて、御全快をばお待申すぞ。小「急度今晩討入り迄には本服の致すでござるが、シテ會合の其場所はな。文「夫ぞ先日某が、俳師の體に言ひ拵へ、兼て約定致置し、東兩國尾上町なる楠やと申す蕎麥屋方迄、何卒御入來下されい。小「委細承知仕る、然らば今宵かの方へ、参らば貴殿は俳友の、名に聞え有る子葉どの。文「又其許にも世に有る折、俳吟有りし其時の、お名を其儘潮水どの。小「先夫迄は我々は。文「やつす姿も今ニタ時。小「左様ござらば大徳氏。文「是にてお暇仕る、ト立上る、下手へ來り草鞋をはく、又之丞送り出で。小「くどうも申す様なれ共、我眼病を御他言は、ト言懸る、此時文吾草鞋をはいて仕舞ひにて竹賣どの。文「又之丞さまお八釜敷うござりました、ト件の竹をかつぎ、矢張竹になりたやの唄にて文吾向ふへは入る、又之丞跡見送りて思入有りて、門口をぬめる跡合方になり。小「とかうする内最早夕景、暮六ツ近く相成れば酉目の時刻も早しばし、今大徳氏が飼にて、思ひ當るは此程より、雲齋老が我への咄、

鳥目の病を立所に、治する薬は有りながら、世にも得難き秘法故と、言ひしは正しく酉の年月日時揃ひし女子の生血、幸なるかな我娘、年も七歳未滿にて天のあたへと思へ共、女房きさを品川へ勤にやる折娘をば、東葛西の在方へ、里に遣はし置たるゆゑ、今より駕にて走る共、遙に遠き邊土故、夜道を懸けては知れがたし、ハテ何としたものぢやナア、ト又さんげくになり、向ふより傳助白髪かづらやつし形、雜股引草鞋懸け、田舎親父にて矢張やつし形の娘の子供おしほを十文字に脊負ひ、古びたる番傘を持ち出來り、花道にて空を見て「ヤレノ草臥た〜、又大降りのおせぬ内と、足に任せて急いだが、腹の時計のあんばいでは七時半過でも有らうか、イヤやう〜の事で番場へ來た おしほ「おぢいさんおんぶはいやぢや、歩いて下さいなう」傳「エ、此餓鬼はおぶつてやればあるかうと言ふし、根性の曲つた餓鬼だぞ、只さへ耳の遠い所を、脊中できやア〜言はれるので猶々耳が遠くなるわへ、モウ向ふが手前の家だが、必らず家へ歸つても、半の粥計り喰はせた杯と、いつけ口を開くときかねへぞ」其様な事はいはぬから、父さんに逢はせて下さいなう」傳「何だと父さんには餅を買つて貰うのだ、そりやアどう共勝手にしろ、ト右の合方にて門口へ來り」傳「ハイ御免下さい、ト門口を明る、又之丞、傳助を見て」小「ヤこなたは里の傳助殿、娘を連れて丁度幸ひ、ヤレ〜よくマア御座つたなう、ト嬉しきこなし、おしほ脊負はれて居ながら」小「ヤア父さんぢや〜、ト嬉しき思入」傳「エ、八釜しい、トこづかうとして又之丞を見て心付き」小「イエナニはおやかましうござります、サア〜おしほやおんりしなく、ト猫撫聲にて脊中よりおろす、おしほ又之丞の方へ駈行き」小「父さん逢たかつたわいなう、ト紐る」小「オ、能マア戻つて參つたなう、ト此内傳助草鞋をといて内へ入り」傳「旦那さまお寒い事でございます、ツイ〜手前にかまけてお尋ね申しませぬ

が、お疾病はいかゞでございます、小「今年は取分け寒さが強く冷るせへか、抄々敷參らぬので困ります、ト傳助聞とれぬ思入にて」傳「イエモウ私はいつも達者でございます、小「夫は何よりよい事ぢやなう」小「イヤモウよいお子とも〜、人様のお子故に大切にお育て申して、三度の御膳も四度づ、うまい物でおあげ申しました」小「夫は御丹精に能可愛がつて下された」傳「イエ欲をかきは致しませぬ、きめ通りのお里扶持で随分お安いものでござりますな、ト是にて又之丞大きな聲にて」小「イヤ能可愛がつて下された」傳「イエあんまり能も參りませぬと申す譯は、内の婆めが三日跡に喰合せでも悪かつたか、ころり往生致しました、が、死ぬる今はの際迄も、此お子の事を言ひつゞけ、たとへ些かの間でもかうして里に取つて見れば、我子のやうに思はれて、他人のやうには思はれぬ、私が死んでも此お子をば、粗末にして下さるなど、夫計りを言死に、可愛や婆めは三日跡に、ころり往生いたしました、トめそ〜泣出す」小「ヤレ〜夫は氣の毒千萬、嘸かし過急の病死にて、此方も力を落したて有らう」傳「ハイ今年が六拾壹本卦がへりでございます、イヤモウ幾年に成つても連合に別れるのはよくないもの、婆が臨終の頼み故此お子を育て、上げたいが、何を言つても男の手一ツ、此御子を育て兼ねますか、御迷惑ではござりませうが、木の實は元の親御さんへお返し申すでございます、小「何の迷惑でござらうぞ、丁度幸ひ差當る娘の血汐が、〜、イヤサ丁度むかひに遣はさうと只今思ひ居つたる所、能ぞ連れてござつたなう」傳「里扶持の引残り二朱計りござりまするが、婆めが死んだ香典にお貰ひ申して置きます、小「イヤ御念の入つた其斷り、何はなく共時分時ぢや、夜食でもたへて行ッしやれ」傳「イヤ自分の餘徳ではござりませぬ、皆な婆めが物入に遣ひました」小「イヤサ夜の飯でも喰て行ッしやれ」傳「イエ夜道でも大事ござりませぬ提灯を持つて參りました、〜、

左様ならお暇いたしましたする、ト草鞋をはき表へ出て「ヤレ〜是で厄介拂だ、トやはりさんげ〜の唄にて傳助向ふへは入る」小「イヤあの親仁も餘程耳が遠いと見える、自分の言ふ事のみ申してとう〜戻つて行き居つたわへ」小「コレ父さま何卒是から何時迄も内に置いて下さりませ」小「オ、置いてやる共〜もう是からは何處へもやる事ではないぞよ」小「うれしい〜、ト悦ぶ故又之丞思入有つて」小「ア何にも知らずに、ト言懸けて氣をかへ」小「コレ娘顔を見せやれ」小「アイ〜、ト顔を上げて見せる、又之丞じつと見ても「ア親はなく共子は育つと、少時の間見ぬ内によう成人をしやつたなう、トかはつた合方に成る」小「其方は如何なる宿業にや、また當歳の其折は夫相應に育てしも、物心つく頃になり御家の騒動、是非無くも父が主家を流浪なし、食し暮しに衣類さへ心に任せぬ夫のみか、うみの母にも愛き別れ、父が病氣に育てかね、知らぬ田舎へ里にやり、他人の手しほで嘸や〜、愛い辛い目をしたで有らうが、其里親にも死別れ、父の手元へ歸るやいな直に其身も、トホロリと思入有つて氣をかへ」小「イヤサ其身にほしき物あらば、何なりと買つて遣はす、たべたい物を言ふがよいぞや」小「アイ私が好きな團子を、どうぞ買つて下さりませ」小「何ちや團子がほしいとな、然らばあんのついたのを只今買つて遣はすぞよ」小「イエ〜あんのお團子よりお月さまへ上げるやうな、白い方がよいわいなア、ト又之丞思入有つて」小「何にも知らぬ子心にも、虫が知らすか、〜、イヤサ白い團子を買つて遣はすぞや、ト矢張さんげ〜にて下手より以前のおくら油さしと線香を一把握ち出來り」小「木に私とした事が一寸裏へ買物に出ると、角の番やで呼込まれて、追懸追懸咄しをされるので、お使ひが遅くなつたわいなア、ト門口を開け」小「ハイ油を買つて参りましたぞへ、ト内へは入り」小「是は大きに御苦勞でござつた」小「ついで番太へ寄りましたら、懃お線香がない御様

子故、お釣の内を買つて來ましたぞへ、トそれへ出す」小「ナニ線香を、ト思入有つて氣をかへ」小「何から何迄 添うござる」小「モウ日の暮れるのにもござりますまい、序に行燈も出して置きますぞへ、ト押入戸棚より行燈を出し能所に置く事」小「コレ娘お隣のおばさまに御挨拶を致さぬか」小「おばさん今日は、ト辭儀をするおくらおしほを見て」小「オヤマア何處のお子だと思つたらおしほさんでござんしたか、大層大きくおなりだねへ、ほんに私は見違へましたよ、さうしてマアおつかさんに能似てどこもかしこも氣目こまかでない、娘さんにおなりだねへ、何時マアお内へお歸りだへ」小「里方の母親が病死致して手が無い、只今里の親父殿が送つて参つた所でござる」小「オヤ左様でござりますかへ、モウ此位におなり成されば人手に懸ける事はござりませぬ、お内へ置してお上げなさい、此お子杯は子からは能し、モウ五六年もお立ち成さると夫は〜此お子さんでお父さんもお樂が出來ますわいなア、ホ、ホ、ト宜敷笑ふ、又之丞思入有つて」小「其五六年は扱おいて、明日とも言はず今宵の内に」小「エ」小「イヤサ今宵は内にて緩くりと抱て寐かしてやりませう、ト誂へ葉唄の相方になり、向ふより三立目の近藤源四郎着流し大小下駄かけにて出て來り、花道にて」小「今朝明方に八ツ山下でおなみが駕へ乗る所を、俺がちらりと見附けた故、駕や二人と言合はせ、玉は此方へ巻上げたが、其時拾つた守袋、中に有つたる去り状を種に遣つて又之丞が、性根をさぐるこつちのもくろみ、懃に向ふの浪宅が小汐田が住居だが、彼奴内に居ればい、が、ト右の合方に舞臺へ來り、内を覗いて見て思入有つて、衣紋を繕ひしかつめらしくなり」小「お頼み申す〜」小「ハ〜何方からお出でござりまする、ト門口をあける」小「拙者は當家の小汐田氏と古傍輩の者でござる、又之丞殿御在宅ならば、御面談を致し度態々参りし者でござる、何卒お取次下されい」小「オヤ左様でござ

りますか、もし旦那へ古傍輩のお方逆何誰やらお出でござります。小「何古傍輩の御仁とな、ト門口の近藤を
 見て、小「是は源四郎どの、見苦敷拙宅へようこそ御入來下された、御覽の通りあばら家ながら、先々是
 へお通り下されい。源「オ、又之丞殿お宅でござつたか然らば御免下されい、ト合方替つて内へは入る、
 源四郎よろしく住ひ。小「おくらどのの憚りながらお茶をあげて下されい。小「ハイ、畏りました、ト茶
 を汲んで出す事杯よろしく有り。源「イヤ、必ずお構ひ下されな。小「コレ父さんお團子はまだかいナア
 小「エ、お客人の御入來なるに、行儀の悪いたしなみ居らうぞ。小「そんなら何おしほさんはお團子が欲
 しいのかへ。小「イヤお聞き下され、只今拙者が娘に何ぞ欲しき物有らば、買うて遣はすと申したれば、團子
 が好故買うてくれと、丁度ねたつて居る所、お客人の前をも憚らず誠に子供と言ふものは致方のない
 ものでござる。小「夫なれば先程の油のおつりがござりますから、買うて来て上げませう。小「おばさん一
 所に行かうわいなア。小「一所に参るはよろしいが、外で喰べては相成らぬぞ。小「夫は私がついて居れば、
 お氣遣ひはござりませぬ、トおしほを背負ひ往懸るを、又之丞思入有つて。小「ア、コレおくらどの其お序
 に石原の因果地蔵へ参らせて下され。小「ハイ、畏りましたそんならあなた御緩りと、ト、ト行つ
 て参りませう、トおくらおしほを脊負ひ下手へは入り、此内始終源四郎はおしほに目を付けて居る。源「イヤ
 何又之丞どの、アノ御息女はお手前のでござるか。小「あれは勤に遣はしましたる、女房きさと拙者が中
 へ設けましたる娘でござる。源「夫ぞ此方のよきをと。小「エ、源「イヤサおとなしやかな能お子でござる
 小「シテ近藤氏には何故にかく見苦敷拙者が宅へ。源「サ参りし子細は其許より、義列の長たる大星氏へ身
 の詫事を願ひ度、夫で態々参つてござる。小「とは又何故如何なる子細で。源「又之丞殿お隠しあるな、トす

つけりいふ。小「何といはる、ト合方きつぱりとなり。源「お手前逆拙者として、同じ鹽治の浪士なれど、身の
 放埒に拙者めは、一味をはぶかれ不義士となれど、能々思ひ廻して見れば、御主君鹽治高貞公御切腹有りし
 より、御家改易家來はちり、多く離散の其中に忠義を思ふ人々は主君の戀情晴らさんと、敵討の企て
 にて晝夜心を勞さるゝに、此源四郎はおめくと、主君の御無念餘所になし、日夜煙酒に身を持崩し、爰
 やかしこと徘徊なすは、武士の本意にあらざるを、先非後悔致せし故、改心なしておのゝ、お手助を
 致さんとて、扱は今日其許より、義黨の隊長大星氏へ御執成を願はんと、態々参上致してござる、ト是を
 聞き又之丞思入有つて。小「イヤ何事かと存じますれば、以ての外なる其お頼み、成程本國離散の砌は、主
 君の御恩を報せんと一味徒黨を結びしなれど、貴殿も御存じらるゝ、如く力と頼む大星氏が、放埒墮弱の行
 ひ故、同志の面々呆れ果て、壹人放れ二人はなれ、心々に身退いたし、今では一味徒黨の者連、誰壹人も
 ござらねば、かく言ふ拙者も其如く、疾より神文取返し一味の列をもれたれば、今にも仕官の口有らば、
 何れへなりと主取なし、身の後榮を計る所存、敵討の企てなどとは思ひよらざる事でござる、ト取あげぬ
 こなし、源四郎是を聞き思入有つて。源「スリヤいよくお手前には、二君に仕へる御所存とな。小「浪々なし
 ても又之丞武士の詞に一言はござらぬ。源「スリヤあはいよく。小「ハテいらぬ御念さ、トきつぱりと言ふ、
 源四郎思入有つて又之丞の傍へぐつと詰より。源「小汐田氏、イヤサ又之丞どの、チエ、見下げ果たる此方
 はナア、ト合方きつぱりとなり。源「放埒墮弱の拙者でも、改心なして亡君の仇を報ずる所存なるに、君の
 大恩打忘れ、二君に仕へる所存などは、言語にたへたる人面獸心、かゝる所存のお手前と同席なすも刀
 のけがれ、主君の名代某が成敗なしてかう、ト又之丞を引付け煙管にて打すゑる。源「サアかう

を取直し 小「ト、サア申すはみんな愚痴の至り、何をいつても某が、妻を苦界へしづめしこそ、武士に有らざる一ツの誤り、只此上は大望の支度をなすが何より肝要、夫に付ても眼病の、薬となる可き我娘、ア、早く戻つて参ればよいが、ト早き合方ばた〜になり、向ふより以前ののおくらはだして、一散に走り出で来り、直に舞臺へ来り門口をあけ 小「旦那さま〜大變が出来ました〜」小「ナニ大變が出来せしとは 小「今石原から戻りがけ、女夫石の此方の所で、摺れ違つたる浪人もの、頬被りにて面を隠し、おしほさんを引か、へ雲を霞と逃行きし故、ヤレ泥坊よ人攫ひと跡をおうて参りましたが、此夕暮の暗紛れ、とう〜影を見失ひ、濟ぬ事を致しました 小「何スリヤあの娘をヤ、〜、トどうとなる、此時暮六ツの本釣鐘を打込み又之丞心のせく思入にて 小「浪人姿と有るからは、扱は近藤源四郎めか、シテ〜夫は何れの方へ 小「石原通りを真直に、お竹藏から割下水の方へ参りました 小「スリヤ割下水の方へ参りしとな 小「ほんに〜お氣の毒な、お長家の衆でも頼んで来やう、ト下手へは入る 小「ム、なくて叶はぬ大事の娘、コリヤかうしては、ト大小を出す心にて上手戸棚の所へ行うとして行燈に突當る、たち〜と轉ぶ、此内始終本釣鐘を打込み、又之丞聞耳たつて恠りなし 小「ヤ、娘が凶變に轉倒なし、耳へ入らざるあの鐘も、も早暮六ツ鳥目の時刻、ト當惑のこなしにて又きつとなり 小「イ、ヤ猶豫なす可き所にあらず、たとへ目かいは見えす共、跡追懸けて取戻さん、トさぐり〜戸棚をあけ、大小を出して腰にたばさみ、心のせく思入にてツカ〜と門口の方へ行き門口の柱へ行あたり、又どうとなつて起上り 小「エ、恚うもいすかに、ト拳にて腕を打つて道具替りのしらせ 小「なり行くものか、ト無念の思入れ、よろしく時の鐘早き相方にて道具廻る。

本舞臺三間の間平舞臺、正面本堂あみだ如来佛壇の書割、此前にしゆみ増是へ打敷をかけ、此上へ蠟燭建へあかりをてらし有り、左右二段の棚に位牌を大分並べたる位牌棚の書割、上下折廻しの杉戸、前面一面雲に蓮華を畫し欄間、此道具都て古びたる荒寺のもやう宣敷、上手に以前の源四郎一升徳利の酒を茶碗につき手酌にて呑みながら、傍へ三立目のおなみを引付居る、下手に三立目の駕かき二人たき火鉢へ卒塔婆を折くべ焚火をしてあたりある、此見得禪の勤めにて道具留る、ト木魚入の相方になり、源「コレおなみ去りとはお主も分からぬ者だ、去り 状迄書いて送り愛想をつかした又之丞に義理立をして、とやかう言ふから物は當つて碎けると、おれが自身に出馬をして又之丞に掛合へば、實は女房賣つたのも、外に可愛い女が出来、邪魔になるから病氣をかこ付け、薬の代と言拵へ、年一ぱいに苦界に賣つたが、親元だとか賈主だとか、肩書の有る其内はお主と縁が切れねへから、去り 状書いて離縁をすれば、此方にいなやは少しもねへから、色にしやうと女房にしやうと、勝手次第にしてくれると、又之丞の了簡迄開札して来た上からは、去られた亭主に義理を立て、とや斯うといはうより、此源四郎の心にしたがふがい、ちやアねへか 源甲「さうとも〜源旦那のいふ通り、おのが女房を女郎に賣り、辛い勤をさせて置いて、外におつな女を拵へ、去り 状書いて離縁をするとは、あんまり實のねへ仕方だ、夫にいくら義理を立つてもこりやアむだの輕業だ 源乙「牛を馬に乗りかへて、源旦那にしたがへば、けふから爰の御新造様、せ、ッこましい宿場より、却つて香氣な夫婦暮し、此明寺で樂々と、月日を送るが上分別、うんと言つて源旦那の御新造に成つた方が、おまへのためと言ふ物だ、ト此内お浪うつむいて居て、顔を上げて向ふへ思ひ入あつて 源「エ、恨めしいこちの人、そんなら私を苦界へ沈め、外に可愛い女を拵へ、私がある

つては邪魔故に、去り状書いて送りしとは、そりや情ないお前の心、なみ大體の事ではなし、子迄なし
 たる女房を、去つておまへは濟むかいなア 源「サア濟むも濟まぬもかう成つては、いくら言つてもかへら
 ぬ事だ、心の腐つた又之丞に義理を立てるはむだな事、よし又亭主の又之丞がお主の捻を戻すと言つて
 も、一端よこした此去り状おれが手に有る上からは、金輪奈落濟ましやアしねへ、ト懐より以前の去り
 状を出して見せる、お浪合點の行かぬ思入れ有つて 浪「夫がどうしてお前の手へ、源「は入つた譯は高輪で、
 思はず拾つた守り袋、中に有つたる去り状が、此源四郎が手に入つたも出雲の神がお主をば、おれが女
 房に持たせやうと、ちやんと結んでくれたのだ、定まる縁と断念めて、あの又之丞は思ひきりやれな 浪「イ
 エイエなんと言はしやんしても、私しや夫に去らるゝ覺えは露いさ、かもしんせぬ、是には定めし譯有
 る事、主に逢うて様子を聞き、私しや恨みが言ひたいわいなア 乙「扱々お前も思ひ切の悪い、先で愛想をつ
 かして居ちやア、何を言つてもむだだと言ふに 甲「悪い事は言はねへからうんと言つて、源旦那に暖めて
 もらひなせへ、冷てへ思ひをするだけそんだ 浪「イエ〜私しやどう有つても主の胸を聞かぬ内は、外のお
 人に此肌を任せる事は成らぬわいなア 源「そんならお主はどう有つても、得心はしねへと言ふのか 浪「アイ
 お氣の毒だが、源四郎さんお前に此身は 源「ヤ 任せぬわいなア、トきつぱりと言ふ、是にて源四郎憤と
 して「面白くもいづた、さう又お主が氣強く出りやア、得心させる法が有るのだ、コウ熊や今おれが連
 れてきた餓鬼を爰へしよびきだせ 乙「アイ〜合點だ、ト下手の杉戸を叩ける内に以前のおしほ、猿ぐつわ
 後手に縛られて居るを、怒や引出して来る、お浪是を見て 浪「ヤア其方は娘どうして爰へ、ト娘の傍へ行
 かうとするを 源「エ、寄りやアがるな、トお浪を引きする、是より眺への相方になり、源四郎有合ふ 經「机

へ腰をかけ 源「あの餓鬼の傍へ行度ばうんと言つて得心しろ、さもねへ内は金輪際がきの傍へは寄せねへで、
 さつき自身に出馬して又之丞から女房に、お主を貰つて歸りがけ、女房さつた證據には女の子は女
 に付くと、昔からの定法に、此おまつちよも連れて行けと、厄介拂ひに押付けられて戻つたが、是からは
 あのがきを、煮て喰はうと焼いて喰はうと此源四郎の好自由、お主が飽く迄おれを嫌へば、坊主が憎けりや架
 婆迄と、佛の前で地獄責、いくら泣いてもわめへても、町を放れた本所の、合羽干場を眷中にして、あた
 りは桑や茶畑に、人家も稀な萱軒家、折々雪も古寺に、夜の勤のしつぱりと、とけて往生する迄は、どら
 にやう鉢のうつ、責、又はかはらの松葉ぶしで、責める道具は種々さつた、みぢめな思ひをしねへ内、器
 用な返事を聞かしてくりやれナ、ト宜敷言ふ、お浪愛ひのこなし有つて 浪「エ、胴欲なこちの人、何科もな
 い此子迄、人も有らうに非義非道な、源四郎づらに渡すとは、お前は氣でも違ふたかいナア 源「エ、とやか
 うと面倒だ、夫小びつちよをひつばたけ 源「合點だ、ト有合ふ卒塔婆にて兩人して、おしほを散々に打
 する、是にておしほは猿轡の儘苦しむ事宜敷、お浪是を留に行うともかくを源四郎おさへ付て居る、ト
 ドお浪たまりかねたるこなしにて 浪「ア、コレマア〜待て下さんせ、何科もない其子をば、折檻をしやう
 より、其子の替りに私をば折檻して下さんせ 源「べら坊め、お主を責めるはしつぱりと、得心させて上の
 こと、其前方にあのがきを、折檻するのが此方の山だ、加減をせずとひつばたけ 源「合點だ、ト又兩人に
 ておしほをさんく〜に打する 浪「エ、年端も行かぬ其子をば、寄つてたかつて責めるとは、お前は鬼か蛇
 かいナア 甲「イヤ鬼でもなけりやア蛇でもねへ、八ツ山下の辻褫ではげ熊にねこ虎と言ふ、人にしられた怨
 かきだが、うめへ仕事が少なへから 乙「こんな仕事の相棒に、肩を入れるもたんまりと、まとめた酒手がほ

しいから、源四郎旦那と三枚で、一ぼんつツばる息杖の、悪い道をば承知するのだ。源「エ、是苦限を助ける阿彌陀様も、現在後に有りながら、こんな責苦にあふと言ふのは、いかなる因果か情ない、どうぞ仕やうはない事かいナア、トよろしく泣伏す。源四郎思入有つて。源「サアどうだ可愛い娘が助けたくば、うんと言つて得心するか、お主の心只一ツで、鬼を出さうと御を出さうと、爰が境に六道の、辻駕二人が見る前で、迷はず返事を聞かしてくりやれ、ト是にてお浪いろ〜思入有つて心を定め。源「成程お前の言ふ通り、夫程思うて下さんすを、とやかう言ふたは私が誤り、そでない夫に操を立て、ういつらい目を仕様より、此身を任せて責苦を逃れ、あの子の無事を見るのが嬉しさ、お前の心に従ふわいなア。源「こいつは風が。乙「かはつて来たわへ。源「そんなら己の心にしたがひ、爰でしつぱり抱れて寝るか。源「アイ其替りにはあの子の責苦、どうぞ助けて下さんせいナア、トうつむいて泣く。源「そりやア助けねへでどうするものか、お主がおれの女房になれば、縁につながらおれの娘だ、可愛がつて育て、やる、コウ虎や縛つた細をといてやれ。源「アイ〜、トおしほの猿轡と細をといて。源「ヤレ〜お前も可愛さうに、おつかアが悪いばかりに、おめへ迄が痛いめをしたのだ、ト是にておしほははしく〜と泣きながらお浪の傍へ行きし。源「か、さん此手が痛いわいなア。源「オ、尤ぢや無痛かつたで有らうわいなう、トおしほを抱めて泣く、源四郎思入有つて。源「サア焦う物が極つたら、なんでも物は早いがい、一寸爰で内祝言だ、お主が呑んで己にさしやれ、ト有合ふ筒茶わんを取つてさし出す。源「私しや少しもいけぬ故、かはりにのんで下さんせ。源「そんならおれが名代に、どれ二三ばいかけ付けやうか、ト手酌にて酒を呑む。甲「もし旦那へかう直ぐが極つたら。乙「いつけん物をお願ひ申します、ト酒手をねたる思入。源「ソリヤおれも兼てきめひき、ト紙

入より金を出し遣り。源「ソレ持つていけ。兩人「コリヤ大きに有難うござります。甲「コウ虎、仲人は宵の内とやらで餘り長居は却つて野暮だ、そろ〜と出かけやうか。乙「違へねへそんなら源旦那しつぱり爰で。兩人「お楽しみなせへまし。源「ハテ爰らが極樂往生づくめだ、ト源四郎お浪を引寄せ、此模様風の音にて道具廻る。

本舞臺元の世話場の道具、二重能所に行燈をともし下手に千崎彌五郎ぶつさき野袴、大小にて住ひ、前に眞盆を控へ居る、上手に以前の又之丞住ひ、此見得相方にて道具留る。

千「最早暮六ツ過ぎ故、徒黨の人数皆一同、かの方へ會合致せば、小汐田氏にもお支度能くば、イザ御同伴仕らう。小「日頃のよしみと千崎氏には、よくぞ拙者をお誘ひ下され、忝うはござれ共、チト跡々へ申残す要用の儀もござれば、自由がましき儀でござるが、ト足お先へお出で下され。千「然らばト足お先へ参れば、御用が濟めばお跡より、かの方迄お出向成されい。小「直さま跡より参るでござらう。千「心せきにござれば是にてお暇仕る。小「是は〜お急ぎの事故鹿茶さへも進せ申さす、失敬御免下されい。千「左様ござらば小汐田氏。小「千崎氏御苦勞に存じます、ト彌五郎門口へ出る、又之丞是を送らうとして彌五郎が前に有りたる眞盆につまづき、たぢ〜と轉ぶ故彌五郎此體を見て。千「小汐田氏には正しくお目が。小「アイヤお氣遣ひ下されな、兩眼共に何んともござらぬ。千「ム、スリヤおかはりはござらぬとな。小「イヤモツ夜中ではござれ共蟻の道ふ迄分ります。千「スリヤ其許が、ト思入有つて刀をぬき、又之丞の前へ白刃をさしつける、又之丞是に少しも心付かぬ故彌五郎こなし有つて。千「是では今宵の。小「ヤ。千「イヤサ今宵は雪もつもるでござらう、ト鞆に納める。小「然らばお先へ彌五郎どの。千「貴殿のお出を相待ら申す、ト唄にな

り、彌五郎向ふへ這入る、是より床の淨瑠璃になり、

「大望の今宵となれど勇み無き、鳥目のなやみ身の難儀、うき小汐田がかちこごと、

ト床の淨るりになり又之丞思入有つて 小「ア、お浦山しい彌五郎殿、貴殿はお目やすこやか故囃や心も勇

まれて、會合の場へお出向ならんが、何を隠さう其は病後の惱みに鳥目にて、暮六ツ時より盲目同然、

まつかくと打明けなば、一味徒黨の人々に侮られんが無念さに、深く包み隠せども、討入場所へ至りなば

不覺を取る事必定なれど、其討死は兼ての覺悟、夫に付けても残念なは、眼病平癒致可き酉の年度の揃

ひし娘、人手に預け置いたるも、折能く今日宅へ戻り、天のあたへと悦びしが、又候人に勾引され、追懸

け行かんも盲目の、何れいづくと雲を當て、此又之丞が運命も、神や佛も見放し給ふか、かく迄武運に盡

き果てたる事か口惜しやナア、

「齒を喰ひしは難病の、身を悔みたる男泣き、折に降り出す白雪の、中をさまよふ親鳥が、翼たよわ

きセツ子の、子鳥をともしに妻鳥を、慕うて爰へよるの道、こけつまろびつ我家の門、夫と見るより駈け入

りて、

ト此内又之丞よろしく雪おろしになり、向ふより以前のお浪髪を亂し、おしほを連れ兩人はたくに走り

出で來り、直に舞臺へ來て門口をあけ、内へ入り又之丞を見て 涙「こちの人かム、

「心のゆるみさし込む癪、子はうろくとなじやくり、

トお浪癪の差込むこなしにてのツけに反て倒る、おしほはうろくとお浪にすがり 是か、さま、心

をたしかに持つしやいなう、

「呼べとこたへも泣聲を、聞けば覺えの我娘、

小「さう言ふ聲は娘でないか 父さま母さんが死んだわいなう 小「エ、なに女房が参りしとな、ト二

重より下りやうとして踏みはづし、轉び落ち 小「シテ、夫はいづく何れに、

「見えぬ目ながら我子を杖、妻の身内をさぐり見て、

ト又之丞娘に教へられ、お浪の傍へ來り、懐へ手を差入れさぐりみて 小「コリヤ是癪に取りつめしか、

、、、コレ娘をここに土瓶が有るであらう、早う爰へ持つて來やれ 小「アイ、ト有合ふ土瓶を持つ

て來る、此内始終床の合方にて又之丞土瓶の水を口より呑み、口うつしにてお浪に呑せ 小「コレ女房心

を礎に持つて女房やアイ、おささやアイ 母さまいなう、

「呼びいけられて心付き、

ト是にてお浪心付き又之丞を見て 涙「此方の人か 小「オ、女房心が付いたか 涙「コレ此方の人、エ、お

まへはなア、

「跡いひさして女房が、恨み歎けば小汐田は、合點行かねど氣をしづめ、

ト思入有つて 小「コレ女房深き様子を知らざれば、何か恨みの有る様子、子細を申せド、どうぢや、

「言はれて泪の顔を上げ、

トお浪思入有つて 涙「エ、胸欲な此方の人、私を苦界へ沈めし跡へ、お前は外に女子を拵へ、私がつて

は邪魔故に、科もない身へ此様な、何で去狀下さんした、ト懐中より以前の去狀を出し 涙「去らる、覺

えはござんせぬ故お前に逢ふた其上で、積る恨が言ひたさに、苦界の中を忍び出て爰やかしことさまよふ

内、途中で悪い駕に乗り源四郎の居る所とも、知らずに連れて行かれしは、名に聞いてさへおそろしい、蛇山の明寺にて、思はぬ難儀に逢ふのみか、何科もない此子迄、責折檻に遭ふたのも、おまへが親子の縁を切り、アノ源四郎に渡せし故、エ、恨めしいおまへはナア、

「有りし次第も跡や先、恨み歎くぞ道理なり、聞いて扱はと思ふにぞ、

小「何といやる、扱は近藤源四郎が、勾引したる娘をば我より自身に受取しと、其方が手元へ連行ししか、夫にて萬事分りしは、最前我家へ彼めが来り、其方と深くも馴染を重ね、二世の約束致したなれど、夫有る身に當惑せしが、昨日我より送つたる去り状が、有る上からは誰憚からぬ二世の語らひ、儲に妻に貰ひしと、悪口なして歸りしは、合點行かすと思ふうち、娘が凶變途中にて、勾引したる浪人こそ、正敷彼奴と心はせけど、鳥目の病に是非なくも、跡追懸けて行く事ならず、無念にむねんを重ぬる内、計らず其方が是へ参り、あの方分りし今宵の様子、さは去ながらコリヤ女房、いかに勤の習ひ連、人も有らうに不義放埒もの、名を取りし、あの源四郎に身を任せ、身共が方よりひそやかに送りし去り状迄を源四郎に、手渡しなすとは其方に似げ無い所存ぢやナア、

「流石夫婦の愛惜心、武夫ながら理を責めて妻を恨みの一言を、聞いておなみは猶悔しく、

「エ、穢らはいいどうしてマア、彼の源四郎に去り状を、私が何で見せませう、其去り状を見られしは、苦界を抜けて夜明方、八ツ山下にて駕に乗る、其折落せし私が守り、あの源四郎に拾はれし故、けふの難儀となつたれど、さう言はしやんすお前こそ、子迄なしたる夫婦中、何科もない私をば、何で去る氣でござんすか、夫が開きたうござんすわいなア、

「問詰められて小沙田が、今は包むに詮術なく、

小「サ、其根みは尤なれど、其方に去り状遣はせしは、跡の難儀を懸けまいため、ム、さうして夫はどう言譯で、小「サ深くも包む大望故、子迄なしたる中なれど、女子に肌はゆるさずと、是迄其方に言はざりしが、今こそあかす我大望、一ト通り聞いてくりやれ、ト床の相方になり、兼て其方も知る如く、御主人鹽治高貞公御切腹の其日より、おのれ怨敵高野師直、討つて本意を達せし上、主君の仇を報せんと、日夜心をくだきしも、最早今宵が高野の家敷へ、討入る時節到来故、心はいさめど、情なや、かく泰平に徒黨

を結び、執事の館へ亂入なせば、我々共は御法破り、夫につながる其方や、我子に難儀を懸けまじと、夫故にこそ離別の状、認め送りし我心中、長の病氣のかんがくも、手に手を盡しくれたる上、薬の代の其爲に、苦界へ沈みし其方に、何で愛想が盡きやうぞ、爰の道理を汲分けて、今より主人へ立歸り、勤大事に奉公なし、我無き後は一遍の、回向をしてくれるのが何より増る此身の菩提、必らずく愛想がつき、切なる心の其方を、離別致せし譯ならねば、疑念をはらせコリヤ女房、忠義故ちやと斷念めくれよ、

「事を分けたる身の詫も、始めてあかす夫が本心、聞くに嬉敷女房も、覺期極めてかたへなる、差添取つて我子の咽管、ぐさとつらぬく氣丈の刃、苦む聲に仰天し、

ト此内又之丞思入よろしく、お浪是を聞く思入有つて、かたへに有合ふ又之丞の差添を取つて娘を刺殺す、おしほわつと苦む故又之丞悔りなし、小「オ、苦悶の聲は正しく娘、扱は鳥目の良薬に用うる事を知つたる故か、小「サア心を鬼に此子をば、差殺したも我夫の、跡へ心が残らぬやう、小「なんと、先へ殺して私とともに、

「言ふよりはやく女房が、自殺の體に又悔り、

トお浪件の差をへを、咽へつき立て苦しむ故、又之丞悔りなし 小「ヤ、扱は大事をあかせし故、其方迄自殺させたるか、エ、早まつた事故したナア、

「悔む夫が介抱に手負は苦しき息をつき、

浪「イエー、私が死ぬるのは大事を聞いたるばかりでなく、不忠不義なる源四郎に手ごめに遭て無念にも

小「身をけがされしか、浪「アイ恥かしい目にあひましたわいなア 小「ヤ、ト是より篠人の相方になり

浪「勤めはすれど夫へ操、人に肌身は穢されじと、夜毎に替る枕にも、錠をおろして帯紐解かず、座敷ば

かりの勤故、なじんで通ふ客もなく、裏や初會でたて通す、其下紐をとかさうと、附きつまとひつ源四郎

が、夜毎々々に通へ共、同じ鹽治の御家來でも、人でなしの源四郎に、なんで枕をかさはさうと、振とほし

たも二年ごし、

「張も意氣地も情なや、わるい初やにたまされて、人家も稀な荒れ寺へ、連れて行かれて憂き難儀、

浪「身を汚されし口惜しさ、死ぬる此身は覺期なれど、可愛や此子は幾世の苦勞、里に預けし親にさへ別れ

て内へ戻りしと、これが叫しに聞くからは、よく、微運な生れ故、跡へ残して行く時は、よみちの障りで

ござんす故、心を鬼に殺せ共、思へば不憚でござんすわいなア、

「可愛のものと思愛の、妻がなげきに小汐田も、道理々々にめめからまれ、見えぬ目ながらはらくと、

落る泪に雪とけて、川に水増す如くなり、かくては果じと又之丞、氣を取直し泪を拂ひ、

ト又之丞お浪よろしく愛ひの思入有つて又之丞氣をかへ 小「ホ、ウ其歎は尤ながら、娘が最期は犬死

ならず、今宵と定まる討入も、途方に暮れし我眼病、其良薬に用うるには、酉の年月日時揃ひし七歳未満の、女子の生血服する時は、全快なすと雲齋老が教へと聞けば、未息有る内こそ幸ひ、血汐を服してためしめん 浪「さう言ふ事なら少しも早う、

「有合ふ器へ我子の血汐、妻が絞りに差出せば、押頂いて服するにぞ、不思議や五臟惱亂なし、めんけんなしてどうと伏す、折に同ふ判人勘六、門口より我鳴り込み、

ト此内お浪手負ながらはひよつて、有合ふ筒茶わんへ娘の死骸の血汐を絞り、又之丞に差出す、又之丞さぐり取つておし頂き、一口口に呑み是にて風の音にて又之丞悶絶する、爰へ下手より藤あきの勘六出て

門口に伺ひ居て、此時内へはいり 勘「ヤア大事な玉を内へ引込み、疵ものにした又之丞、代官所へそびいて行き、身の代金のしらちを付ける、さりとらうしやアがれ、

「小腕取つて引立つる、其手をとつてづでんだう、我に返りし又之丞、すつくと立つたる其有さま、

ト勘六又之丞を引立つる又之丞心付き、一寸立まはつて勘六を投退け、きつとなるお浪此體を見て 浪「ヤ

アお前はお目が見えまするか 浪「誠に月の晴れたる如く、兩眼共に明らかなるは 浪「是と言ふのも娘故

小「歎きの中よろこびも 浪「母に増りし我子の手から 小「持可物は 兩人 我子ちやナア、

「夫婦が中に我子の死骸、抱き上げたる悲歎の泪、哀れ催はず計りなり、又も降り出す白雪に、小汐田心

勇み立ち、

小「娘がかげにて良薬調ひ、眼病平愈なすからは、是より徒黨の義士諸共、主君の仇を報する手つがひ、

イデ會合の支度をなさん 浪「夫にて私も心を残さず、嬉しう成佛致しまする 小「オ、此世の縁は薄く

共、未求はかならず夫婦の印、

「去狀取つて寸々に引さき捨つる後より、

ト又之丞落ち有り有る件の去狀を取つて引さき捨つる、勘六は心付きうしろに伺ひ居て「扱こそく人の噂に迷ひ無く、鹽治浪士の敵討、訴人をするから待つて居ろ、

「駈行く所を引戻し、

ト勘六門口の方へ行懸るを、又之丞引戻してぐつと引付る、此時お浪は苦悶の思入にて、「もはや此身はあの世の門出 小「我は是より此世の門出 勘「其血祭りは眞平御免だ、トふりほどいて逆懸るを、又之丞一寸立廻つて、一ト刀あびせる、勘六立身に苦しむ、此時雪おろしはげしく、お浪だんまつまの思入又之丞此體を見て 小「泡と消行く、ト勘六を見事に切倒すを木の頭 小「しら雪ぢやナア、ト刀ののりを拭ふ、お浪よろしく落入る、此仕組雪おろし迷子の鳴物にてよろしく、ひやうし暮、ト雪おろしにてツナギ直に引返す。

七幕目

戌夜五ツ時

淡土太真殿の場

高邸内藩宅の場

本舞臺三間の間高足の唐家體、向ふ金襴巻の柱、眞中好みの瓦燈口、左右粉色畫の金張り付、軒に化粧殿とするせし結構なる額を懸け、上下に無盡燈を照し、此内錦の純張を巻おろし、上の方石疊の築地塀、此内に芭蕉、紅葉、櫻、海棠などの植込み、日覆より櫻の釣枝、下の方同じく築地塀の上眺らへの

段幕を張り、舞臺前岩組の張物に、紅白牡丹の盛り、都て楊貴妃化粧殿の體眺へ有つてよろしく、唐樂にて幕明く、ト直に橋懸りより髭唐人下官の拵へにて、火の廻りとしるせし弓張挑燈を掲げ出で来る、上手より髭なし下官拍子木を持ち打ちながら出で、双方宜敷行合ひ、

「火の廻りばア 下「イヤ御苦勞々々、腦瓶頭には日本風の提燈でござるの 髭「見やれ器用に出来て居るではござらぬか、しかし平長芋にはまだ當所の風土を辨へぬが、無提燈であるくと八釜敷ぞや 下「其事も聞いて居るが、此庭は晝より夜の方があかるいではござらぬか、然し又何で玄宗皇帝様が無提燈では悪いの、何のと日本風を初めさした事であらう 髭「されば聞きやれ、お手懸が三千人美しい揃ひが有つても、又斯うでもねへと探した所が、貴妃と言ふ美人が楊家の深窓に育てられて 下「ナニ羊羹としんこで育てられたア、餅屋の娘か 髭「ハテ楊家と言ふ大身の秘藏娘故荒い風にも當てず、大切に育てた器量よし、其噂が親玉の耳へは入つた故、直に入内を仰付けられて、一膳喰つた所がうまいは 下「羊羹と新粉だから 髭「ませつかへさすと聞きやれ、三千人の中で楊貴妃殿ばかりを寵愛さつしやる 下「待つてくれ三千人の上に一人殖えたから三千人だな 髭「ところで親玉がうつゝを抜かして肝腎の政事とやらは其方退け、晝夜ひつき通しでまつり事をわたしてござる故、彼奴が言ふ目が出る、、、、見やれ櫻海棠の咲いてゐる中に、紅葉山茶花が見たいと言へば、四百餘州を駆けあるかせ、四季咲の花を取寄せて楊貴妃殿の機嫌をとるに、まだまだ榮耀がし足りなくつて、貴妃殿が日本の事が信仰故、何もかも日本の風をやられるとの事 下「ハ、ア夫で分つた、藝なし猿のこちとらの様なものを、大勢抱へ込ましつたは、おれは又見世物にでも出すか、生膽でも取られるのかと思つた、そしてお主が持つて居る書物も、日本風に巻いて有るがそりやな

んだ 罷「聞きやれ、言繼でも行届かぬと、王城の地は元より、四百餘州へ日本風を學べと、此通り觸書にして廻さつしやるのだ、ト懐中より觸書を出して渡す、下官取つて」下「ドレ、成程コリヤみんな日本の字だ 罷「おらア此節横文字を習つて居るが、日本字は一ツばも讀めぬへから、よんで聞かせて下せへ」下「成程をかきな書きやうだ、ト觸書を取り、拍子木を持ちかへる 罷「東西々々」下「淨瑠璃名代、トよろしく太夫連名役人觸れ有る 罷「いよ、此所日本淨瑠璃始まり、其爲口上ばア、ト木を打つ、是をきつかけに鳴物打ちあげ、下手の幕を切つて落す、兩人はついと上手へ這入る、築地塀の上に清元連中居並び直に前陣になり、

「漢宮萬里の春の花、長生驪山の紅葉時、一ト目に詠める全景は、遠つ昔の阿房宮、思ひくらべて思ひの竹の、しらべ床しき想夫戀、

トラツバを吹込み、跡三味線入り詠への唐樂に成り、フランケンを懸けし床几を直し、上手に玄宗皇帝唐冠裝束形、下手に楊貴妃の拵へ何れも畫面の形、鏝り付の笛を連吹にして居る、上手に女の童軍配團扇の長柄を持ち、下手に同じく女の童香爐を臺にのせ、何れも舞臺眞中へせりあげる、是を一時に純帳じり、卷きあげる、

琴唄か、リ「花の春の金玉は花風樂に、柳花苑の鶯はおなじ曲の囀り、月の前の調べは夜寒を告ぐる、秋風雲井に渡る雁金の、琴柱に落つる聲々、ト宜敷有つてほぐれる風の音、なまめいたる相方になり、上下の牡丹に金銀のつがひの蝶、さし金にて舞ふ事、楊貴妃是に目を付る、

クドキ「あれ虫さへもつがひはなれぬ露の蝶、ぬれく染し其夜半は、月の夜遊にかぎり無く、玉を欺く宮人の、中にしよんぼり恥しい、お側へ召され袖の内、後にとばかり打付に、思ひます穂の糸薄、つれなの君と一ト筋に、恨みかこつぞやるせなく、ト此時女の童兩人こなし有つて前へ出て、

「ひぞり給ふを女の童、心を汲んで浮れ立つ、浮立つや春は霞に梅の花、八重に一ト重に櫻の梢、句ひふくみて皆咲きそろふ、枝を折りたやこがれてほしや、秋は南陀羅朱蓮の花に、狂ひ亂る、錦絲鳥、ひらひら、女夫陸みてしほらしや、

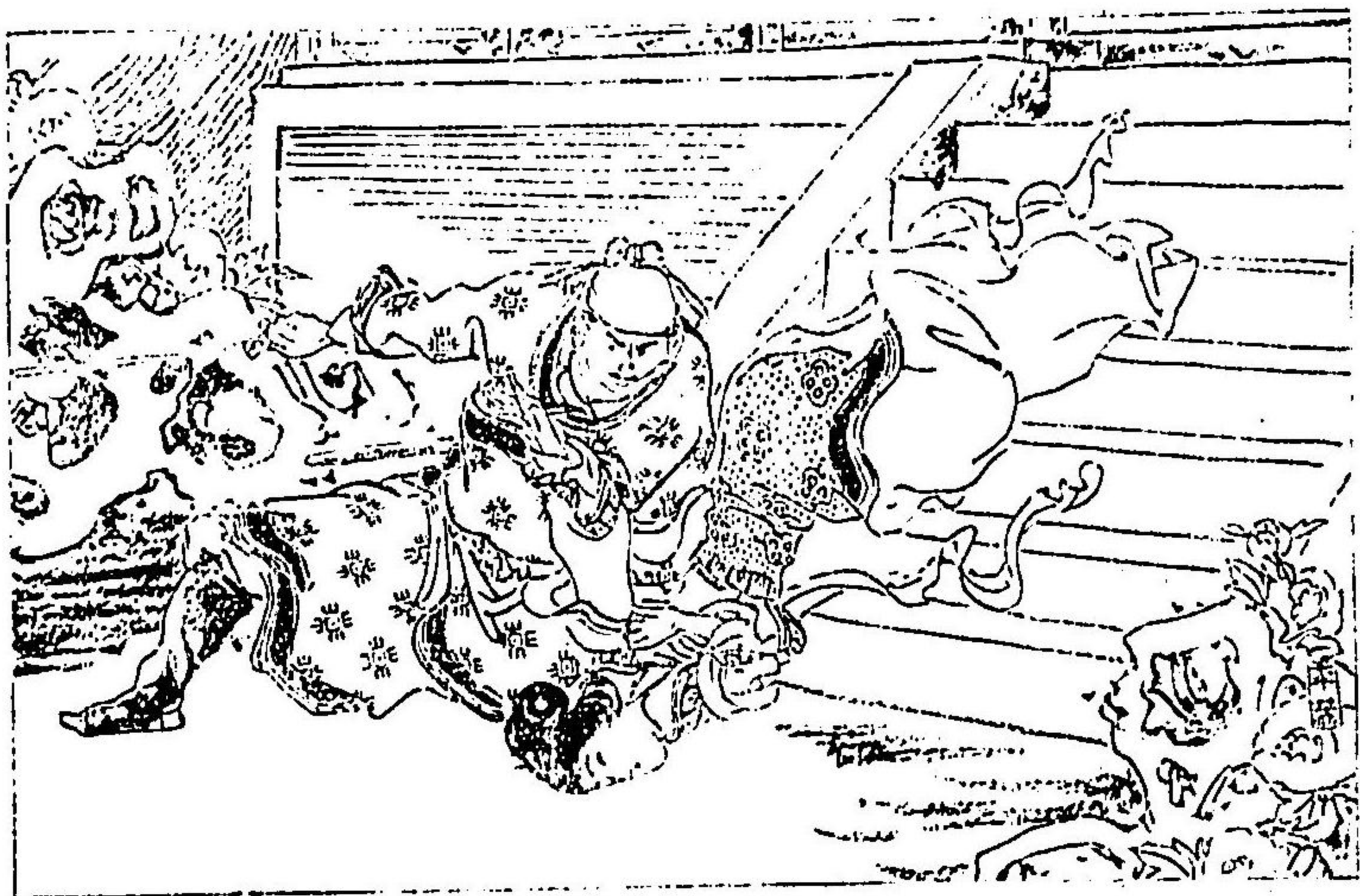
ト兩人よろしく有つて納る、玄宗皇帝前へ出て、

「そも初秋の七日の夜、牽牛織女に誓ひを立て、言ひかはしたる言の葉は「夫を忘る、事かいな、嬉しと思ふ明暮に、二星を念じ願はくば、天にあらば比翼鳥、地にまたあらば連理木、其かね言を我も又、忘れねばこそ打解けて、四百餘州も一ト所へ、夜晝となきいとしさに、ひつたり抱き月の梅、はなれがた無く見えにけり、心解ければ打連れて、はや殿へ成の刻、とたはれ給へばおもはゆく、はかなき女の身だ

しなみ、化粧直して跡よりと、袖をかざせばほ、笑みて、帳深く入り給ふ、

ト玄宗こなし有つて、二重へあがりふり返り、顔見合せて奥へは入る、此時童の兩人鏡臺櫛笄を取揃へ、能所へ直す事、

「櫛笄鏡臺取揃へ、はこぶ童をお傍へと、差鬮に兩人は打連れて、君の御跡を慕ひ行く、ト此内童の兩人よろしくこなし有つて奥へは入る、楊貴妃は跡を見送り鏡に向ひ顔を直す事、



「嬉しさを昔は袖に筒井筒、うつす鏡にこはいかに、
 ト橋懸りばたくに成り、哥舒官割鬚亂髪劔を抜持ち伺ひ
 出る、貴妃此姿の鏡へうつり見えるこなしよろしく、驚く
 思ひ入有つて、
 「君の御前を遊ぎけし哥舒官、つるぎ隠し持ち、只一ト突と引
 すゆる、はらひのくれど強氣の早業、後は庭にまろび落ち、
 ト一寸立廻り有つて、
 楊「ヤツ哥舒官どのには何故に
 哥「オ
 オ我君後の色香に迷ひ、朝政次第に怠り給へば、四海の大
 事、命は貰つた
 楊「そりや情ない、アレエ
 哥「ヤア聲たてな、
 「又引すゆるを拂ひのけ、階登れば追詰めて、鬚引付け
 十分に、さしも浮世の夢の蝶、さめて跡なく、
 ト大ドロ／＼キホイ三重に成り、哥舒官楊貴妃をした、か
 につらぬく、此時三方の純帳を巻おろし、淨瑠璃臺をあほ
 り返し、廊下の書割の張物に成り、二重奥へ引込み、上手よ
 り二間常足を引出し、此上手壹間杉戸出遣入有り、右の鴨物
 にて道具納る、ト相方になり橋懸りよりお霜、家中腰元の形
 にて八寸の膳部を持ち、お君同じく腰元形にて臺附の飯櫃を

持ち出れり、

「旦那さまは御殿からいつもお下り遊ばすと、直に御夕飯を召上りますゆゑ御伺ひ申しましたら、し
 ばらく待てとおつしやりましたが、最早五ツ餘程過ぎ
 して見ませう
 「夫がようござりまする、ト兩人膳部を下へ置き、障子家體の傍へ来て内へ思入有つて
 起し申上げませう
 兩人「旦那さま、ト是にて障子を引抜き、向ふ三尺の床の間、刀掛に兩腰をか
 け、上手に居纏裏鏝子をかけ、ひしやくこぼし杯茶道具よろしく並べ、下手腰張の茶壁能き所短檠をてら
 し、爰に小林平八着流し好みの拵へにて謠の本箱により添ひ、謠本を顔に當眼り居る見え、うしろ差が
 ねの蝶を遣ひ、薄ドロ／＼にて夢におそはれし心にて、ツカ／＼と本を持た儘舞臺へおりる、お霜手早く
 拵を取つて真中へしく
 平八「扱は今のは、ト思入
 兩人「遊ばしましたか
 平「ム、ト思
 入「思懸なき唐土の、玄宗貴妃をありくと
 きみ「そりや唐土の
 兩人「お夢をば
 平「ム、イヤ／＼楊
 貴妃の謠の文作、感吟なしてツイとろ／＼、ム、是も心氣の勞れであつたか
 しも「御夕飯を召上りませぬ
 か、常より餘程
 きみ「遅うなりましてござりまする
 平「ア、左様か、然し夕刻より腹痛にて、少々氣分が
 悪い故、後に致さう次へもて
 兩人「エ、サ持てと申すに、トきつと言ふ
 兩人「へい、ト合方生殺しに
 て、兩人膳部を持ち奥へ遣入る、跡やはり相方、平八思入有つて
 平「鹽治恩顧の浪士共が、復讐のきざし
 有る故、御本家にて御案じ有つて、則ち麻布の御下屋敷に要害堅固の御座所が出来、御わたまし有る可き
 所御寵愛のお蘭どのが、兎に角主君を引留め、此程より二度三度、御わたましの延引せしも、正敷かれが

計らひなり、醫師宗庵が周旋なれど、其身元も分明ならず、もしや鹽治浪人の因縁の者にて問者となり、時日を延ばすは徒黨の人数、着到なすを待つ爲なるか、用心あしき此所、君の長居は御身の大事、夫故某さへぎつて、御諫言申せしかど、彼が色香に迷はせられ、更に採用無き故に、其根をたつて葉を枯さんと、臍をかためし思ひ寐に、おらんどのに生寫しなる、色に迷はす楊貴妃を、馬嵬にあらぬ庭先に、我哥舒官の姿となり、一刀をもつてつらぬきしは、只一睡の夢で有つたか、ハテ残念な事ぢやナア、ト平八よろしく思入、橋懸りよりおきみ出で、
 平「ハッ申上げます、清水大學様がお出でござりまする」
 大學「ハッ、煎茶の仕度いたせ、
 平「畏まりました、トおきみ大學殿がござつたとか、是へお通し申せ、
 平「煎茶の仕度いたせ、
 平「畏まりました、トおきみ下手へはいる、平八思入有つて、
 平「御わたましに付、昨夜某御本家より、亥の刻過に歸りし所、往來まれの窓下に、四五人の武士屯なすは、合點行かすと思ひし故、門番所の小窓より灯りを遠ざけ透見なせしに、や、門前にイみて、屋敷の内を伺ふは、正しく鹽治の浪士共、油断ならざる時節故、御わたましをす、むれど、お蘭殿の止めによつて、御定日も十九日に延引なせしが、其内に御家に變がなければよいが、血氣にはやる若者は、高の知れたる浪人共と、侮り居れどさにあらず、山鹿流の兵學に名高き大星由良之助、いかなる計策あらんも知れず、油断ならざる事ぢやナア、ト平八じつと思入、此内下手より清水大學袴登本さし、刀を掲げ出で來り、下手に伺ひ、
 大學「イヤ其御心配は御無用にごさる、
 平「ヤ誰かと思へば清水氏、ト桐を取りにかゝるを、
 大學「アイヤ雪中お寒うござる其まゝ、
 平「しからば御免下され、ト相方きつぱりとなる、大學下手へ住ひ、刀を後へおく、
 平「早速ながら只今心配致すなど、そこ元が仰せられしは、
 大學「貴殿が兼々御案事成さる、彼大星由良之助は、臆病未練の侍故御心配をお留め申した、
 平「何に由

良之助が臆病とは、
 大學「兼て後室藥泉院に問者に入置く、當家の足輕半左衛門が娘お梅、かれが知らせし密事の一通、是を篤と御覽成されい、ト懷中よりお梅より受取し密書を出し渡す、
 平「拜見致すでござる、ト平八密書を覗き見る、
 大學「なんと大星由良之助は臆病者ではござらぬか、
 平「ムウ、ト讀終りて大學にかへし、
 平「武邊に懸けては大身の家老に恥ぬ由良之助、大小捨て町人になると申すは心得ず、正しく是は計略ならん、
 大學「夫は貴殿の力負け、さやうな了簡無き事は今日拙者見届け申した、
 平「スリヤ何方にて、
 大學「藥泉院の屋敷外にて、思ひがけ無く出ツくはし、是幸ひと口論仕懸け、かれが心底見出さうと、種々悪口なしたれど、犬突ばひに手を突て、ゆるしてくれと詫る故、土足に懸けて踏にじり、其上喉をはきかけたが、手出し致さぬ臆病者、なか／＼もつて敵杯を討可き所存はござらぬから、決して恐る、事はござらぬ、夫故貴殿の御心配、御無用なりとお止め申した、
 平「スリヤ其許に土足に懸けられ、其上喉を懸けられても、手出し致さぬ大星が心の底は計られず、猶々もつて油断ならぬ、
 大學「夫が貴殿の力負け、浮浪人でも大小をたばさむ者が土足に懸けられ、手出しをせぬは命がをしき、臆病者の大星を、何故恐れ召さる、のだ、
 平「されば某恐る、のは、諸藝に達せし由良之助、既に山鹿流の兵學は、當時天下に双ぶ者無し、弓馬鎗劍武の道は、何れも極意を極めし大星、土足に懸けられたへ忍ぶは、正敷心に大望有る故、夫ちやによつて枕を高くは寐られませぬ、
 大學「去りとは貴殿も臆病な、何をかれが致さうぞ、よし又主人の敵など、徒黨なして參らう共、喰ふや喰はずの鹽治浪人、何程の事ならん、近頃以て廣言ながら、神影流の一流を極めし拙者が此腕で、皆殺しにして呉れん、必らず共におあんじ無く、枕を高くお休み成されい、ト大學腕をまくり見せる、平八思入有つて、
 平「夫は千萬忝い、貴殿がお禦下さらば、夫を頼みに某は、枕を高く臥せる

でござる、ト此時下手より以前のおきみ、茶盆へ汲子茶碗茶蓋ふた附の湯呑をのせ持出で来り、下手へ控へ茶碗へ茶を注ぎ、茶蓋へのせ大學の前へ持行き「お茶を召あがりまし、ト出す大學取つて「是は〜」

忝い能い煎でござるわい、ト此内おきみふた附の湯呑を平八の前へ出す、大學茶の蓋をかきながらぐつと

のんで「アツ、引、トあつき思入にて、茶碗をほうり出す「お召へか、りはいたしませぬか、ト手拭で盥を拭ふ、大學はやけどをせし思入、平八は湯呑を手に取りあげ「火傷をなされは致さぬか、トイヤさしての事もござらぬて、ト指を吹てゐる、平八茶を一口口呑で「湯茶は必らず熱きもの「ヤ「其御油断では、ト湯呑の蓋をしやんとするを木の頭「平八「感心いたした、ト平八せ、ら笑ふ、大學いまくしき思入、謠の稽古張扇の音にてよろしく拍子幕。

八幕目

亥夜四ツ時
割下水小橋の場
東兩國桶屋の場

本舞臺三間の間上下高足の二重、石垣の蹴込み、真中に眺への土橋、後南割下水を畫心に見たる雪の夜の遠見、左右敷燈、舞臺前上下屋敷の練堀にて見切り、平舞臺一面に浪布を敷き、二重より花道の下り際、開帳場の上り口、舞臺花道とも一面雪布を敷き、日覆より雪枝の松の釣枝、都て本所南割下水雪降り夜の模様よろしく、爰に前幕の近藤源四郎、着流し尻端折り、大小にて安下駄を穿き、番傘をさし立懸り居る、駕かきはげ熊、同ねこ虎の駕かき草鞋尻端折りにて、矢張り番傘を相合傘にてさし立懸り居る、此見得雪おろし狸ばやしにて幕明く。

はげ熊「モシ旦那へ、此まお雪の降りますのに、只せへ寂しい本所のあの蛇山の明寺から「女の餓鬼まで一所に連れ出し、モウ彼れ是れ四ツだといふに、何處へまア逃げましたらう「源四郎「一杯機嫌でぐつすと、俺が寐たのを幸ひに、彼女が逃げた其先は、晝間仕懸けた北番場の、亭主の内と勘付いちやア居るが、若しも夜道の事だから、其邊にうろついちやア居ねへか、手分けをして探して呉れ「そりやア承知で御座りますが、未だ忝代にも有付かねへ内、お前さんに逃げられちやア、俺どもの立つ目がねへ「虎「さう共く、手分けをして探して上げますから、お約束の忝代を、爰でお貰ひ申したいものだ「籠棒奴、俺も近藤源四郎だ、手前達に無駄骨を折らせて、逃げ隠れをする様な、其様卑怯な事はしねへ、錢や金にびり付かねへで、女の在處を探して呉れ「夫りやア左様でも御座りませうが、此寒いのに酒なしちやア、雪の中は凌げません「最初からお約束だ、其様事をいはねへで、一杯づつ呑ませてお呉んなせへ「未だ愚圖愚圖いつて居るか、イヤいめへましい奴だ、ト懐より金を二歩出し「サア是れで呑むがい、熊「夫りやア有難う御座ります、ト手に取り見て「熊「モシ、こりやア唯た二分で御座りますね「左様よ、一人前に一歩づつ、あつたら、一杯づつ、呑めるだらう「熊「モシ、これちやア約束が違ひませう、纏めた酒手を遣るといつて「虎「只つた二分でお拂ひ箱とは、餘り酷い相場違へだ「源「ハテ、女せへ逃げなけりやア、何様にでも酒手を出すが、玉を逃して仕舞つちやア、二分遣るのも忝い位えだ「熊「それちやア彼の娘の在家が知れたら、纏めた酒手をお呉んなせへ「源「夫りやア俺の胸にあるから、骨を折つて搜して呉れ「左様いふ事なら少しも早く、お浪さんを連れて来て「熊「褒美の金に有附きてへ「熊兩人「サア出懸けやうちやアねへか、ト右の鳴物にて兩人は連立つて上手へは入る、源四郎思ひ入あつて「源「兎角する内四ツでもあらうか、夜の更けね

へ内又之丞が浪宅へ押懸けて、一ト談判やらかさうか、ト舞臺を下りて花道へかゝる、此時上手の敷置を押し分け、前幕の又之丞着込み大小切緒の草鞋、上へ紙合羽を羽織、塗笠を持ち出で、又之丞「アイヤ源四郎どの、拙者が宅までお出に及ばぬ、又之丞は是に居る、ト前に出る、源四郎振り返り見て、源「オ、又之丞どの其處に御座つたか、夫りやア恰度幸だ、ドレ其處へ行つて談じやうか、ト是にて源四郎舞臺へ歸り、入替つて上手になる、又「シテ拙者方へ何故に御入來成さる、御所存だな、源「外でも御座らぬ、今晚より身共が女房に致したる、お浪の在處が知れぬゆゑ、夫れでわざ／＼此方の宅へ、又「いかにも浪は我家へ來り、汝に手込めに遇うたるを、深くも耻らひ無念に思ひ、自殺致して相果てたるわ、源「そんならお浪は、ム、ト思入れ、又「左すれば汝は妻の仇、爰で逢ふたは優曇華の花、手の向けに佛の道引、近れぬ處と觀念なせ、トきつとなる、源四郎思入れあつて、源「是々又之丞、血迷つて何をいふのだ、愛想の盡きた女房ゆゑ、去り狀書いて去つたといふから、去つたものなら貰はうと、最前あれ程議定をして、俺が女房にしたお浪、兎や角言はれる覺いはねへわい、又「其去り狀も女房より、再び我手に戻つたれば、汝が手にはあるまいがな、ト是にて源四郎懐をさぐり見て、源「夫んなら先刻お浪めが、去狀迄を持つて失せたか、ト思入れ、又「かくなる上は源四郎、最早連れぬ妻の仇、覺悟極めて勝負を致せ、トきつとなる、是れより逃への合方になり、源「イヤ、洒落くせへ覺悟呼はり、同じ赤穂の藩中だが、意氣地の無さに貧に迫り、喰ふや喰はずの瘦浪人、その日の煙も細腕で、此源四郎が討てるものか、國を出てから配分の金で、榮耀をした果が、一家親類強談で、借込む金で遊里へ通ひ、仕度三昧して來た替り、膽も太りやア骨も太り、己等が其身の鎧刀で、斬れるものなら切つて見ろ、又「放埒情弱に身を持崩し、よしや筋骨太るとも、金銀なら

ぬ汝が五體、忠義を磨く又之丞が、刀の切味見せて呉れん、爰は處も割下水、心濁りし近藤が、底の見えすく悪巧み、今さし汐に小汐田が、清き流れに生茂る、よしあし別けて妻の仇、やはか討いで置くべきぞ、源「何を小癩な、ト是より雪おろし劇しく、源四郎は番傘、又之丞は紙合羽を勿ね除け、刀を抜き、兩人一寸立廻つて左右に別れ、きつと見得、是より狸囃子、碇入りの合方になり、兩人土橋を遣ひ、面白き立廻り十分あつて、源四郎番傘を打落され、刀を抜いて立廻り、ド、手負になり、よろしく立廻つて脇腹へ突込まれて、源四郎立身にて苦しむ、又之丞、源四郎の脇腹を抉りながらキツとなつて、又「妻の仇たる源四郎、今こそ思ひ知つたるか、ト足をかけて止をさす、ばた／＼になり、上手より前幕の彌五郎、着込み大小、切緒の草鞋、上へ紙合羽を着し、塗笠を冠り、手丸の提灯を持ち出來り、思はず又之丞に行當り、恠りしてキツとなつて、彌五郎「ヤア見れば人をばあやめし奴、此界限を徘徊なす、正しく汝は物取ならん、イデー刀に斬下げくれん、ト刀の柄へ手を懸けるを、又之丞キツと留めて、又「盜賊とのお目遣ひは御尤には御座れども、全く以て左にあらず、何をか包まん某は、ト言ひながら、彌五郎と顔見合せ、又「ヤ、貴殿は千崎彌五郎どの、彌「左様いふ貴殿は小汐田氏、又「思ひ懸けない、兩人「是はシタリ、ト兩人思入れあつて、彌五郎、又之丞の様子を見て、彌「扱は先刻其許には、御眼病の御様子なりしが、早や御本服召されしよな、又「お聞き下され某も、病後の惱み鳥目にて、實は今宵の討入も、殆ど當惑致せし處、一人の娘が年度の産れに、我が眼病の藥となり、忽ち癒る此兩眼、彌「それは何より大慶至極、先刻拙者其許を、お誘ひ申しに立寄りしが、御眼病の御様子ゆる、會合いたすかの方まで、御歩行迎も御難儀ならんと、お迎ひに参りし所、計らす是にてお出合申し、此上もなきよき手つがひ、又「何時に變らぬ貴殿の

御厚志、千萬忝う存じます。一シテ其許には何故に、是なるものを殺められしぞ。又此奴は不義士の列に入りし、人非人の源四郎、某妻が此奴めに、辱めを受けたるとて、自殺致して相果てたれば、妻の仇たる源四郎、討取つたるは妻への手向。一スリヤ、其許の御家内には、敢なき御最期召されしとな、其に付けても心地よき、源四郎めが此有様、シテ此奴めが死骸はな。又人目にかゝらぬ其内に、是なる流れへ水葬禮一適れ御明智片時も早く。又いふにや及ぶ、先この通り、ト源四郎の死骸を土橋より蹴落す、是にて水の音、水烟、ばつと立つ、又之丞以前脱ぎ捨てたる紙合羽を手に取上げ、水中をキツと見て。又ア、悪の報いはたちまちに、ト此時本釣鐘の四ツを打込む、彌五郎思入あつて。一めぐる時刻も丁度四ツ。一然らば直様、ト紙合羽を引かけるを道具替りの知らせ。又御同伴致さう、ト此模様本釣鐘、水の音にて道具廻る。本舞臺三間の間、少し跡へ下げて中足の二重かまちの蹴込、雪の積りし瓦葺の庇、上手前へ張出して、一間の格子窓、腰通り板羽目、下手同じく格子窓、是へうどん、そば切りといふ行燈をかけ、此下手雪の積りし黒塀正而紺地へ白く、楠屋と染抜きたる暖簾口、此上手まいら戸の中仕切りのある戸棚、下の方板羽目、上手能き所に帳場格子などよろしく、二重の前へ幅の廣き床几二脚ほど並べ、舞臺花道とも一面に雪布を敷き、都て向ふ兩國楠屋の見世掛りよろしく、帳場格子の内に楠屋十兵衛そばの亭主、羽織着流し紺の前垂をぬき、帳合をして居る、此見得雪おろし、四ツの拍子木にて道具留る。十兵衛「今打つたのはモウ四ツだが、三次も五助も何をして居るか、今にお客人が大勢あるのに、早く歸つてくれりやアい、が、トばた〜になり、向ふより五助印半纏、股引、尻端折り、そばや擔ぎにて下駄を手に持ち、跣徒にて走り來り、直に舞臺へ來り。五助「モシ親方、大變に早く用心なさい〜。十「手前は五

助、用心しろとは。五「今割下水を通りますと、侍と侍がちよん〜切合つて居りました。十「其奴ア飛んだ咄だが物取りか、意趣斬りか。五「何だか様子は分りませんが、一人の侍が手疵を負つて、危ツかしい様子で御座りましたが、モウ今頃はやられましたらう、モシ親方、早く見世をおしまひ成さい。十「馬鹿をいへ、割下水であつた事を何を其様に騒ぐにやア及ばねへ、さうして貴様は何の用で、割下水の方まで行つたのだ。五「イヤモウ悪い事は出来ないもので、こり場の馴染が雪の降るので、吉田町に引込んで居るから、横綱まで行つた序に、顔を見せにいつた處、今の一件に出合ひましたが、人を殺した侍が、ヒヨツと此方へ來た時は懸り合ひで御座ります、モウ四ツを打ちましたから、早く見世をお仕舞ひ成さい。十「そりやア平常ならば雪も降るし、今方四ツも鳴つたから、見世をぬめて寐て仕舞ふが、此間からのお約束で、今夜は俳諧の開きの歸りのお客さまが、此見世へ大勢連れで來る積りだ、蕎麥の仕込みもしてあるし、前びろからのお約束だから、四ツを打つても仕舞はれねへ。五「さういふ事なら今の内に、早く來てくれ、ばい、が、今侍が斬られたのを思ひ出してもゾツと仕舞、トがた〜願へて居る。十「イヤ臆病な奴だなア、ト雪おろし合方になり、向ふより大藏文吾、袴、大小下駄にて風呂敷包みを斜に背負ひ、遊蛇の目の傘をさし出で來り、花道にて思入れあつて。文吾「ハテ風情ある景氣かな、つら〜思へば我々が、此年月の艱難も、憂き事積るさかなりしが、埋もれし名も世に出でて、雪にすゝぐの聲あれば、實に會稽のさいささちや、ト思入あつて氣をかへ。文「只今打ちしは四ツ時ゆゑ、大望までは今一時、兼て約定致してあれば、あれなる楠屋の見世へ參り、同志の者を待合はさん、ア、ます〜今宵は積るわへ、ト矢張合方にて舞臺へ來り。文「御亭主お見世で御座るかな、トすつと上手へ來る、五助、文吾を見て。五「ソリヤこそ侍がやつて來

た、トふるくと顔へる故。文「拙者が是へ参りしとて、何を其様に驚くのちや、ト十兵衛前へ出で」
 是はケ様に御座ります、只今使に出しました處、割下水の邊にて何か恐いものを見たて申して、其れでびくく致して居ります。文「イヤ左様で御座るか、こりや若い者、何も恐い事はない、咽喉が乾いてならぬから、湯を一杯吞せてくりやれ」
 五「夫りやこそ咽喉が乾くといへば、矢張り人を」
 文「何と申す」
 五「イヤ、此方の事で御座ります、ト五助暖簾口へは入る、文吾床几へかけ」
 文「イヤナニ御亭主、いまだ連中の人々は、一人も見えませぬかな」
 十「ヘイ、先刻お一人入らつしやいましたか、何方もお見え成されぬゆゑ、又出直して来ると仰つて、お歸りで御座りました」
 文「オ、左様で御座るか、只今四ツを打つたるゆゑ、もう追々に参るで御座らう、差支へのなきやうお頼み申す」
 十「イエモウ、支度は先刻より、ちやんと致して御座りますれば、スワと申せば何人前でも即吟でさし上げます」
 文「イヤ即吟とは面白いな」
 十「即吟と申しますれば、旦那様に折入つてお願ひが御座ります」
 文「何折入つて頼みがあるとは」
 十「ヘイ、外の事でも御座りませぬが、旦那様方も今晚は、俳諧のお戻りだと申す事で御座りますが、私も平常から雑俳の仲間へ加はりまして、少々づゝもはんべりしますが、今度参つたらしの題に、殆ど困つて居りまするが、御風流のお力で、前句附の御即吟をば、一句お願ひ申します」
 文「扱は當家の御亭主には、前句附をなさるゝとか、それはよきお樂で御座る」
 十「イヤモウ、下手の横好とやらで、雑俳仲間の是でも世話人、笠萬、吳風、芋輔、一聲、點者は皆んな心安く、小梅に居りまする笑魯などは友達で御座りまして、見世へちらしを張出しましては、取次を致しますが、跡月の開巻に酷いめに打たれましたから、今度は敵討が致したいと、いろく氣を揉んで居りまする、何うか手柄を致しまするやう、一句お願ひ申します」
 文「何に、敵討が致したいと

な、ト思入れ」
 十「ヘイ、何うか耻辱が雪ぎたう御座りまする」
 文「シテその題は何といふ題ぢや」
 十「ヘイ、此度の前句の題は、なんのそのと申す題で御座ります」
 文「ム、なんのその、ハテ勇ましい前句ぢやなう、トにつたりと思入れ、爰へ暖簾口より五助盆へ茶碗を乗せ持つて出で」
 五「ヘイ、お湯を持つて参りました、ト氣味悪さうに差出す、文吾茶碗を取りながら、考へる事あつて」
 文「何んのその、ト思はず大ききいふを、五助恟りなし」
 五「そりや始まつた、ト狼狽へて暖簾口へかけ込む、文吾こなしあつて」
 文「御亭主硯をお貸し下され」
 十「ヘイ、畏まりました、トかけ硯を出し」
 十「ア、コレ硯の水が凍つて仕舞ひました」
 文「アイヤ、幸爰に湯が御座る、ト茶碗の湯を硯へ注ぎ、墨をすり懷紙を出して、さらりと認め」
 文「御亭主是はどうぢやな、トさし出す、十兵衛取つて見て」
 十「なんと申すお句で御座りまするな」
 文「なんのその、敵をも通す桑の弓、ト是を聞き、十兵衛小膝をうち」
 十「イヤ面白い附けて御座りまするな、是では屹度敵討の本望が遂げられます」
 文「敵が首尾よく討てやうかな」
 十「討てますとも、討てますとも、大丈夫受合で御座りまする、ト是を聞き文吾悦ばしき思入にて」
 文「ハテ、さいさきよい」
 十「エ、」
 文「イヤサ、幸のよき題ぢやてなう、ト雪おろし合方になり、下手より以前の又之丞、彌五郎出来り、文吾を見て」
 二人「子葉どのお早い事、ト文吾兩人を見て」
 文「是は潮水どの、竹雄どの、先刻よりお出をばお待ち申して居りました、ト是にて兩人床几へかけ」
 又之丞「嗚かし左様と存じましたが、計らざる珍事にて思はぬ遅参、御用捨て下されい」
 彌五郎「シテ子葉どのの御一人にて、未だ連中は相見えませぬかな」
 文「拙者の是へ参らぬ先、先刻一人見えられしやうなが、連中が居らざるゆゑ、出直して参ると申して歸られたと申す事、何は然れ、御亭主には蕎麥を是へ出して下され」
 十「ヘイ、承知致しました、ト奥へ向ひ」
 十「コリヤ五助、お三人前お出し

申せ 五「ハイ、畏りました、ト暖簾口より五助、廣蓋へ蕎麥の蒸籠を乗せ持ちて出で来り、三人の中へ
 恐々ながら出す事よろしく、文吾伴の蕎麥を見て 文「コリヤ打ち立ての様子ぢやな 十「ハイ、只今打ちま
 した計りで御座りまする 彌「小汐田氏にも割下水にて、ト思はずいふを五助聞いて 五「ソリヤこそいよく
 割下水だ、ト驚いて暖簾口へ逃込む、是にて十兵衛も少し氣味悪き思入にて 十「そんなら若しや割下水の
 又「エ、十「イエお代りを持つて参りませう、ト暖簾口へは入る、文吾あたりへ思入あつて 文「御兩所方
 へ密々にて御覽に入れる此一封、何卒御内見下されい、ト懐中より女の文を出して見せる、又之丞取つ
 て彌五郎と兩人にて開き見て 又「こりや是れ女の手跡にて、今宵の首尾を細々と、同志のものへ知らせの
 文面 彌「是れを何うして其許には 文「只今拙者かの方の、物見下を通行なせしに、蘭女どのより内々にて、
 送り越されし其密書 又「誠に是れぞ我々が、時に取つての六韜三略 文「讓る兵書も櫻井に、武名を残す
 楠の 又「文字も暖簾に楠屋とは 彌「ハテ珍しき家名で御座る、ト此時彌五郎、十兵衛が置いて行きし、前
 句附の端書へ目をつけ 彌「是は何やら書いたるものが、ト取つてさし出す 文「それは唯今此家の主人が、前
 句附の題を出し、附けて呉れいと頼みしゆゑ、好める道に取あへず、楠屋の文字を石になぞらへ、一句致し
 た拙者の即吟 又「ドレお見せ下されい、ト又之丞取つて見て 又「上の五文字は前句の題にて、なんのその
 と申す下へ、巖をも通す桑の弓、ト讀む、彌五郎思入あつて 彌「なんのその巖をも通す桑の弓、ト讀む、文
 吾兩人に向ひ 文「御兩所附けは如何で御座るな、ト是にて又之丞思入あつて 又「誠に是れぞ五七五の、
 首尾と、のひし此一句 彌「是れでは今度の敵討も、ト思はず大きくいふ、能き程に暖簾口より以前の十兵
 衛出か、り居て、此時前へ出て 十「ハイ、勝に違は御座りませぬ、ト是れにて又之丞、彌五郎恟りして

兩人「扱は密事を、ト立上るを 文「アイヤ彼が申すは、ト兩人に腰をかけさせるを木の頭 文「餘の儀で御
 座る、ト三人氣味合の思入、火の廻りの割竹の音、合方にてよろしく拍子幕。

九幕目

子夜九ツ時 飯田町借家の場
 おなじ 九段牛ヶ淵の場
 おなじ 高田性自刃の場

本舞臺夕七ツ時の飯田町の世話場、能所二枚折屏風を立て此陰に替巻を懸け小山田庄左衛門寐て居る、
 此見得雪おろし四ツ竹の合方にて幕明く、ト右の合方にてかん酒屋女房お市、隣の内より出で来る、雪
 ちらちらふる。

市「オ、又大層降つて来た、内の人はどうしたかモウ歸つて来さうなものだ、内の人が歸つて来たら一杯や
 ツて寐やうと思つて、暮ると直に床を取り、辻番を入れて待つて居る内、つひとろくと兼て仕舞つたが、何
 も盗られやアしなかつたか、ト門口から内を覗き 市「エ、マア此間前垂無蓋が當つたので、一昨日買った本
 桐の下駄を、唯た一度履いて盗られて仕舞つた、本に油断も隙もなりやアしない、お雪さん、おつかさんは
 まだお歸りでないかへ、ト門口を叩く、是にてお雪起上り 市「まだおつかさんは歸りませぬわいなア 市「モ
 ウ歸つて来なさりさうなものだ 雪「お内のおぢさんはお歸りなさんしたか 市「あの人もまだ歸りませんよ
 雪「大お遅うござんすな 市「又此様むだをいつて、裏からなんぞ盗られやアしないか、ト合方にてお市下手

の門口へは入る、此時小山田庄左衛門目を覺し思入有て 小「オ、いつの間にか日が暮れたな 雪「ハイ暮れましてござりまする 小「熟醉なして寐忘れしが、暮れては直に行ねばならぬ、灯を早く付てくりやれ 雪「ハイ只今つけますわいなア、ト火打箱を探り取り、火を打ち附木へうつし隅に有る角行燈へ灯を付る、此内小山田起上り帯を探り取り、行燈へ灯を付て 兩人顔見合せ、問のわるき思入、詭への合方になり 小「モウ何時だな 雪「サア何時でござりまするか、ツイ私もとろくと御みあしをさすりながら 小「夫では其方も寐たと見えるな 雪「ハイしかもあなたと御一所に 小「エ、トぎつくり思入有つてお雪を見る、お雲恥かしき思入にて袖にて顔を隠す、小山田扱はと思入有つて 小「扱は心氣の勞れにて、思はぬ夢と思ひしが、酒興の上に前後を忘れ 雪「おみあしをさする其手をば、引よせられ嬉しさに 小「夢と思ひし戯れも 雪「賊となりし二世の縁 小「いかななる神が結びしか 雪「どうを見捨て下さりまするな、ト小山田に縋りつく小山田當惑の思入にて 小「是は飛んだ事をした、ト頭を押へてほとと思入、雪おろし合方にて向ふより母親おむつ傘をさし安ちやうちんを提げ出来り 小「思ひの外運うなり、嘸娘が案じて居やう、小山田様がござるなら事無く濟だ入諱を、御はなし申しお禮が言ひたい、ト此せりふを言ながら舞臺へ來り 小「娘今歸つたわいなう、ト是にてお雪飛のき、門口へ來り 雪「オ、母さん御歸りなさんしたか、嘸お寒うござんしたら 小「イヤ、内居る程に歩くは寒いものではない、ト捨せりふにて足をぬぐひ内へは入る、お雪は傘提灯を片付る、此内小山田うつむきある 雪「さうしてあちらは何うでござんした 小「知つての通りの主人故、金はいらぬ娘をかへせと取つてもつかぬ挨拶故、どうしやうかと思つた所へ、丁度折能く町用掛りの地守りさまが御出成され、給金かへさば濟してやれと、御取扱ひ下さつたので、やうくそなたの埒

があき、證文取て歸つたれば、モウ、案じる事はない 雪「夫は有難うござりまする、身儘に成つて内に居れば、是からお前のお世話も出来、又其内には力になる御方が出来まいものでもない、ト一寸小山田へ思入有つて 雪「ごんな嬉しい事はない 小「是と言ふのも小山田さまの御情故、なんとお禮を申さうやら 兩人「エ、有難うござりまする、ト兩人辭儀をなす 小「何の些なあの金子、禮を言ふには及ばぬが、心懸りは今宵の時刻、何時成るかこなたは知らぬか 小「ハテ麴町に居ります内四ツの拍子木を聞きましたから、モウ九ツ近うござりませうか 小「エ、ト小山田惘りなし、最早九ツ近うとか、コリヤ斯うしては居られぬはへ、ト刀を持ち立掛かる、九ツの頭を打ちむ 雪「丁度折能く聞える鐘、もしや四ツではござりませぬか 小「數をかぞへて御覽じませ、ト是迄に拾鐘を打てる 小「オ、今打しはありや拾がね 雪「是から先を、ト九ツの鐘を、お雪一ニツト指を折りかぞへ九ツ打てる 雪「打てる數は 小「南無三九ツ、思はぬ事にて遅刻なせしか、ト刀を差し、赤合羽を取つて門口へ出るをお雪袖にすがり 小「いかななる御用か知らね共、血相かへてコリヤ何處へ 小「マア、お待被下ませ 小「イヤ猶豫ならざる一世の大事 兩人「夫ちやと いうて 小「エ、留だて致すな、ト小山田振拂つて紙合羽を引懸けきつとなつて寺がねにて、一散に向ふへ遣入る 雪「ア、モシ待つて下さりませ、トお雪ツカ、ト行き花道にて轉ぶ、おむつ門口から 小「娘怪我をしはせぬか、トお雪是に構はず向ふへ追つかけては入る、早き相方にて 小「エ、コレあふない待ぬかいの、ト驅出さうとして門口の敷居へ爪付きばつたり倒れ 小「アイタ、、、、ト此時隣から以前のお市出來り 市「コリヤあふない轉びなすつたのか 小「オ、お市さん内の娘が、トおゆきさんがどうしたのか 市「最前ござつた小山田さまと 市「オ、あのお侍と逃げたのか、何のあの子もおいそれな、唯た一度で

逃るとは、むつ「イエー、さうぢやないわいの、ト立ちあがらうとしてどうとなり、アイタ、、、市「何だかさつばり分らない、急かすとゆつくり、トおむつの脊中を打く、是を道具替りの知らせ、むつ「アイタ、、、市「話してお聞せ、ト脊中をさする、此見得雪おろし合方にて道具廻る。

本舞臺三間の間常足の二重、草土手の踏込み上下雪の積りし樹木の張物にて見きり、二重の前一面に御堀の波布を敷き、能所に松の立木、日覆より同じく釣枝、後下手よりはすに柵矢來、うしろ樹木の書割、上手曲つて丸く御堀に土手松の這ひ出しせうこの遠見、都て牛ヶ淵邊の體、一杯に雪布を敷き、よろしく詠への相方雪おろし訓練の鳴物にて道具留る、ト雪おろし詠への合方右の鳴物を冠せ、向ふより以前前の小山田走り出で來る、跡よりお雪追懸け來りすがり付くを振拂ふ、此内雪しきりに降る、小山田赤合羽をぬぐ、是にてお雪赤合羽を持た儘どうとなる、小山田舞臺へ來る、お雪合羽を持た儘追懸け來て合羽を捨てすがりつく、小山田突のけ行かうとして息の切れるこなし、お雪も息がきれ口のきけぬ思入にてすがり留る、此内雪を遣ひ兩人體をくづし面白き立廻りよろしく有つて、ト小山田振拂ふ、お雪はたち成るを蹴る、お雪ウムト下手へ倒れる、小山田もどうとなり、かつらも亂れ息の切れる思入にて雪を取つて口へ入れ咽をうるほし、ホット思入、詠への相方雪おろし雪しきりに降る、小山田思入あつて、小「ア、誤つたく、今朝高輪禪學寺で、大星殿や原どのが、酒は性根を亂す故、其身を守りつゝしめと、御意見有りしが有難く、身にしみ渡る雪風の、寒さに惣身も冷えこゝえ、された草鞋の覺え無く、式臺かりて履直す、辻に居つたる權平にもつさう酒を勧められ、唾の出る程に呑みたさも、爰ぞと思ひ辛抱せしが、癪になやみし藥とて、たつた一杯呑んだが因果、二杯三杯四五杯と、罪を重ねて茶碗酒、つひには前後も

欠

MISSING

の堀へ打込む、とんと水音水の花バツと立つ。雪「ヤ、コリヤ何故に大小を。」小「サア腰も身輕に今日からは、お主を女房に町家の住ひ。」雪「そりやアノほんまに。」小「商法立て、暮すが當世。」雪「エ、嬉しうござんす、トお雪小山田にすがる、此時下手よりかん酒屋勘助荷をかつき出で來り、能き所に。」勘「おでんかん酒、ト呼ぶ。」小「オ、い、所にかん酒や。」勘「ヤあなたはさつきの日那さま。」雪「おまへは隣りの勘助さん。」勘「旦那一杯上げませうか。」小「オ、熱くしてくりやれ。」勘「りました、ト合方にて、勘助荷の中より一升徳利を出し、朝靨の茶碗へ注いで盆にのせて出す、小山田ぐつと。」ト息にのみ、胸につかへむせる、お雪脊中をさする、小山田じつと思入あつて。」小「とはいへ一味の朋友が、嘸や不義士と。」雪「エ、ト小山田ホロリと思入有つて氣をかへ。」小「ま、よ、トお雪を引よせ、左の手で抱きしめるを木のかしら。」小「モウ一べいくれ、ト右の手で茶碗を出す、勘助ハイと徳利を取つて立懸る、小山田お雪をじつと見て、色に迷ひし思入、おゆきは嬉敷こなしにて縋りつく、此模様よろしく九ツ半でゴザイと時廻りの聲にて、ひやうしまく、ト雪おろしにてつなぎ直に引かへす。

本舞臺下の方四尺程の家根附の門潜り戸、柱に内山官左衛門と言ふ表札、是より上手一面に黒塀、後三間の手摺附の二階家、上手三尺の戸袋、向ふ上手一間の床の間、鶴龜の掛物續いて違ひ棚、地袋戸柵此下一間の襖二枚明立で、前側一面に手摺附、門冠りに見越の松、上の方に雀形の六枚屏風立廻し、内に絹夜具枕二ツ、此傍に丸行燈銚子、盃臺を置き、都て組屋敷宅の體、舞臺花道共雪布、家體前へ出して飾り宜敷、雪おろし床の三重にて蒸明く。

「降り積る雪に照りそふ月の影、空も心も雪附れて、結ぶ妹春の祝言も、他人交すの内祝ひ、盃すんで床

入に、嬉しさは恥かしさ、うちつくお組が氣を汲んで、馴れしお賤がお杉役、
 ト此内襖をあげ、お組振袖ごき好みの拵へ、お賤中働の女中の拵へにて、お組の手を取り出で来て、
 下手にて、しづ「ほんに町家の者が能く申しました、案じるより産むが易いと、おこがれなされた高田様
 と、今日御婚禮に成らうとは、思ひ懸ない事でござりましたナア、組「夫故私やモシひよつと夢ではないか
 と今もつて、本間のやうには思はれぬわいな、しづ「是と申すも旦那さまのお計らひでござりますから、御
 さまと御睦まじうはやく御子さまを御産成されて、愛らしい御初孫のお顔を、お目に懸るのが旦那さまへ何
 よりの御孝行でござります、組「常々早う聲を取り、孫を見たいとおつしやつた故、さうなつたらば父さまが
 嗚お喜びで有らうわいな、トお組恥かしき思入にて、組「私壹人で行くのかいの、しづ「エ、モ困つたお嬢
 さまでござりますナア、

「物に馴れたる介添の、賤が屏風を押ひらけば、内には高田がとつおいつ、心ならざる祝言に、さしう
 つむいて居たりける、

「まだあなたは御寝なりませぬか、高田「お組殿が参るのを最前から待つてをつた、しづ「さやうでござり
 ましたか、サア、御嬢さま貴方のお出を御待兼ね、早う御傍へお出成されませいな、

「お組はおしづに突きやられ、はつと赧らむ顔をむけ、灯影を厭うておもはゆげに、

トおしづお組を郡三郎の傍へ突きやる、お組郡三郎に行當り、嬉しき思入にてもじくとこなしあつて

「不束か者にござります故、所詮お氣には入りますまいが、是から何卒幾久しくお目懸けられて下さりま
 せ、郡「何が扱縁有つて斯婚姻を取結べば、盡未來迄わが女房、組「スリヤ御眞實でござりまするか、郡「文字

に書いても士は表裏無き者なれば、何しに虚言を申さうぞ、此世は恐か先の世迄も、組「妻に成されて下さ
 りますか、郡「さは去ながら飛花落葉、老少不定の世の中に、とうれひの思入、組「エ、郡「サア死す共一運托
 生なるぞ、組「エ、お嬉しうぞんじまする、トお組嬉しき思入にて膝にすがる、しづ「夫御覽じませ、お嬢さ
 ま案じるよりは、トお組の顔を見る、お組につたりして、組「なんにもいはぬわいの、しづ「早うおやすみ成さ
 れませ、

「氣轉氣輕に首尾見合せ、かたへの屏風建廻し、ホットト息次の間より、様子伺ふ官左衛門、

トおしづ下手へ来る、下手の襖をあげ官左衛門倚一本差にて出で来り、官「おしづ、しづ「旦那さま、官「首

尾はどうちや、しづ「お聲さまも御機嫌よろしく、今お嬢さまと御一所にお休み成されてござります、官「ス
 リヤ御殿には機嫌も能く、娘と共に寐たと申すか、やれ、夫で安堵致した、しづ「今朝からのお心遣ひ、
 嗚御勞れ成されましたらう、私が起て居りますから、貴方はお休み成されませ、官「イヤモツ無理往生の祝
 言故、何うかと案じ居つたるが、二人一所に寐たとは嬉しい、其方も嗚かし草臥れたで有らう、身共は起て
 居る程に、かまはず先へ寐たがよい、しづ「イエ、私はまだ御臺所を片付けねばなりませぬ故、貴方お休
 み成されませ、官「イヤ寐やうと思へど年寄は、嬉しいに付け悲しいに付け、目がさえて寐られぬわへ、

「心嬉敷悦ぶ折から、風のまに、しづ「打ひ、く太鼓の音に耳そばだて、

ト官左衛門嬉敷思入、此時かすめて風の音、向ふ揚幕にて樂太鼓のどん、くを打つ、官左衛門聞耳立て思
 入有つて、官「おしづあの太鼓は何で有らうな、しづ「淨心寺のお開帳へ夜參ではござりませぬか、官「イヤイ
 ヤ法華宗の太鼓ではない、世間もひつそと子の刻過、腹にひくは武邊の太鼓、しづ「夫ならお組で調練の、

夜稽古でがなごさりませう 官「いかさま左様な事で有らう しつ「マア〜お部やへいらつしやりませ 官ム炬燵へ参つて讀書なさうか、

「腹にこたへる太鼓の響、心ならねど官左衛門、おしづが勧めに打つれて俱に下家へ、ト官左衛門太鼓の音に心を残して、下手の襖をあげは入る、おしづ屏風の内へ思入あつて、同じく下手へは入る、

「入る影を疾しや遅しと郡三郎、屏風の内より拔足さし足、角の柱にとりついて目ざす方角打見やり、ト此内郡三郎屏風の内よりさしぞへを持ち、忍び足にて出で来り、二階の手摺へ足を踏かけ、角の柱へ取付き向ふを見て床の合方になり 郡「寒風はげしく降積みし、雪も凍りてさえ渡る、月下にひびくアノ太鼓、最早敵地へ討入りて、大星氏が味方を指揮なす、山鹿流の陣太鼓、一棟高き無縁寺の、裏手に當つて火影の見えるは、正敷敵高野の屋敷、徒黨の人数はわづかなれど、必死を極めし忠臣義士、天のめぐみに本堂を、遂げるは夜半をよもすきじ

「最早男が注進なし足利どの、討手来るとも、

郡「敵を討ちし跡ならば、味方の者の妨ならず、既に先刻自殺なさんと、覺悟極めし一命ぞ、今宵にせまる討入の、妨させじと生きながらへ、聲入なせしも郡三郎、味方の爲といひながら、神明懸けて誓ひたる、誓紙を反古になすのみか、列をもれたる不義士の汚名、すゝくは雪の此高殿、

「諸肌ぬいで抜きはなす、乃は軒のつらより、光するどき業物を、弓手の脇へがばと突立て、引廻さんとなす折しも、屏風押のけかけ出るお組、夫と見るよりすがりつき、

ト此内郡三郎よろしく思入有つて肌をぬぎ、さしぞへを左の脇腹へ突立てる、此時屏風の内よりお組出で是を見て恟りなし、走りよつて刃を持ちし手にすがり付き 組「コリヤ何故の御生害、コリヤマアどうしやう何としやうぞいなア、トよろしく愛ひのこなし、

「止むる娘の聲聞き付け、只事ならじと官左衛門、おしづも共に走り出で、

トお組、郡三郎へすがり留める、ばた〜になり下手より官左衛門おしづ出で来り、此體を見て恟りなし 官「ヤ、コリヤ聲殿には名をしみ、身の言譯に一命捨てしか しづ「早まつた事成されましたナア、

「いへば手負は威儀あらため、

ト郡三郎思入有つて 郡「イヤ切腹なすは兼ての覺悟、早まつた死は致さぬぞ 組「兼て覺悟とおつしやるは、どう言ふ事か其譯を、お聞かせ成されてくださりませ、

「すがり歎けば吐息をつき、

ト竹笛入の合方になり、郡三郎思入有つて 郡「事あたらしく言はず共、其方も定めし聞いたで有らう、亡君の恨みを報せんと、大星殿を始として、徒黨を結びし四十餘人、數ならね共某も列に加はる義黨の人、既に今宵討入と、事極まりし期に臨み、兄元助が一大事を、迂濶に口外なせし故、舅殿より足利家へ申達されなば去年より、思ひ〜に姿をやつし、附ねらつたる味方の辛苦も、水の泡故列を洩れ、

「不義士の汚名身に負ひて、聲入なせし郡三郎、敵地へ味方が討入れば、

郡「冥途の魁いさぎよく、切腹なさんと兼ての覺悟、さはしらすしてお組が悦び、三々九度の盃も、此世の別と呑む苦しさ、心ならずも床入なし、子の刻過ぎて打つたるは、山鹿流の陣太鼓にて、討入なした

る正敷合圖に、是迄なりと身の言譯に此自殺、よしなき我を舞に取り、お組を始め勇殿、御苦勞懸けるも前生から、約束事とおゆるし下され、

「義を立通す高田が自殺、扱はさうかと取すが、お組が心くみわけて、おしづも共に泣伏せば、官左衛門齒がみをなし、

「今更いつて返らねど、世にも稀なる郡三郎に、可惜命を捨てさせしも、此官左衛門がなせし業、義理有る娘が日頃の願ひ、叶へて遣りたい計かりに、包み隠す一大事を申達なすと此方を脅し、今宵をすごさす舞入させ、忠義を捨さすのみならず、不義士の汚名身に負せ、切腹させし勇が無慈悲、忠義一圖な舞とのへ、顔を合すも面目ない、親が手を下げ詫ねばならぬ、返すくも残念至極、ゆるして下されコレ舞殿、

「残念至極と官左衛門、拳を握りはらくと、悔み涙にぐれば、泣入る娘も顔をあげ、
ト官左衛門よろしく、述懐の思入れ、お組も思入有つて
組「これといふのも此くみが、郡三郎さまにこれがれし故、子の可愛さに父さまが、申達なすとおつしやつて、無理に私が舞がねに、お貰ひ成されて下された、其お情が仇となり、夫に命捨てさせて、親に歎を懸けるのも、元はといへば私故、お詫は此身が誰よりも、先へいはねばなりません、どうぞ許して下さいませ、ト辭儀をなし
組「申譯には此場にて、

「此身も俱にと言ひさして、父のさし添手を懸ければ、是はとおしづが抱きとめ、
トお組思入有つて官左衛門のさし添へ手を懸けるを、おしづ留て
組「死なうとお覺悟なされしは、御尤ではござりますが、あなたが命捨てたとて、お舞さまのお命が助かる事でもござりませぬば、死なすと仕様がござりませう、マア〜待つて下さりませ。

「マア〜待つてと止むれば、手負も苦しき息をつき、

「其志は忝いが、本望遂げてもとげいでも、徒黨の者は一命を、捨つるは兼て身の覺悟、益無き我へ義理立に、そなたが死なば子を思ふ、勇殿の心へそむく、たとへ一日半日でも夫婦となるは定まる縁、死する命をながらへて、我無跡を弔ひくりやれ
組「ヤン御やさしい舞さまの、あの御詞に随うて、死ぬるお命生のははり、七日〜の御回向を、御念願に成されませ
組「イエ〜たとへ何とおつしやつても、死なねば女子の操が立たぬ、

「是が町家の娘なら、生ながらへて居らりやうが、たらはぬながらも武士のたね、夫を殺して此儘に、どうマア生きて居らりやうぞ、

組「どうぞ放してくりやいなう、トお組よろしく有つて
官「オ、夫へ女子の操を立て、死なうと言ふは武士の娘、適れけなげな所存ながら、そちが命を捨てさせまいと、無理所望せし郡三郎、其舞故にそちを殺さば、實の親たる先代の官左衛門殿へ言譯なし、たつて自殺致し度ば我も俱々切腹なさうか
組「サア夫は「思ひとまるか
組「サア「切腹なさうか
組「サア「サア「二人「サア〜
官「思ひ留るであらうかな
組「イエ〜親のお詞でもこればかりは、

「こればかりはゆるしてと、いふに手負は聞兼ねて、
ト此内お組官左衛門よろしく思入有つて郡三郎きつと成り
組「我子を思ふ慈悲心の、親の詞を用ゐずば、我も夫婦の縁を切らうか
組「サア夫は「死ぬる命をながらへて、義理有る親に苦勞を懸けず、我亡跡を弔ふが、死ぬるに増る女子の操、早まつた死を致すまいぞ
組「スリヤ死ぬるにも死なれませぬかハア、

ト泣伏す、

「思ひせまつてとつおいつ、迷ふ心を取直し、持つたる刃にふツつりと、みどりの黒髪切りおとせば、トお組思入有つて、さしぞへをぬき髪を毛をふツつりとさる。」「ア、コリヤ何故にお娘さまには、夫婦の縁を切るといふ、お詞故に是非無くも、生ながら上からは、ふた、び夫を持たぬ氣に、切つて捨てたる此黒髪、身は墨染に姿をかへ、後世を弔ふ心故、尼に成されて下さりませ。」「誰しも惜む黒髪を、ふツつり切りし娘が貞節、望に任せて尼となさん。」「スリヤおゆるし成されて下さりまするか、有難うござりまする。」

「両手を合せて伏拜めば、官左衛門は歎息なし、

「返すくも世に稀なる、忠臣義士の聲を殺し、真心孝女の娘を尼になすも、是皆我誤り、官左衛門もよい年をして、思案はなきかと同役に、思はるゝのが面目ない、今日迄上の勤にも、人に非難をいはれざる官左衛門が、あすからは後指をさるゝ悔しさ、我胸中を三人共、推量してくれいやい、

「今は日頃の我も折れて、泪にくれ、ば人々も、愁にしづむ其折から、此家を目がけ驅來る元助、ト官左衛門よろしく思入れ、どんくばたくなり向ふより元助肌ぬぎ細だすきにて蜜柑籠を小脇に抱へ出で来る。跡より中間丸助しやうぶ皮肌立にて六尺棒を持ち出で来る、

「跡を追來る高野の家來、己は鹽治にかたんの者、覺悟ひろげと棒おつとり、打て懸るを身をかはし、突のけ蹴のけはせ來り、

ト花道にて一寸立廻り、舞臺へ來り二階を見あげ。元助「郡三郎は何れに居る、未だ一命捨てざるか、

「呼はる聲に高殿より、手負は下を見おろして、

ト元助は丸助を投げのける、郡三郎手負の思入にて柱へ取付き、手摺へ踏かけ下を見て。郡「左いふは兄の元助どのか。元「最早自殺いたせしか。郡「オ、身の言わけに切腹なしたり。官「合點行かざる元助殿、聲が自殺をしたは如何に。元「最前弟が舞入に、跡へ殘せし書置にて、自殺致すを存じました。官「存居つたら其時に、何故止めてはくれざるぞ。郡「血すぢの兄御で有りながら。しづ「さりととはつれない元助どの。元「サア止めやうと存せしかど、思ひ詰めたる鐵石心、とまらぬ事を知つたる故、其書置を所持なして、大星様へまつかうと、弟が忠義の大略を御物語いたしたり。郡「ム、能を語つて下すつた、夫にて思ひ置く事なし、シテシテ敵地の様子は如何に、

「いふに元助小踊なし、ト大小入りの合方になり、元助思入有つて。元「入江町の九ツを開て直さま驅付見れば、まだ討入の其前故、こなたの書置御渡し申し、跡へ下つて待つ折柄、大星さまが打立つる太鼓を合圖に裏表。丸助「何を、トかかるを立廻つて、元「門をかけやで打こわし、どつと喚いて込入れば、狼狽へ騒ぐ家中の者。官「オ、不意の夜討に度を失ひ、さこそ狼狽いたせしならん。郡「シテ附人はさへすや。元「されば夫より御殿を目懸け、切入る所に打つて出でし、小林平八清水大學、味方もあぐむ必死の働、ト元助、丸助を相手に立廻つて投げのけ、蜜柑籠をとつて。元「爰ぞ我等が高名と、氣轉紀の國みかんの息つき、皮は即座の目つぶしに、敵を目がけて打付け、思はぬ手柄をいたしたり。郡「シテく敵は仕留めしか。元「未だ敵の行方知れず、右往左往に戦ひ最中、され共忠義の一心、頓て敵の首をとり、

「勝鬨上るは瞬く内、氣遣ひ有るなど元助が、汗を流して物がたれば、手負はにつこと打笑みて、ト此内元助丸助を相手に立廻りよろしく有つて、皮は即座の目つぶしと打付くと言ふ件、みかんかごよりみかんを出し土間へばらくとなげよろしく有つて郡三郎心よき思入にて「いまだ師直討とらずは、是より敵地へおもむきて花々しき働なさん」「スリヤ智殿には是より敵地へ」「しかし急所のその深手、」
 郡「五體は爰に終る共、一心こりし我魂魄敵地へおもむき、一ト働き、トきつとなる」「ホ、ウ勇ましき其一言、死するをくつせぬ大丈夫、ト此時時計のせんまいの音して半時を大きく一ツ打つ、是にて郡三郎苦痛の思入れ」「最早近づく此身の致死期」「そんならこれが」「此世の別れ、ト上を見あげ憂ひの思入れ」
 郡「いでや敵地へおもむかん、」

「腹一文字に引廻せば、不思議や虚空へ飛行く魂魄、最期の念ぞ、ト郡三郎手摺へふみかけ立身にて引廻す、能き程に仕かけにて腹はつくりとなり、血しほ流れうつとりとなる、官左衛門鯉口をくつろげシヤンと鎧音をさせる、是にて郡三郎きつとなり柱巻にて向ふをきつと見る、どろくにて誂への人魂相引にて向ふへ引取る、官左衛門借しき物だと言ふ思入、お組おしづはすがり泣く、平舞臺の元助丸助と立廻り上を見あげ皆々引ばりよろしく、三重どろくにてひやうしまく。

十幕目

丑夜八ツ時
 義士黨夜討の場
 寅明七ツ時
 炭置舎本望の場

本舞臺三間の間上手家根附の門、下手冠木門、兩方共誂への名札有り、上下間共黒塀見越の松の樹木、

うしろ張物にて長屋の家根を見せ、上の方大臣柱より屋敷長家中窓の前側、下の方下座の前黒塀にて見切り、都て雪の積りし道具、舞臺花道とも雪布を敷き、都て高野屋鋪内の體、どんくくばたばたにて幕あく、ト右の鳴物にて思ひくく家中の仕出し、夜討だくと入逃ひ上下へは入る、矢張右の鳴物にて下手より家中女房おまめ懷妊の拵へ、細帯で腹を結へ、下女お草行燈を提げ手をとる若徒馬九郎白髮かづら、袴一本差にておまめの腹を押へながら出て來り、

お草「モシ御新造さまどこへ逃げたらようござりませう」「何處へ逃げてよいか私にも知れぬわいの、

馬九「なんでも逃げねばいけません、無常門の脇の塀を外しておとなり屋敷へにげませう」「先達てから

小林さまが、鹽治浪士が徒黨を結んで敵討に來やうも知れぬと、御用心を成されたが、おめかけのお蘭ど

のに、殿さまうつゝをぬかし、御本家の御下屋敷へお引きうつり成さらぬゆゑ、とうくこんな事になつた

くま「アノマアちよんく切合ひます音をお聞き成されませ、こはい事ではござりませぬか」「しかし女と

年寄は逃せくと言ふ聲が聞えますからまだしも仕合」「夜討の者に出合ぬ内少しも早く逃げませう、

トお草手を取つてせり立る」「ア、コレ其様にせきやつても、足がすくんで逃げられぬわいの」「そりや

御懷妊のせいでもござりませうが、いつ御臨月でござりまする」「いつ所ぢやない今月ぢや」「夫は大變

此騒ぎに、もし御生れは成されますまいか」「どうやら虫のかぶりやうが、生れやうかも知れぬわいなう

くま「氣をしつかりとお持ちなされませ、今生れるとおつしやつても前町へとりあげ婆アを呼に行く事も成

りませぬ」「ぢいいはをれど間にあはず、あす迄御辛抱成されませ」「幾何辛抱したうても、出物はれ物

と嫌はず、ア、ア、ア、もうどうか生れさうだく、トおまめ下に居る」「なんば所嫌はず逆外でお産

は出来ませぬ 馬「お湯を沸すに都合もよければ、おうまや迄お出なされませ、ト手を取つて引立つる、おまめ腹を押へて 馬「ア、コレ其様に引張つてくれるな、モウ直に生れさうだわいの 兩人「もそつと我慢を成されませ、ト馬九郎手を引き、おくさ腰を抱き上手へ行懸る、此時上手より磯貝重三、中垣傳藏、角野十平次、雁木四天素綱大小わらち襷鉢巻にて籠を持ち出で来り 磯貝「コリヤ〜待て〜、ト立かゝりとめる、ト三人恟りなして下に居る 三人「どうぞおゆるし下されませ 磯「其方達は家中のものか 馬「ハイ私は御當家で馬役を勤めます、手築大之丞が妻おまめと申しますもの 又「私はおくさと申します、別當の娘でござります 角野「シテ附添居る其方は 馬「ハイ〜私事は馬九郎と申します、譜代の親仁でござります 馬「どうぞお情に命計りは 三人「お助けなされて下さりませ 中垣「氣遣ひ致すな汝らがけして命はとらぬから 磯「師直殿の隠れがを存じ居らばをしへくれよ、何れへお逃成されたか一向に存じませぬ 中「一ツ屋敷に居りながら何存せぬ事が有らう、隠し立を致すが最期、不便ながらも命はないぞ、ト籠を突付ける、三人恟りしふるへながら 馬「イエ〜ほんまに存じませぬ、知つてさへ居りますなら、親で有らうが主人で有らうが 中「此身の命にやかへられませぬ、決して隠しは致しませぬから 馬「どうぞお助け下されませ 角「まだ〜左様な事を申すか 中「是非に及ばぬ此上は、片端から辛刺だぞ、ト又立懸るを 馬「ア、コレ必らずはやまつた事成されませぬ、トおまめ腹の痛む思入にて 馬「ア、苦しやモウ生れさうだ〜 馬「夫は大變でござります 磯「コリヤ〜いかゞ致したのだ 馬「今月が臨月で今生れます所でござります 磯「スリヤ夫なる女が臨月とか 角「往來にて嘸かし難儀で有らう、早く宿所へ召連れまわれ 馬「ハイ〜有難うござります 中「サア〜御新造様お歩行成されませ 馬「モウどうやら出かゝつて

来たやうで、歩行事がならぬわいの 中「コリヤ〜親仁脊負つて連参れ 馬「どう致して私に 中「詞をかへすか辛ざしたぞ、ト籠をさし付ける 馬「ア、脊負ひます〜 馬「ア、くるしや〜、ト馬九郎に脊負はる 馬「貴方より私がかかるしや〜、トおまめを脊負て上の方へは入る、ばつたり轉ぶ赤子笛 中「ソリヤこそ産れた、ト跡から追懸ては入る、三人あたりへ思入どん〜にて 中「いかに御兩所今に敵のしれざるは、兼てしつらふ抜道へ落うせたに相違ない 磯「此上は天井床下迄を詮議なし七ツ迄にしれざれば兼て申合せし如く 角「一ツ所にいさぎ能く死ぬるは味方の覺悟ながら、神明祓を照し給へばしれざる事はよもあらじ 中「今一應家敷のくま〜 角「草を分て詮議なさん、ト磯貝向ふへ思入あつて 磯「アレ〜御兩所御覽成されい、向ふの方よりいどみ戦ひ、是へござるは千崎氏 中「負すおとらす切合ふは、腕前すぐれし者と見ゆる 角「是へ参らば左右より、はさみうちに致してくれん 磯「御兩所ござれ、ト三人上手へは入る、跳への相方どん〜ばた〜にて、向ふより清水大學尻端折り、肌ぬぎ襷鉢巻にて刀をふりあげ、千崎彌五郎雁木の四天素綱草鞋、大小襷鉢巻にて大學に籠をさし付ながら出来り、花道にて一寸立廻り舞臺へ来り、花々敷立廻つて兩人きつと見得 千崎「ヤア最前より見所、衆に勝れし汝が腕前、定めし名有者ならん、斯言ふ我は鹽治浪人千崎彌五郎と申す者、汝を討取り手柄となせば、其名をなのつて勝負なせ 清水「ヤア小癩なる其一言、名乗るも益無き事ながら、一刀の其下に討て捨る鹽治浪人、冥途の土産に言つて聞かせ、兼て鹽治浪人共、主人を敵とねらふ風聞、もし討入らば其時は、死人の山を築かんと、待設けたる某は、神影流の一流極めし、清水大學正住なるは 千「扱は汝は大學よな、死人の山をきづくと有らば、生てはおかぬ覺悟なせ 清「覺悟呼はり片腹痛い討る、ものなら討つて見よ 千「いふにや及ぶ 清「何を小癩な、ト

どん／＼、詭への合方にて、清水、千崎兩人立廻りよろしく有る。此時以前の磯貝、中垣、角野出で、千崎共四人鎧にて突いてかゝる。清水是を相手にはげしく立廻り有つて、清水四人に突いてかゝられ、あしらひかねてたち／＼と跡へ下り、上手の門へおし付けられ、扉うしろへひらいて清水内へは入る、四人つゞいては入らうとする途端、扉びつしやりしまる、四人さんねなる思入。千音に聞えし清水大學、討もらせし上からは、イザ此塀を乗こして、ト立かゝるを。磯「アイヤお待成されい千崎氏、たとへ名高き者にもせよ、かれは枝葉の清水大學。」「味方の者が去年より、寝食忘れて付ねらふ敵と言ふは只一人。」「今に相圖の知らせ無きは、行方しれぬと覺えたり。」「討もらせしは残念ながら、もはやハツに程近し、猶豫致す所にあらず。」「磯「やしきのすみぐ。」「四人詮議なさん、ト叫き合ひ、上下へは入る、矢張右の合方にて上手の門を明け清水顔を出す、中垣鎧を突かける、及びつしやりしめる中垣下に居て伺ふ、下手門をあけ清水顔を出す、磯貝鎧を突つかける、又是にて内へは入り、門の戸をべめる、中垣、磯貝、扉際へ身をよせる、真中の見越の松へ清水出で向ふを見込む、兩人鎧を突出す、清水刀をくはへ鎧の柄にすがりひらりと舞臺へ飛下り、立廻つて兩人の鎧を巻落す、中垣、磯貝つか／＼と行き組付く、清水兩人を相手に雪を遣ひ立廻り、角野下手へ出で雪を取つて目つぶしに打ち、三人あやふくなる所へ千崎出で鎧を突懸け、早き合方にてはげしき立廻り有つて、千崎鎧にて清水を突き、是にてたち／＼と跡へ下り正面の塀へ寄懸る所を、千崎塀迄突通す、清水もがくを中垣鎧を取て又塀へ突込む清水口惜しき思入にて。千「チエ、高の知れたる浪士めらと、見侮つて不覺を取りしか、思へば／＼口惜しい。千「ハテ心地能き、ト鎧をこちあげ。千「事共ぢやナア、ト清水鎧の柄をとらへ、無念の思入れ、皆々ひつぱりよろしくどん／＼にて此道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、向ふ銀地桐紋ちらしの襖、上下折廻し同じく紋ちらしの襖、所々へ詭への蠟燭をさし、能所に大衝立向ふ揚幕へ杉戸を出し、都て高野屋敷廣間の體どん／＼にて道具留る、トどん／＼、相方はた／＼にて向ふより袴も、立の侍四人、抜刀にて逃て出て来る、跡より矢間重太郎雁木の四天素綱大小襷鉢巻草鞋、義士の揃へにて詭への鎧を持ち追懸け出で来り、花道にて一寸立廻り、舞臺へ来り、四人を相手によろしく立廻つて、上の方へ追込む、此時ハツの時計なる重太郎思入有つて、重「今打つ時計は最早ハツ、七ツ迄に敵の在家知れざる時は、去年より積る苦心も水の泡、今宵の雪ともろ共に、はか無く消る義黨の面々、死るも生るも今一時、奥へ踏込み詮議なさん、ト思入有つて鎧を抱込み行かうとする、此時奥より茶道春齋、後鉢巻肌ぬぎ襷にて刀を持ち出で来り、重太郎の前へ立ふさがり春「ヤア夜討に入りし鹽治浪人、奥の間へは通さぬぞ、ト手を開いて留る、重太郎見て。重「留立致すを何者と見れば、年端も行かぬ小坊主、汝如きの命はとらぬ、妨致さず早く逃げよ。春「イヤ／＼何で逃げやうぞ、今宵夜詰の當番にて、御殿に詰めし上からは、命限り敵をふせぎ、叶はぬ時は死ぬ覺悟。重「ハテ連れなる所存ながら、まだ年行かぬ其方が、逃のびたり共恥辱にならず、怪我せぬ内ににげよ。春「我をいたはり逃げよとは、お情厚き御詞ながら、主人の大事を餘所になし、卑怯未練に逃げませうぞ。重「オ、逃げぬと申すは感心なれど、我々今宵討入つて、ねらふ敵は師直殿、外に恨むる者なければ、乃向ふ者は是非に及ばず、味方の邪魔故打つて捨つれど、逃る者には目はかけぬ、逃げよと申さばと／＼逃げよ。春「たとへ何やう仰しやつても、逃げては武士の名義が立たぬ、達て逃げよと仰しやれば、お手向を致しますから、我をば討つてお通り成されい。重「實に尤なる一言ながら、汝を討つて通られるか。春「しからは跡へお歸り

なされるか 重「何故跡へ歸らりやうぞ 春「お歸りなくば勝負致さん、ト切て懸るを鍵にて受留め 重「ハテ適
 れな心ちやナア、ト兩人立廻り助けやうとあしらふ、春齋附入る故是非無く刀を巻落す 春齋取らう
 としてあやまつて脇腹を突きどうとなる 重「ヤ、コリヤ手を負せしか 春「最早さ、ゆる事叶はぬ、何れへな
 りと、ト奥へ行くと言ふ思入 重「命を捨て我を通す大人も及ばぬ茶道が振舞、成人なさは一廉の名高き武
 士になる可きを、残念な事致したり、ト重太郎うれひの思入れ、春齋苦しきこなし 重「長く苦痛をさする
 も不便、一層の事に、ト春齋へとぐめを刺し氣をかへ 重「思はぬ事にて暫時のひま入り、ト後へ侍童人
 出で 重「浪士め覺悟、ト切つて懸るを身をかはし一ト突につく 重「片時も早く、ト鐘を引き見事にほんとか
 へる 重「オ、さうだ、ト鐘をかいこんで奥へはいる、やはりどんくばたくにて向ふより小林平八稽古
 着、まぢ高袴、上へ模様の、女小袖を引かけ大小、血に染し白布にて足を結へ、抜刀にて出で来り、花
 道にて跡先へ思入有つて 平八「鹽治浪士が復讐のさざし有る事察せし故、數度御諫言申せしが、素性知れ
 ざるお蘭に溺れ、只一言も御用の無く、既に十三日のお引移り延引せし故亂入され、首尾能く兼ての拔道よ
 り、君公落のび給ひしが、心元無き今宵の危急、今更いつて返らねど、とくにもお蘭を切害なさは、か、
 る事にもなるまじきを、残念な事致したり、是より御殿に踏み留まり、刀の目釘のつゞく丈、防戦なして
 討死なさん、ト此時上手にてはたくと人音する故、平八思入有つて 平「人音するは浪士共か、小陰へ忍ん
 で打て捨ん、ト思入有つて下手の大衝立の陰へ隠れる、ばたくになり茶道竹齋流し一本差、お蘭着流し
 服紗帯妾の拵へ、是を竹齋手を取り出来る、お蘭ふり拂つて 重「コリヤ竹齋殿には其様に何を狼狽なさ
 んすのぢや 竹「是がうらたへずに居られませうか、鹽治浪人が討入つて女子供の用捨無く、見えが、りに殺

します、早くお逃げ成されませ 重「私は兎もあれ御前さまの、お行方が知れませぬが御別條はござりませ
 ぬか 竹「其儀はお案じなされませぬ、決して御別條はござりませぬ 重「夫では首尾能く何れへか、お立退
 きなされませぬか 竹「兼て鹽治浪人が敵討の取沙汰有る故、我々共迄油断無く、用意致し居つたれど、次
 第に夫もうすらぎて油断なせしは味方の誤り、はからず今宵討入られ、狼狽騒ぎて思はぬ不覺、しかし辰
 巳の拔道へ、御前様には落延給ひ、いか程彼らさがす共、滅多に知れる氣遣ひなし 重「スリヤ兼々の望み
 も叶はず 竹「何とおつしやります 重「サア兼々御用意せし、其拔道より落延び給ふは、御運のつよい御
 前さま、何よりお嬉しうござりますわいなア、トお蘭思入 竹「御前様に御別條なければ、あなたもお怪我成
 されぬ内、早くお逃成されませ 重「女子供に怪我さすなど、徒黨をせしす鹽治浪人、及向ひ立さへ致さね
 ば怪我する事も有るまいから、私は御殿を逃げぬわいの 竹「左様ではござりませうか有様は私がかう言ふ
 騒を幸ひに、あなたと二人で手に手をとって、道行が致したいのぢや、サア早くお逃げなされ、ト
 せり立つる 重「何やら其方がいやつても、私は御殿を放れぬから、其方は早う逃げたがよい 竹「私童人
 で逃げませうなら、疾に裏の犬くぐりから前町へ逃出します、道行が致したい故兎やかうと申すのぢや
 重「エ、時も有らうに此中でんがうしやると許さぬぞ、トきつとなる 竹「軍の中でも女を犯すは、名將
 勇士に儘有る事、古きためしに我も習つて、ト竹齋お蘭に抱付をふり拂つて手をねぢあげ 重「又してもく
 手出ししやると生けては置かぬぞ、ト突はなす、竹齋起上り 竹「アイタク女に似合ぬ今の手の内、我食物
 にはむづかしい、怪我せぬ内に犬くぐりから 重「四ッ道にして逃げたがよい 竹「とはいへ此儘、ト傍へ来る
 重「又てんがうをしやるのか 竹「ドレ尻尾を巻いて逃しませう、ト竹齋思入有つて下手へは入る、お蘭じつ

と思入有つて 蘭は敵は運強くも抜道より逃のびしとか、ト合方になり、「去年殿様御最期より、大星さまを初とし、敵を討たんと徒黨を結び、夫山岡覺兵衛も其人数に加はりしが、不幸にして病死なし、息を引取る際迄も、本望遂げぬが無念なと、言はれし故にどうぞして、夫の替りに忠義が立て度、傳手を求め高野家へ操を捨て、妾奉公、首尾能く家敷の様子を探り、千崎殿が前町に、小間物渡世を成さる、故、備簪の注文と、人目を忍んで内通なし、今宵も他出なき事を、大蔵殿へお知らせ申し、手引なしたる甲斐もなく、八ツの時計も過たるに、今に敵の知れぬと言ふは、神も佛もない事か、親にわかれ子に別れ、幾世の艱難苦勞せし、忠義の程を思し召し、何卒本望遂げるやう、力を添へてたびたまへ、トお蘭よろしく思入有つて手を合せて拜む、此以前より衛立の陰に平八伺ひ居て、扱はと言ふ思入れ、お蘭思はずふりかへり平八と顔見合せ恠りなし 蘭「ヤ平八さまか 平八「能も鹽治の浪人めらを、屋敷へ手引致したな 蘭「そんなら今の様子せば 平八「残らず小陰で聞いて居た 蘭「聞かれし上は、トお蘭隠し持つたる懐剣を抜懸るを、平八髪を取つて引倒し 平八「疾より汝は曲者と、推量なせしが案に違はず、鹽治の家来で有つたよな 蘭「いかにも女子の操を破り、現在敵の妾となり、屋敷の様子を告げ知らせ、浪士の手引致せしは、推量の通り鹽治の家来、山岡覺兵衛が妻なるぞ、ト平八無念の思入にて 平八「知らぬ事は是非なけれど、正敷鹽治の間者なりと、推量せし故我君へ、再三お諫申したれど、御採用無き計りに、浪士共を手引されしか、上杉公の御下館へ御引移りの延引も、汝に迷はせ給ふ故、疾に汝を切害致しなば、君の御身も御安體、打捨て置きしは平八が、是一生の身の誤り、千萬悔ても返らぬ事、今と成つては汝が五體を、八ツ裂にしてもあきたらぬ、エ、残念な事致したり、ト平八お蘭をむごく突はなす、お蘭思入有つて 蘭「欺かれしが口惜

しくば、此身を殺して腹を癒られよ、屋敷の様子委敷認め、手引なしたる上からは、元より死ぬる覺悟の此身、命はさらく惜みはせぬ、殺して恨みを晴して下され 平八「言ふにや及ぶ某が、問者と知つて打捨て置き、かゝる大事になつたる悔しさ、なぶり殺しにして呉れん 蘭「問者に入りしも御主へ忠義、武士の道を辨へなばなぶり殺しに殺さず共、只一ト討に殺して下され 平八「イ、ヤ身をひしびしほに切り刻まねば、主人をだませし腹が癒ぬ 蘭「偽り騙るもお主の爲、忠義の道を辨へずば、こなたもともく冥土の道連れ、トお蘭短刀をかまへる 平八「エ、己らが手にあふ平八ならず、及ばぬ事だは 蘭「何を小癪な、ト詠への早めたる合方、どんくにてお蘭短刀を拂はうとするを平八足で留め、平八刀を抜きふり上げる、お蘭短刀を差つけ、兩人立廻り、お蘭短刀を打落され鼻紙を取つて平八に打附ける、是にて鼻紙バツトちり平八切兼ねるをお蘭衛立の陰へ隠れ、是を小立に兩人立廻り、ド、お蘭あやふくなる、はたくになり向ふより竹林唯七、雁木四天素綱大小草鞋、抜刀にて走り出で来り、花道にて此體を見てツカ〜と舞臺へ来り 唯七「ヤアおせつ殿ではないか 蘭「さう言ふ聲は唯七殿か 唯七「こやつ身共が手柄に貰つた 平八「エ、邪魔立て致すな、ト拂ひのけて兩人きつと見得、大小の鳴物になりはげしき立廻りよろしくあり、お蘭簪をぬいてエ、ト手裏劔に打つ、平八の額へ當りし心にてアツト言つて額を押へ、油紅にて疵附け是より平八受大刀になり、兩人立廻りながら上手へは入る、跡にお蘭思入有つて 蘭「武術勝れし小林ゆゑ、唯七殿にお怪我無きやう、眉間へ打ちし手裏劔の、手疵にどうやらよわりし様子、首尾能く平八討負せ、唯七殿の手柄になるやう、何卒したいものぢやわいなア、トお蘭きづかふ思入れ、奥より以前の重太郎師直を尋ぬる思入にて鎧を下げ出で来る、お蘭は上手へ行かうとする、重太郎鎧の石突で裾をとめ 蘭「コリヤ〜女師直

殿の行方知らぬか 關「エ、さう言ふ聲は矢間どのか 重「オ、こなたは山岡覺兵衛殿の御内室で有つたるか 關「行方をお尋なされる、は、未だ敵が知れませぬか 重「兼て此方の知らせ故、二重壁を打こぼち、上り縁の近道を限無くさがせしが、何れへ隠れ忍びしか、今に敵の在家知れず、大星殿御親子初め、我々共に至る迄、七ツ迄に討得ずば、是迄浪士の者共が、千辛萬苦も水の池、此場を去らず一同に、切腹致す所存でござる 關「スリヤ敵の知れざる其時、一味の方は同じ座に、御切腹をなさる、とか、今宵は茶の湯の催しに、他出無き事しつたる故、お知らせ申せし甲斐も無く、御本望を遂げ給はず、もし御生害になつたらば、悔しい事でござりまする、トお蘭悔しき思入 重「死するは兼ての覺悟故、さらく命はをしまねど、斯討入て本望とげず、切腹なさは未代迄、恥辱となるが残念至極、ト同じく無念の思入 關「今宵は雪に心をゆるし、一ツ臥床にあつたる故、どなたかお出成されたら、お手引なさんと思ふ内、夜詰の者がうろたへて燈火消して闇となり、其間に隠れ忍びし故、爰ぞと思ふくまぐを、共々尋ねさがせしが、知れぬはまたも此外に隠れ忍ぶ所が有つてか 重「わづかな屋敷の四方より、手わけをなして討入りたれば、地中に道があらば知らず、家中に逃げる通路はなきか、何れへ其身を隠せしか 關「最早今宵も八ツ時過、七ツと言うても程近し、モウ半時が生死の境 重「いか成る事て天道が、賊を照し給はぬか、主君の仇を報せんと、義を結びたる徒黨のもの 關「長々浪々なす内に、夫の爲に身を賣れば、又夫故に死する者あり 重「親に別れ子にわかれ、四十餘人が艱難に、袖を濡さぬ日迎もなく 關「君のおうらみ晴さんと 重「思ふ心を神佛の 關「お助けなきはよく〜に 重「武運に盡きし鹽治浪人 關「世にもはかない 兩人「身の上やなア、ト兩人よろしく思入、此時樂太鼓にて引あげの太鼓を打つ 重「アノ太鼓は大星氏が、人数を集める相圖の太鼓 關「人数をお

まよめ成さる、は、敵をお討なされしか 重「但しは切腹をなす知らせなるか 關「もしも行方が知れざれば、最早辰巳の抜道と、茶道が言ひし詞のはし、爰にて辰巳に當る方を、御詮議成されて御覽じませ 重「夫ぞ何より能手懸り 關「とはいへ夫も知れざる時は 重「是今生のお暇乞 關「お名残惜しくも 重「お別れ申す、ト重太郎氣をかへ、きつとなり早き合方、右のどんくにて鍵をかい込み一散に向ふへはいる、お蘭思入れ 關「テモ勇ましい矢間氏、首尾よう敵をおさがし下され、ト向ふへ思入、後へ以前の竹齋出で 竹「能も辰巳の抜道を、浪士へ注進さつしやつたな 關「其抜道を知らせしも、お主の敵が討ちたい故 關「鹽治の家來と聞くからは、色氣を捨て、生けては置かれぬ、ト切つて懸るを立ちまはつて 關「よい所へ血祭り坊主、おのれが命は貰ふたぞ 竹「小癪な事を、ト大小入りしどんくを冠せ、をかしみの立廻りよろしくあつて、お蘭見事に首を打落す、竹齋衝立の前へ倒れる、仕懸にて切首衝立の上へ出る、お蘭是を見て脇差の血をふる、此見得よろしくどんくにて道具まはる。

本舞臺三間の間真中に九尺程の石橋、此左右池の心 柵にて見切り、一面に水布をはり上下雪の積りし樹木にて見切り、日覆より松の釣枝、向ふ打ぬき灯入、奥庭の遠見、舞臺花道共雪布を敷き、よろしくどんくにて道具留る、ト眺への合方どんくばたくにて向ふより以前の平八、唯七切結び立廻りながら出で来り、直に舞臺へ来り、石橋を遣ひ立廻りよろしく有つて雪にすべり、上下へどうとなり、雪にこゑる思入れ、兩人息をつき又刀を取つて立上り、竹笛入の合方になり、石橋を遣ひいろく有つて、ト、唯七雪にすべり池の中へ落つる、どんと水音なし水の花ばつと散る、平八橋の上より池の中を見込み思入有つて、

平「雪にすべつて水中へ、落た浪士は瀧鼠、骸も凍る八寒の、地獄落しにあつた同前、上り来らば逸物の、此平八が只一ト打ち、ト水の音して池より唯七、水入りかつらになり顔を出す、平八みて、平「おのれ浪士め覺悟せよ、ト平八刀を振り上げきつと見得、此時上手より細部彌次兵衛雁木の四天素綱達附大小草鞋、義士の拵へにて短き鎧を持ち出で来り、彌「汝は小林平八ならずや、池中に落しを討取るは近頃以て卑怯なり、平「ム、卑怯呼はり奇怪至極、おのれも鹽治の浪士よな、彌「見忘れたるか、某は、鹽治の舊臣細部彌次兵衛、平「いつぞや柳生の道場で、出合ひし細部彌次兵衛なるか、彌「爰で出合ふは會稽の、平「此大雪に年寄の、入らぬ腕達よしにいたせ、彌「年はとつても覺えの鎧先、平「なんと、彌「うけられるなら受けて見よ、平「言にや及ぶ、ト又眺への合方どんくにて平八、彌次兵衛立廻り、此内下手池の中より唯七刀をくはへ下手へ上り、刀を雪へさし四天をしばらくきつと見え、平八、彌次兵衛橋の上にて一時の見得、大小入に鳴物替つて唯七、平八へ切つてかゝる、是にて平八さし添をぬき兩刀にて立廻り、三人からんでよろしくあつて、彌次兵衛息の切れし思入、唯七は心得る思入、早野宗右衛門、中垣傳藏抜刀にて出で平八へかゝる、是を相手に平八北道へ行き立廻り、唯七花道へ行き又立廻つて舞臺へ来る、彌次兵衛は始終隙を伺ふ思入にて鎧を持ち、あちこちと廻り平八の足を突く、平八たぢくとなる所を唯七脇腹へ突込む、平八刀を落し立身にくるしむ、唯七刀をぬく、平八立つた儘居る、彌次兵衛鎧にて足をかく、平八はつたり倒るゝ、唯七のつかりどめをさす、彌次兵衛紐の附きし扇をひらき、彌「ホ、ウあつばれ、ト扇がうとして雪にすべり、鎧を突くを木のかしら、唯七はつと思入、彌次兵衛扇にてあふぐどんくカケリにて拍子轟。

どんくにてつなき直に引かへす、本舞臺上の方に九尺の炭部や、前側戸を立あり雪の積りし平家根、

下の方丸物の車井戸細釣瓶、上下黒塀にて見切り、向ふ舞臺前に稻荷の宮、土藏、掃除門の書割奥深に飾り、雪の積りし松の釣枝よろしく、どんくにて暮あく、ト矢張どんくにて可笑みの上下より出で、入道ひは入ると床の淨瑠璃になる、

「右往左往に家中の者共狼狽へ騒ぐ其中へ、雪を蹴立て逃來る小者、ヤレ待て暫しと聲を懸け、追懸け來る矢間重太郎、

トどんくばたぐにて、若徒幸内袴一本差にて逃げて出で来り、花道へはつたり轉ぶ、ばたぐにて前幕の重太郎鎧をかき込み出たり、幸内起上り逃げやうとするを、彌「コリヤ、逃げるに及ばぬ汝等如きの命はとらぬぞ、幸「ナニ命はお取り成されませぬとか夫は有難うござりまする、彌「其替り高野殿の有家を其方存居らば、包み隠さず教へてくりやれ、幸「存じてさへ居りますなら教へ申しますけれど、全く拙者は存じませぬ、彌「スリヤ眞以て存せぬとか、彌「命に拘はりまする故、何しに偽をつきませう、彌「しからは當家で辰巳に當るは何れなるか存じ居るか、幸「向ふの井戸を御殿にて、辰巳の井戸と申しまする、彌「スリヤあれなる井戸を辰巳とな、幸「どうぞお助け下さりませ、彌「オ、助け遣はす早くゆけ、幸「エ、有難うござりまする、

「命助かり嬉しさに、足もしどろに立歸る、矢間は非簡を見當に來り、ト幸内嬉敷思入にて向ふへ引かへしては入る、重太郎は舞臺へ來り思入有つて、彌「非簡は辰巳が吉方と、兼て聞たる方位の教へ、扱はあれなる土藏の内か、但しは是なる雜小屋なるか、二重壁の廊下より爰へ落ちしに疑なし、

「心に背きたためらふ所へ、息をばかりに驅れる唯七、はつたと行合ひ聲を懸け、

ト重太郎思案の思入、ばた／＼にて前幕の唯七出で来り重太郎へ行當り、双方恟りし跡へ下つて 唯七

重川、トしらせに付灯入の月出で 唯七 矢間氏か、 重 竹林殿か 唯 シテ敵の行方はいかに、

「あたり伺ひ囁けば、

ト重太郎、唯七に囁く 唯 「ム、スリヤ辰巳にあたる此所に 重 「隠れ忍ぶと覺えたり、ト此時本釣鐘の七ツ

を打つ 唯 「ヤ、あの鐘は 重 「アリヤ淺草寺の七ツの鐘 唯 「最早夜あけに些か一時 重 「此半時が生死の境、

ト炭部やへ思入、此時内にてはつたりと音する 重 「内にて今の物音は 唯 「此雜小屋にうたがひなし、

「勇み進んで雜小屋の、戸をこちはなせば南無三と、踊り出でたる高野の家來、有無をも言はず切りか、

れば、心得たりと竹林が、抜手も見せず切倒す、矢間は鎧を打しごき、積みかさねたる炭俵の、間を

突けば手ごたへなし、穂先を見れば血しほのしたゝり、

ト此内文句の通り唯七戸を引はなす、内より袴も、立の侍抜刀にて出で切つてかゝる、唯七抜合せ立ま

はつて切倒す、重太郎は鎧をしごいて炭俵の間を突き、穂先を見て思入 重 「穂先に血汐のしたゝるは、俵

の陰に忍ぶ者有り 唯 「イデ此所へ引出しくれん、

「かたへの俵をはねのければ、隠れがた無く投出す雜木、唯七焦つて飛んで入り、敵と白髪師直が、

袴がみ取つて引出し、

ト唯七積重ねたる炭俵を取りのける、此時内より薪を投り出す、唯七是を拂ひのけ内へ入る、師直茶の着

附、白の下着好みの袴へ短刀をさし、唯七引立て出で来る、師直拂ひのけきつと思入、重太郎見て 重 「此

雜小屋に忍びし其方、尋ぬる敵にひとしき年齒 唯 「御身が高野師直殿か 師直 「イ、ヤ尋ぬる敵にあらず、

兩人 「シテ其方は何者なるぞ 師 「ふち放されの鹽浪浪人、汝ら如きに名乗らうや 重 「名乗らぬ上は助け置

かれぬ 唯 「討て捨るぞ覺悟なせ 師 「覺悟はり片腹いたい 兩人 「何をこしやくな、

「切てか、れば抜合せ、上段下段下々々、打合ふ刃音こだまにひゞき、いどみあらそふ三人が、蹴立つ

る雪は散亂なし、岩打浪に異ならず、受けつ流しつ戦ひしが、矢間が鋭き切先に、肩口切られてたぢろ

ぐ所を、水もたまらず唯七が、首討落せば取りあげて、

ト重太郎、唯七切つて懸かる、師直抜合せ三人立廻りよろしく有つて、重太郎一ト刀切る、是にて師直と

うとなり下に居る、唯七後からエイト首を落す、眺への切首出る重太郎取上げ見て 重 「年格好は似たれ共、

つひに面を見ざる我々、正しく敵と言ひがたし、ト此内唯七死骸の衣類を見て 唯 「下着に白を着せしは、

家中の者とは思はれず、もしや是が師直どのか 重 「一面に付きし血しほを洗ひ、存せし者に目利させん、

「幸ひ是に車井戸、水汲み上げて打洗ひ、

ト兩人水を汲み首を洗ひ、とくと見て 唯 「額に去年の古疵有れば、師直殿に疑ひなければ 重 「我々共は覺

えぬ面體、目利なければ知れがたし 唯 「何にもせと大星氏へ 重 「此場の様子を知らせ申さん、

「用意の呼子吹きたつれば、衆の合圖大星父子、一味の武士も諸共に、笛をしるべに馳せ集り、

ト重太郎呼子を吹く、小鼓のあしらひになり上手より大星由良之助、打裂羽織野袴大小草鞋、同じく力彌

やはり野袴ぶつさきの拵へ、跡より三階残らす黒四天雁木大小草鞋義士の拵へ磯貝重三眺への太鼓を持

ち、皆々鎧刀を持ち附添ひ出来り 由 「今吹立つる合圖の呼子に、陽の調子を發せしは味方の吉事と覺えた

「たづねる怨敵師直殿の行方しれしか、重「いかにも只今我々二人、山岡殿の妻女たるお節殿の教により、計らず討ちたる此首級、唯「額に古き疵有るは師直殿と思へ共、しかと面體存せねば、兩人「イザ御目利下さるべし、

「首さし出せば打見やり、

ト唯七切首を出す、由良之助是を見て、由「何さま眉間に疵有れば、師直殿と思へ共、某とても國詰故、武州侯の面をしらす、カ「是に集る義徒の方々見知りし方はござらぬか、原「我々共も存じ申さぬ、由「しからは最前からめ置きし、門番人を是へ呼出し、首級の目利致させん、カ「左様ござらば門番人を、中垣「我々參つて召連參らん、

「折しもこなたに開あつて、

ト下手より、千崎「其足輕は拙者めが只今夫へ、

「言ふ聲諸共千崎が、半左衛門を伴ひ出で、

ト下手より前幕の千崎彌五郎、菖蒲革足輕の形の半左衛門へ繩を懸け引立て出で來り、千崎「門番人半左衛門召連れましてござりまする、ト下手へ引居る、由「竹林殿にはあの者に、其首級を見せられよ、唯「ハツ畏つてござりまする、ト唯七件の首を取上げ、唯「額に疵ある此首級、師直殿と思へども、眞偽わかつ目利致せ、

「言ふにおづ／＼打見れば、まがふ方無き主君の首級、はつと計りにはらくと、落つる泪に人々も扱はと推量なしにける、

ト半左衛門首を見てよろしくうれひの思入、みな／＼も扱はと言ふこなし、半「エ、お情ないお姿におなり成されましたなア、ト半左衛門涙を拭ひよろしく思入れ、重「スリヤ此首級は、三人「師直どのとな、半「何を隠し申しませう旦那さまにござりまする、三人「しかと左様か、半「何様包隠ししても隠されませぬ眉間の古疵、ト床の相方になり、半「今更言て返らねど、去年三月殿中にて刃傷に及ばれし、其許故に鹽治殿が御切腹成されし時、跡へ恨の殘らぬやう、御生害遊ばすが御家の爲と奥様が、再應お諫め成されしかど、御用の無き故奥様には、是が病の元と成り、お里へお歸り成されし儘祿の高下は扱置いて、武士は命を捨るが肝要、死する時に死なざれば死に増さる恥有りと、あの折君にも、深く御生害遊ばしたら、此御恥辱はござりますまいに、お命惜み給ふなら、何故小林殿の勧めにまかせ、御本家様のお下館へ、お引移り成されませぬ、要害堅固の所と聞けば、大星殿が采を取れ共、討入る事は叶ふまじきに、君が我強いはつかりに餘多の家來に命を捨てさせ、末代悪名殘し給ふが、半左衛門口惜しうござりまする、

「忠義一圖に首級へ向ひ、悔し涙に降積る、雪も流るゝばかりなり、

ト半左衛門身悶えなし、宜敷思入、由良之助是へ目を付け思入有つて、由「誠心面にあらはるゝ、半左衛門が一言にて、師直殿の首級成る事、慥に知れて大慶至極、カ「矢間、竹林御兩所には、類稀なる今宵のお手柄、職員「去年三月十五日より、中垣「敵とねらふ師直殿を、近松「此場において討ちとられ、本「是にて日頃の恨も晴れ、角「嘘や亡君尊靈にも、早野「草葉の蔭にて、皆々「お喜悦び、重「是と言ふのも山岡が妻女の知らせに手づるを得、唯「はからず是にて討取る首級、千「思へば是迄我々が、艱難辛苦も師直殿故、唯「一分だめに切刻んでも、憎しと思ふ恨は晴れぬ、いつその事に足下にかけて、

「血氣の竹林立ちかゝり、足下に懸けんとす所ぞ、

ト唯七立ちかゝり首を足下にかけてんとす。由「ヤレ疎忽なり竹林氏無禮の振舞召さるゝな 唯「デも此儘に

由「立騒がすとお下にござれ、

「言に是非無く控ふれば、良金威儀を改めて、

由「師直殿の首級と有らば同座なすさへ恐れ有り、

「有合ふ依に打のせて、身を譲り手をつかへ、

ト由良之助懐中より紫の帛袋を出し、上手に在る炭俵へ敷き、是へ首を乗せ下手に住ふ、竹笛入床の相

方になり 由「我々共は鹽治の臣たる浪人共にござりまする、恐れ多くも今日只今、君の尊顔拜したてまつり

カ「是につらなる浪士一同大慶至極に 皆々存じ奉りまする 由「申すもかひ無き事ながら、我々共の身に

取て歎いても猶餘り有り、尊君と言ひ亡主と言ひ、いかなる前世の宿業にや、斯なり行き給ふ事尤御意

恨有る事は、ほゞ承り及びしが、在國故に某は委敷事から存じ申さず、亡主も能く忍び難き事有ら

ばこそ、大切なる御役目をも顧みず、家の滅亡家臣の難儀も思召されず、殿中にて既に刃傷に及び給ひし

が、御運強くも尊君には御別條無く御存命、主君は直に罪科の切腹、

「其御無念はいかばかり、

由「つひに鹽治の家滅亡、本國赤穂を開城なし、知邊を便りて離散なす、臣等が歎を憚りながら御推量

下されい、但不戴天の君の仇、臣下の身として打捨て難く、止む事を得ず徒黨を結び、我々陪臣の身をもつ

て、恐れ多くも武州侯の御邸宅へ亂入なし御首級を給はりし、不禮の段は幾重にも御高免下されい、

「頭を下げて良金が、禮儀を亂さぬ一言に、力彌を始め並居る義士、皆一同に平伏なす、半左衛門は感心

なし、
ト由良之助宜敷思入有つて首へ向ひ平伏なす、是にて皆々一所に辭儀をなす、半左衛門思入有つて 牛「ム

ム驚き入つたる大星氏、かゝる中にも禮儀を亂さず、君へ對して不禮のお詫、是では天の助にて、敵を討

たれし筈なるぞ、人は知らず半左衛門、貴殿を恨に存じませぬ 由「ホ、ウ忝き其一言、良金仇には思はぬ

ぞ「恐れ入りましたござりまする、ト由良之助細目を解けと言ふ思入れ力彌心得 力「千崎氏には細目を

忠臣蔵文庫
出頁之助
先今日はこれぎり、目出度打出し。

校訂者曰く……此の脚本版權興行権とも河竹新七遺族本所區南二葉町三十一番地吉村糸子方に在り、無
斷興行及び轉載等を許さず、興行權版權讓與の件に付きては必らず同家へ交渉すべし。

四十七石忠筋計終

明治四十五年七月二十七日印刷
明治四十五年七月三十日發行

定價金壹圓

不許
複製

編者 饗庭篁村

發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷景長
東京市小石川區久堅町百〇八番地

東京市日本橋區本町三丁目

發行所 博文館

(振替貯金口座東京二四〇番)
販賣部電話本局二六二〇番

刷印所刷印館文博
地番八〇百町堅久區川石小市京東

(工場製本)

版出念記年周五十二業創館文博

書叢大七

博文館創業茲に二十有五年、其間昭代奎運の進歩と大方諸彦の眷顧とに依り。出版の圖書年毎に増し、今や爾を東洋の出版界に稱するに至る。是に於て創業二十五周年の記念として東西文學の粹を集めて、七大叢書の創刊を企て、空前の美本を無比の廉價にて提供し、聊か大方平生の恩恵に酬え以て聖代の文運に貢獻する所あらんとす。

創刊の七大叢書、曰く文藝叢書、曰く國文叢書、曰く漢文叢書、曰く近代西洋文藝叢書、曰く和歌叢書、曰く論曲叢書、曰く俳諧叢書、乃ち是れ咸な我國文學の神髓たり、東洋文學の源泉たる名著を網羅し、また泰西文壇の傑作は、盡く専門名家の手を藉りて翻譯せらる。而も各叢書を通じて方今第一流の耆宿の嚴正なる校訂と、簡明なる註解を施して成る。之を書齋に備ふれば東西文學の精華は、坐らにして晨夕これを清賞するを得む。

晩近古書の翻刻盛んに行はるゝと雖も、多くは漫然たる覆刻に止まり、其内容或は一局部に偏し然らざれば玉石同架のものゝみ、未だ曾て本書の如く能く東西古今に互りて、固く代表的典籍を網羅したるものある無し。況んや内容の完美、裝幀の瑰麗、用紙の堅緻、印刷の鮮美に加へて其價格たるや出版界未曾有の低廉を以てす。

本叢書の發刊はこれ宛がら太陽出でて文壇の六合始めて炳然たるの感あり。

目丁三町木 館 文 博 橋本日京東

文學博士

幸田露伴先生 塚原澁柿先生 校訂

櫻庭篁村先生

藤島武二畫伯 裝幀 橋口五葉畫伯

空押及色刷模倣 天金線製本頗瑰麗

文藝叢書

二十冊 忠臣藏文庫 既刊
 紙數約壹萬頁
 一冊壹圓 十二冊拾圓
 包料一冊拾貳錢

第一卷 忠臣藏文庫
 第二卷 椿説弓張月
 第三卷 頼豪阿開梨怪風傳
 第四卷 道隆栗毛全集

第五卷 俠客全傳
 第六卷 演劇脚本集
 第七卷 忠義復讐傳
 第八卷 南里見八犬傳

第九卷 南里見八犬傳
 第十卷 南里見八犬傳
 第十一卷 世話淨瑠璃名作集
 第十二卷 紀行文編

文藝の人に於ける、其の性情を瀟灑し、其の氣習を閑澹す。功しより少にあらす。目するに閑を消し心を娛ましむるの書を以てして而して之を輕んず可からざる也。聖代泰平、文運隆昌、本館今茲文藝叢書第一期出版に着手し既に其第一卷を發行す。外觀はたゞ賞を士女に求むるが如しと雖も、微意いさゝか補を風教に添へんと欲するなり。是に於て、鑑裁を諸先生に仰ぎ、近古文藝の中に就き、精を取り粗を舍き、趣多くして弊少きものを蒐め刊す。校字は嚴密を期して、俗魚の衍無きを必し、用紙は佳良を極め、破損の虞に遠ざからんを希ふ。印刷の鮮明より裝釘の緻密に至るまで、皆一々心を用的意を致し、實質の美をして廣く流布の諸本に超えしめんと欲す。而して其價を低くして江湖の購得に便にするもの、また佳世の廣布を望むの意に出でずんばならず。若しそれ本叢書の刊行によりて、山村水郭の人も容易に多數の書を得、繁劇忍忙の士も清興を寸暇に取るを得、而して不知不識の間に世態を悟り、人情を會し、敦厚邪を憎み正を愛し、忠恕の風を養ふあるに至らば、俊秀なる古作者の遺業も、其功空しからずして、且や本叢書刊行の微意もまた酬はむ。

文學博士 本居豐穎先生
文學博士 井上頼圀先生
文學博士 萩野由之先生

文學博士 關根正直先生校訂
池邊義象先生註解

藤島武二書伯橋口五葉書伯裝幀
空押及色模樣摺込製本頓現麗

註校 國文叢書

二十冊(行期第一) 菊判總クローヌ上製
紙數約壹萬頁
一冊壹圓 價特十二冊拾圓
包料一冊拾貳錢

源氏物語 附董草 上卷
源氏物語 附董草 下卷
源氏物語 附董草 七論
曾平 我物語 下卷
源平盛衰記 上卷

源平盛衰記 下卷
源平盛衰記 上卷
源平盛衰記 下卷
源平盛衰記 上卷
源平盛衰記 下卷
源平盛衰記 上卷

源平盛衰記 下卷
源平盛衰記 上卷
源平盛衰記 下卷
源平盛衰記 上卷
源平盛衰記 下卷
源平盛衰記 上卷

一國の富強、文明は國民の自信力に原因す。自信力無き國民は富強の民たる能はず、文明の俗たる能はず。自信力は己を知りて彼を知るに起る、己を受ずること深ければ、益々之を富まし、之を文明に勉めんとするは自然の情なればなり。己を知るは我が歴史に通曉するに在り。我が文學を精究するに在り。此の如くにして、初めて我が國情明かに、その長所に愈々之に培ひ、その短所は速に之を補ひ、以て己を完うせむとするに至るべきなり。これ誠國民の本分ならむ。弊館創設以來、夙に心血を此に凝ぎ、この種の事業に向つて、世に貢獻せしこと鮮ならずと信ず。就中誠一般に紹介せし『日本文學全集二十四編』の如きは、蓋し久しく棄られたりしが、我が歴史的文學の復興普及に先鞭を著けしものにして、國文復興、國文獨立の聲はこれによりて喚び起されたることば世人も均しく認めらるゝ所ならむ。弊館は更に現代知名の國文學の泰斗諸博士と謀り往年の『日本文學全集』を更に擴張し、更に精選したる『校註國文叢書』を出版し以て大に學界に貢獻し前條の主旨を貫徹せむことを務めむとす。

文學博士 三島 毅先生
文學博士 高瀬武次郎先生
文學博士 服部宇之吉先生

監修 文學士 久保天隨先生校訂

中村不折書伯裝幀
空押及色模樣摺込
天色 綠 頰 美 本

註校 漢文叢書

二十冊(行期第一) 菊判總クローヌ上製
紙數約壹萬頁
一冊壹圓 價特十二冊拾圓
包料一冊拾貳錢

論孟 中庸 孝經 子語
唐學 詩 選

蒙 孫子、吳子、司馬法、尉繚子、三略、六韜、太宗問答
古文真寶 前集

求 小古 文真寶 後集
詩 近小 思 經錄學

漢學の我邦に行はれしこと、すでに千餘年、維新以後強姦の餘勢、時に餘緒を穿つ能はざるに似たるものありと雖も、それは一時偶然的現象にして、頃る復活の氣運に向ひしは世人の齊しく認むる所、その故他なし、漢學は東洋獨得の社會的心象を發揮したるものにして、その中不朽の教訓あり、少くとも吾人が品性修養の上に斷じて之を缺くべからざればなり、漢籍の講習、長しへに廢すべからず。もし然らずして、徒に外を慕ひ新を追ふに汲々たらば國風民俗、その根柢より動搖し、これを大にしては邦家の前途或は痛哭長息すべきものあるに至らむ。さはいへ、漢學の講習はもとより容易ならず。幸に前代碩學の註釋あるが故に、吾人は之によつて、その真意義を領會するを得べく、これを簡捷便益なる唯一の方法となすなり。
本叢書は、重要な典籍を網羅し古賢が辛苦の餘に成りし平易周匝なる國字解を以て之に充て、細密なる注意の下に字句を訂正したるものにして、庶幾くは、以つて定本となすを得べく、その價の至廉なるは聊か家國の爲に盡さんとする本館の微志乃ち然るのみ。

近代西洋文藝叢書

二十菊判總クロース上製
 紙數約六千六百頁
 第一冊壹圓特十二冊拾圓
 小包料一冊拾錢

表紙空押及色模標摺込
 天金線製本堅牢頗現麗

中村不折畫伯 橋口五葉畫伯 裝幀

- 決 小説 闖露クウブリン昇 曙夢處 女 地 小説 露ツルゲネフ 相馬御風
- サ 小説 ラムポ オ佛フロオベル 生田長江クローエルソナタ 露トルストイ 阿部次郎
- 人 小説 と 超 人 小説 英シ ヨ オ 楠山正雄 死 小説 よりも強 小説 佛モウバツサン 中村星湖
- 死 小説 人の超 家 小説 露ドストエフスキイ片上 仲地 小説 獄 小説 瑞ストリンドベルヒ 森田草平
- 日 小説 の出前 織匠 小説 鼠 小説 獨ハウプトマン 小宮豊隆 サツフ オオ 佛ドウヂユ 鈴木三重吉

文學は人生の表現である。人生を不滅にする唯一絶対の精神的努力である。吾々日本人は、我が國古来の文學に依つて、不滅にされた祖先の生活を見ることが出来る。けれども、今日の如く一般の生活が世界的になつて、彼と此との活動が、一々互に相應する時代に在つては、吾々は單にたゞ生活の源泉を祖先の生活に求めるだけでは満足が出来ない。廣くこれを世界各國民の生活に見て、以て「我々の生活に培ひ概ぐの用意と覺悟とがなくてはならぬ。而して眞によく吾々の生活と其の脈搏を同うし、直ちに共鳴を感ずる所の文學はと云はゞ、即ち西洋近代の名篇傑作を移植せんとするは、實に此の意に副はんとするの微衷に外ならぬのである。

譯さるべきは悉く是れ西洋近代の世界的文豪の名篇傑作。譯者は悉く是れ、近代生活を味知せる現文壇の俊秀、されば吾等は本數冊の出版に依つて徒らに名のみ傳へられて、其實の味ひ知られなかつた西洋近代文學は、始めて其の眞面目を吾々日本人の面前に展開し、吾々日本人の生活を豊かに且つ深遠にすることを信じて疑はない。

校和歌叢書

文學博士 佐佐木信綱先生校訂
 文學博士 芳賀矢一先生註解

中村不折畫伯意匠裝幀

空押及色模標摺込
 天金線製本堅牢頗現麗

第六(行期第一) 萬葉集略解上近刊
 刊總紙數約四千四百頁
 正冊壹圓特六冊五圓五拾錢
 小包料一冊拾貳錢

- 第一冊 萬葉集略解 卷上
- 第二冊 萬葉集略解 卷下
- 第三冊 八代集 卷上

- 第四冊 八代集 下卷
- 第五冊 三十六人集 全一冊
- 第六冊 名家歌選 全一冊

上下二千載の我が文學史を貫いて、國民文學の精髓をなせる和歌の典籍數多あれど、古來最も世に知られ且つ最も重要なものは、萬葉集、八代集、三十六人集等とす。この三種に加ふるに新たに選ばれたる名家歌選の一卷を添へて全部六卷として刊行せむとす。萬葉集は最も便利なる加藤千隆の萬葉集略解をもととし、略解の説を補正せる諸學者の説を髓頭に列記したり八代集は古今集より新古今集に至る八部の勅撰集にして、註釋は北村季吟の八代集抄をもととして、更に之を補正せり。三十六人集は入麿、赤人、業平、貫之等所謂三十六歌仙の家集にして、由來誤字多き流布本を新たに校訂せるものを載せ、名家歌選は公平なる選出によつてよく代表的歌人の作を網羅せり。凡てこれ校和歌の經典と稱すべきもの、而して校訂、補正、選出、いづれも、佐佐木、芳賀兩先生の嚴密細心なる用意によりて成されたり。

文學博士 佐々醒雪先生校訂
巖谷小波先生

高村眞夫畫伯意匠裝幀

空押及色模標
天金線願高麗

俳諧叢書

六(第一期) 菊判總クローヌ上製
總紙數約四千四百頁
正一冊壹圓特價六冊五圓五拾錢
小包料一冊拾貳錢

編第一 俳諧註釋集

編第四 俳論作法集

編第二 名家俳句集附集上

編第五 名家俳文集

編第三 名家俳句集附集下

編第六 俳人逸話紀行集

朴業と眞率なる思想と感情の反射雅俗不偏の平民文學を有すること我國の如きはあらず弊館鑄きに俳諧文庫を編刻發行するや江湖の喝采を博し俳諧の普及上豫期以上の効果を收たるは竊に弊館の誇とする所なり茲に於て弊館は其要求に應じ且創業二十五周年を記念せんが爲め不朽の文献たる俳諧叢書を刊行し若し夫れ裝幀の結構と提携せる特價とに至ては恐らくは弊館の特色を發揮して餘す所なく正に天下の奇觀なるべし更に其校訂に至つては所謂新舊何れの方面よりするも新界の棟梁不偏不黨の佐々醒雪、巖谷小波の兩先生にしていかに内容豊富有益なるかは想像するに難からず天下の俳人諸彦机上運座の間吟花嘯月の序須らく其條の助と爲しこれを座右に侍せしめて離さず愛讀玩味せんか俳諧の大平醜醜味は載せて本叢書の中にあり乞ふこれを探求尋問して自家樂籠中のものとなされんことを。

文學博士 芳賀矢一先生校訂
文學博士 佐佐木信綱先生註解

高村眞夫畫伯意匠裝幀

空押及色模標
天金線願美裝優麗

校註 謠曲叢書

全三冊 菊判總クローヌ上製
總紙數約二千二百頁
正一冊金壹圓
小包料一冊拾貳錢

謠曲は武家時代を代表する國樂にして後世謠曲の淵源を成せるもの、上は中古の文學に基き、下は近世の詞藻を開けり。優雅にして穩健宜なるかな、今日に於て盛に家庭の間に諷誦せらるるや本書に收めたるものは、觀世流の

特色

校訂嚴密、
印刷鮮明、
註解適切、
裝幀高雅、
用紙精良、
價格至廉

内外二百番を根柢とし、貞享元祿版の番外二百番其他各流にわたりの出入を補へるを以て總計五百數十番に達す。下卷には和漢朗詠集をはじめ宴曲諸集を彙集して、郢曲の全觀を得せしめんとす。いづれも新に標註を施したれば、江湖初見の善本なりとす。

編輯 君案思橋石 君波小谷巖
著 君葉紅崎尾 故

著 君步獨田木國 故

紅葉全集

→ (容 内) ←

- 第一卷 ○色懺悔 ○新桃花扇 ○南無阿彌陀佛 ○戀の魂 ○夏夜 ○新色懺悔 ○猿枕 ○七十二文命の安寝 ○風雅娘 ○巴波川 ○拈華微笑 ○此のし ○關東五郎 ○文ながし ○わかれ蚊帳 ○二人むく助 ○二人女房
- 第二卷 ○伽羅枕 ○むき玉子 ○夏小袖 ○おぼろ船 ○紙きぬた ○戀の病
- 第三卷 ○三人妻 ○男ころろ ○袖時雨 ○俵黒兒 ○心の闇 ○むらさき
- 第四卷 ○隣の女 ○腐料理 ○冷熱 ○宵葡萄 ○不首不語 ○三箇條 ○浮木丸 ○八重障
- 第五卷 ○多情多恨 ○千箱の玉章 ○安知歌親林 ○寒牡丹
- 第六卷 ○金色夜叉前編 ○金色夜叉中編 ○金色夜叉後編 ○檀金色夜叉 ○檀々金色夜叉 ○新續金色夜叉 ○煙霞 翠養 ○紅葉山人傳 ○紅葉著作年表

全六冊
菊判特製表裝美紙
正一冊九百五十餘頁
金壹圓八拾錢
小包料各金拾貳錢

獨步全集

→ (容 内) ←

- 編前 ○牛肉と馬鈴薯 ○運命論者 ○巡査 ○酒中日記 ○宮岡先生 ○空知川の岸邊 ○郊外 ○鎌倉婦人 ○神の子 ○源をち ○星 ○園遊會 ○春の鳥 ○少年の悲哀 ○夫婦 ○河霧 ○小春 ○遺言 ○初孫 ○岡水の手紙 ○わかれ ○置土産 ○湯ヶ原より ○日の出 ○非凡なる凡人 ○齒の悲しみ ○馬上の友 ○惡魔 ○正直者 ○第三者 ○女難
- 編後 ○竹の木月 ○二老人 ○泣笑ひ ○清 ○たき火 ○おとづれ ○詩想 ○忘れ得ぬ人々 ○まぼろし ○鹿狩 ○二少女 ○朝子 ○あの時分 ○死 ○波の音 ○號外 ○踏去來 ○別天地 ○初戀 ○縁くづ ○非凡人 ○武蔵野 ○入瓶記 ○湯ヶ原ゆき ○疲勞 ○眩の侮辱 ○都の友 ○生より ○節操 ○窮死 ○戀を戀する人 ○暴風

全二冊
洋裝菊判特製函入美木著者
背像及其他寫真版數葉挿入
前編正價各金貳圓
後編正價各金貳圓
小包料各金拾貳錢

編輯 君案思橋石 君波小谷巖
著 君山眉上川 故

著 君葉一口樋 故

眉山全集

→ (容 内) ←

- 第一編 ○愛折竹 ○風流狂言記 ○お駒 ○有明 ○宵葉 ○大さかづき ○書記官 ○うらおして ○鹿子絞 ○島田くづし ○奥様 ○船橋 ○柴栗 ○うつけ貝 ○寝醒 ○いさゞ川 ○碧水志 ○逸樂編 ○黄昏 ○座影 ○絃聲
- 第二編 ○梅紅葉 ○左巻 ○野人 ○行衛 ○二重帯 ○一軒百姓 ○鶴澤橋 ○三銃士
- 第三編 ○春宵 ○虚偽の價 ○落葉 ○爪木折 ○鏡小袖 ○春潮 ○片影 ○骨積相續三人男 ○浮標 ○萬平 ○凡人界 ○妖艶 ○別氣質 ○希望 ○小妾記 ○喜劇仙臺平 ○裏座敷 ○明眸 ○小町紅
- 第四編 ○新家庭 ○昔の戀 ○梅の案 ○同胞 ○覺道 ○一夜天下 ○寶の山 ○千紅萬紫

全四冊
菊判特製表裝美紙
正一冊八百五十五頁
金壹圓八拾錢
小包料各金拾貳錢

一葉全集

→ (容 内) ←

- 前編日記 及文範 ○若葉かげ ○わか草 ○筆すまび ○誕生日記 ○日記 ○しのおくさ ○道しげのつゆ ○よもぎ日記 ○しのおぐさ ○塵の中 ○塵中日記 ○つゆしづく ○日記ちりの中 ○いはてもの記 ○水の上 ○水の上日記 ○新年の部 ○春の部 ○夏の部 ○秋の部 ○冬の部 ○雑の部 ○唯いさゝか ○にこり江 ○われから ○ゆく雲 ○やみ夜 ○大つこもり ○経つくろ ○曉月夜 ○うれ木 ○間櫻 ○たま障 ○五月雨 ○別れ霜 ○雪の日 ○琴の音 ○花ごもり ○軒もる月 ○うつつせみ ○この千 ○十三夜 ○わかれ道 ○うらむらさき ○たけくらべ ○かれ尾花 ○棚なし小舟 ○森のした草 ○隨感録 ○流水園雜記 ○ほととぎす ○そらとこと ○樟のしづへ ○歌
- 後編小説 及隨筆

全二冊
菊判特製函入美紙
正一冊七百拾錢
小包料各金拾貳錢

名家小說文庫

洋裝美紙函紙入紙各數冊千頁
 洋裝美紙函紙入紙各數冊千頁

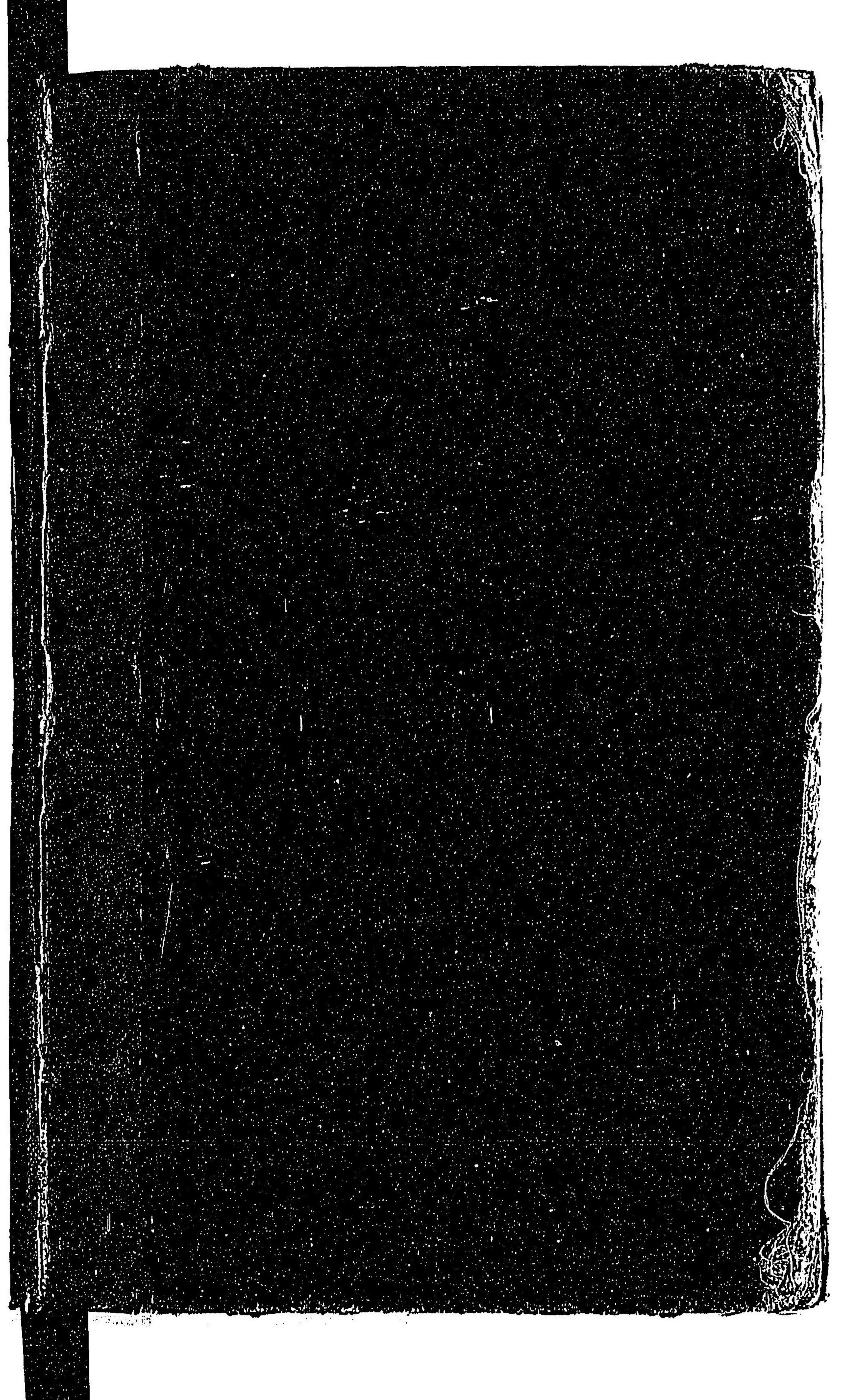
第壹編	第貳編	第參編	第四編	第五編	第六編	第七編	第八編	第九編	第十編	第十一編	第十二編
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
露伴	露伴	澁柿	柳浪	柳浪	花袋	水蔭	小波	秋聲	鏡花	美妙	草村
叢書	叢書	叢書	叢書	叢書	叢書	叢書	叢書	叢書	叢書	叢書	叢書
編前	編後	編前	編後	編後	編後	編後	編後	編後	編後	編後	編後
正價金貳圓	正價金貳圓	正價金貳圓	正價金貳圓	正價金貳圓	正價金貳圓	正價金貳圓	正價金貳圓	正價金貳圓	正價金貳圓	正價金貳圓	正價金貳圓
小包料拾六錢	小包料拾六錢	小包料拾六錢	小包料拾六錢	小包料拾六錢	小包料拾六錢	小包料拾六錢	小包料拾六錢	小包料拾六錢	小包料拾六錢	小包料拾六錢	小包料拾六錢

本文庫は著者が最近文學に著したる代表的傑作を各二十數冊宛に編み出したる。收む。

本文庫は内容の美、装訂の麗、紙質の精、美しき色彩を添ふ。續刊

東京博文館藏版

345
1



345

10

M

089486-000-6

345-1

忠臣蔵文庫

饗庭 篁村 / 編

M45

DBM-1246

